

〔表紙〕

新納久仰雜譜

天保六年未二月ヨリ
同 九年十二月迄

〔久仰雜譜三〕

一天保六年乙未二月十三日、八後諏訪家之御叔母おふミ様御死去、定式半減之忌服ニ而候処左之通被仰付候、御自分事忌中ニ而候得共、御用差支候ニ付忌被成御免候条、明日より可被致出勤旨、但馬殿依御差図申達候、以上、

二月廿一日

伊勢兵部

新納次郎四郎殿

私事忌中ニ而候得共御用差支候付忌被成御免候条、明日より出勤可仕旨、但馬殿依御差図被仰渡趣奉畏候、為御請如斯御座候、以上、

二月廿一日

新納次郎四郎

伊勢兵部様

一三月二日、おふミ様御遺物として永良部嶋紺地芭蕉布

老反・五卷入絵半切老箱、拙者江被下候事、

但滑河母上様江晒老反・煙草入式ツ、并お逸さま・

おはやさまへは紅秩父老反・平本結紙十五枚ツ、

被遣候事、

一三月三日、御用人平川平左衛門取次を以左之通被仰付候、

右当六月

新納次郎四郎

(島津齊宣母)
春光院様貳拾五年御回忌御法事ニ付、御用掛被仰付候
条可申渡候、

三月

但馬

一同廿八日、御用人川田求馬取次を以左之通被仰付候、

公義流人掛
新納次郎四郎

右之通被仰付候条申渡、可承向江も可申渡候、

三月

安房

〔朱書〕
「願之通御暇被下候

四月

但馬

口上覚

私親類治部嫡子諏訪甚左衛門事、長々腹之痛有之、段々手を尽養生仕候得共、今以す切と全快不仕、此上は何れの筋湯治相応可仕旨療医より承申候間、何卒三廻御暇被成下度奉願候、左様御座候ハ、御蔭を以市來温泉江為差越、得と入湯為仕度奉存候、治部事江戸詰仕居候間此段私より奉願候、此等之趣被仰上可被下儀奉願候、以上、

但療医証文相添差上申候、

未四月九日

新納次郎四郎

証文

諏訪甚左衛門事、長々腹之痛有之、是迄折角尽手療治仕候得共今以全快不仕、此上は何れの筋温泉相応可仕と及見申候間、依而証文如斯御座候、以上、

未四月

鳴津主計組御小姓与
御広敷医師
相良淡齋

右願書月番御用人新納主税江差出置候処、同十一日同人取次を以願之通被仰付候事、

〔朱書〕
「本文ニ付同年閏七月九日願之通御免被仰付候、閏七月九日之

場ニ記置也」

一 口上覚

私養姪佐渡嫡子、嶋津市十郎江縁組為仕度内々申談候間、御免被仰付被下度奉願候、此旨被仰上可被下儀奉願候、以上、

未四月十一日

新納次郎四郎

右願書杉原半切ニ相認大身分觸役所江差出候、尤佐渡

殿方茂一所ニ願書被差出候事、

一同廿七日、月番御用人新納主稅取次を以被仰付候、

御用人

新納次郎四郎

右は伊集院妙円寺家御造立ニ付、御用掛被仰付候条可申渡候、

四月

但馬

一五月二日、月番御用人嶋津主計取次を以左之通被仰付候、

川田 求馬

新納次郎四郎

右当八朔御祝儀御用掛被仰付候条可申渡候、

五月

縫殿

〔朱書〕
「本文当八朔掛被仰付置候得共、病氣ニ付閏七月廿九日御断申上候処、代り町田監物江被仰付候事、」

一未六月廿三日、午刻

少将様御機嫌能御光着、矢米御門より被為入候付、家名方并大番頭以下御役々、右御門涯より御台所御門之方江罷出候様被仰渡、拙者茂右之所江罷出奉拝候、

一同廿六日、御書院并御対面所其外諸所御役所等 御覽

被遊候ニ付、御用人座之儀茂御家老座より大番頭座上之口下廊下通より御勝手方御家老座御覽有之、夫より同御用人座縁類御通、夫より表御用人座

御覽之節、非番座縁類敷居江

御膝をつかせられ暫被為居候内、調所突左衛門殿より彼是成行被申上、夫より月番座之方江御通り、是亦同断之御都合ニ而候、右ニ付御用人は一統廊下之方ニ枚目ニ相下り、御礼申上其後は相敬罷在候、月番方茂同断ニ而候、月番付書役助も同断御用人之後ロニ相敬罷在、何れ茂難有奉拝尊顔候事、

但着服は平日之通ニ而候事、

〔朱書〕
「願之通御暇被下候、」

六月

但馬

口上覚

私事大口之内江先祖墓有之、此涯墓参仕度御座候間、日数拾日御暇被成下度奉願候、此等之趣被仰上可被下儀奉願候、以上、

六月廿七日

新納次郎四郎

右願書月御用人町田監物江差出候处、同廿九日嶋津矢柄取次を以願之通被仰付候事、

〔朱書〕
〔本文七月朔日より差越候御届申出置、内実は二日より栗野郷

幸田村拘地見分として、用頼代東郷孫八召列差越致見分候、

同五日帰着いたし、御届は八日ニ、今晩罷帰残り日数三日差

上候段、月番御用人代嶋津矢柄江申出置候事、

一未七月二日、六半時分打立、大口江墓参之御暇を以栗野郷幸田村拘地見分として、用頼代東郷孫八致誘引、家来武田治右衛門・下男源四郎召列出宅いたし、滑河江立寄伺御機嫌申上吉野筋差越候、栗野江は当分地方検者諏訪仲右衛門彼表旅行ニ付、彼是申談度内約いたし置候、左候而中途諸所休ミ、加治木町中宿家来淵脇

甚右衛門所江立寄相応休ミ、暮時分栗野町之中宿家来玉置貞八所江参着、止宿いたし候、且前件之諏訪氏茂近所ニ旅宿ニ付、則見廻ニ而かた／＼世話被致候、且又同刻町部当田口次兵衛・郡見廻伊地知新右衛門等も見廻候、

同三日晴天、九時分より諏訪氏并相談役上田傳右衛門・郡見廻右之新右衛門召列、幸田村拘地見分として差越、同所中宿之家来久松矢左衛門所江立寄候处、焼酎・飯共差出候付緩々休ミ、大鐘時分打立日入時分帰宿、今晩市來新左衛門此辺旅行ニ付見廻被申候、且所役池田清右衛門其外段々見廻候、諏訪氏は始終被参万事世話被致候、且又今晚は徳元寺江燈燼共燈し賑々敷有之候付、夜入過より致参詣候处、郷士一家部より沓ツツ、役目中は老人より沓ツツ、致寄進事之由ニ而、数多相掛候、市來氏等茂致参詣被居候、拙者ハ暫罷在致帰宿候事、

同四日、晴天、今日八ツ後時分より研はし踊有之候ニ付諏方氏致同道、宗廟之正若宮江差越致見物候、市來

新左衛門并町田孫太夫、其外鹿府より在勤之面々茂段々被參居候、正若宮相濟夫より徳元寺并地頭飯屋ニ而踊有之候ニ付両所共致見物候、且仮屋にてハ踊濟、所役々共より市來氏初町田・諏方等之鹿府役々江燒酎共差出候砌、拙者江も同様飯迄も差出候ニ付、致辭退候得共強而申ニまかせ、暫時罷在飯共給候而罷立候、外之衆は残り被居候、左候而時刻大鐘時分ニも相成候得共、直ニ玉置所打立鹿府江帰り候、中途横川町通り過老里計加治木之方ニ而夜入候得共、夜道ニ而加治木町淵脇甚右衛門所江鶏鳴時参り着、緩々休ミ飯共給へ六ッ前打立候処、重富脇元より便船有之致乗船、四ッ過鹿府上町行屋濱ニ着船、則上陸、孫八事は自宅之様被帰候、拙者ハ滑川江參上、彼是御咄共申上候而八ッ前致帰宅候、且幸田村拘地坪付帳等は迄当家江は何も無之候ニ付、此節栗野役所格護之坪付帳致借用写取、且地面茂致見分候ニ付以来之見合左ニ記置候事、

〔朱書〕
外題

文化六年巳三月十七日

栗野幸田村新仕明御檢地帳

郡奉行

和田新吾

安永六年酉五月廿三日免証文

鹿倉捨り大山野五町程田開

山下

下々田六間

畝町廿九七畦六歩

勘四郎八

粗粍表式斗三升

右本之内

同所

下々田十五間

畝町四拾六粍反九畦拾五歩

同人十一

粗六表五升

右本之内

山下

下々田三間半

畝町五式畦拾四歩

同人九

粗式斗式升

同所

下々田四間半
十六間

式畦拾貳步

同人七

籾耆斗七升

同所

山島卅四間
卅四間

耆反五畝廿六步 同人耆

大ツ耆斗五升九合

山下

山島十一間
十六間

五畦廿六步

勘四郎八合

〔朱書〕
大ツ四升七合

合田島五反三畦九步

田方三反耆畦拾七步

島方式反耆畦廿貳步

合籾大豆九表耆斗七升六合

籾八俵三斗貳升

大ツ貳斗六合

高三石四斗六升四合五夕八才外三

新納内藏殿給分

高式石七斗七升耆合六夕六才

高六斗九升貳合九夕貳才十部二木地

郡見廻

伊地知周右衛門

郷士年寄

池田郷右衛門

竿取鹿兒島郡吉田

川畑甚七

右同伊集院

上原次郎右衛門

蔭見市來

松田彦左衛門

蔭見伊集院

馬渡四郎次

筆算帖佐

宮原傳兵衛

右同鹿兒島郡吉田

瀬戸山龍右衛門

書役

田原十兵衛

和田新吾

巳三月十七日

一聞七月八日、御用人新納主稅より、明日御用之儀有之

候間四時罷出候様、但馬殿依御差図申達候段、直ニ致承知候間御受申出置、翌九日罷出候処、於數舞台主稅取次を以、

新納次郎四郎

右養姪佐渡嫡子、嶋津市十郎江縁組願之通被仰付候旨、但馬殿御差図之段口達ニ而致承知候、右ニ付大目付以上并取次御用人江口上書を以御礼廻いたし、且佐渡殿ニも同様願之通被仰付候旨承知有之候事、

一当八月滑川殿父盛徳君拾三回忌被為当候、依之御墓所困垣廻御七回忌之節仕調寄進仕候残り四間余有之候ニ付、此節都而相調致寄進候、右ニ付入口之柱ニ左之通記し置候事、

井垣八間半盛徳君七年忌寄附、同四間半同君拾三回忌修畢、天保六年乙未八月新納久仰誌

受取

錢七貫百拾貳文

内

六貫五百文 井垣四間貳尺貳寸

百拾貳文 字卷ツニ付三文ツ、

五百文 柱石貳本

右之通御井垣仕調差上申候、石并手間代御払下儘ニ相受取申候、以上、

未閏七月廿八日 石切り

野元太次郎

一慈母淨貞君滑川御先祖之御靈前江香爐卷ツ御寄進被遊候ニ付、左之通記置候事、

香爐台脚慈母淨貞君所供阜山家先祖之牌前也、淨貞君年来有寄附之志遂不果、是歲天保乙未夏女聳岩下道惠、於江府拜賜之余金二百疋・絹一端頒贈之淨貞君於是製此器備牌前以成多年之志、是秋正当盛徳君十三年忌、蓋以為奇遇、仍記之、
天保六年乙未八月

次子新納久仰誌

口上覚

〔朱書〕
願之通寄進被

仰付候、

九月

但馬

銀五枚

右は妙円寺出家及焼失御造立ニ付、右之通寄進仕度奉願候、此旨被仰上可被下儀奉願候、以上、

未九月八日

新納次郎四郎

右之通月番御用人町田監物江差出置候処、同十三日同人取次を以願之通被仰付候事、

一竹之内助市先來成所持之爲舟君御詠ミ、さまくにと

(新納忠元)

被為詠候短尺杓枚、一昨年竹之内方より拙者もらひ受候而、園田勘右衛門江遣候、園田氏江先年大口有村隼之介方より被貰候ふこさまかミさまと御書出被成候かなふミ名前并宛書等も無之候得共、爲舟君御書無相違相見得候ニ付、夫を拙者方へ貰受置候処、勘右衛門事昨年死去被致候ニ付、右之さまくにとの短尺又々竹之内方へ代金杓歩ニ被求置候由及承候間、此節本田仁左衛門を以竹之内江致相談候処、随分拙者方江可与之旨被申候ニ付、右之短尺又候貰受、此節より兩品共致家

藏候、後世龕抹有之間敷候、右短尺為謝礼竹之内江金杓歩差送置候事、

天保六年乙未九月十三日記之置也、

一筆啓上仕候、逐日寒冷之砌御座候処、各様被成御揃弥御安泰御勤仕被成珍重御儀奉存候、然は

數馬様初御隠居様益御機嫌克被遊御座候由、從川北十郎様承之、乍恐目出度御儀奉存候、次私儀今日出水迄無事着仕候、尤当初旬ニは御国許江到着可仕之処、

(朱書)
「齊宣公御下向之事也」

御隠居様被為遊御通行候ニ付、筑前国瀬高宿ニ差扣、早速

御前宿高瀬駅迄飛脚老人差遣候而、御道中ニ而は御座候得共、古來之通御目通之儀御用人來迄御願申上候処、早速御聞濟之上右瀬高御茶屋ニ而御目見被仰付、其上御拝領物頂戴仕候、翌日瀬高出立可致候処亦々調所家御通行ニ付、次宿松崎駅御泊宿迄罷越候而、私願望之一条申上候処、大ニ難有様々御仰有之候趣、乍内々御隠居様江も宜敷被仰上可被下候、全先式部様御蔭と

奉存候、余は到着之上早速罷上万々可奉申上候間、是等之儀宜敷御披露可被下候、先ハ右御頼迄如此御座候、恐惶謹言、

九月十七日

畠山助右衛門

畠山數馬様

御役人中

御披露

二白、申上候、此度私御国許江罷下候儀、徳田新左衛門殿江御申遣可被下候、且此書状着次第早速上町旅人問屋財部金助宅江御届可被下儀御頼申上候、以上、

一十月朔日、月番御用人伊勢兵部取次を以左之通被仰付候、

新納次郎四郎

新納主税

右来年頭御規式御用掛被

仰付候条可申渡候、

十月

多門

〔朱書〕
一願之通御暇被下候

十月

但馬

口上覚

伊作西福寺

〔島津忠良母〕

梅窓様御事は私元祖駿河守是久娘ニ而御座候ニ付、此涯参詣仕度候間日数七日御暇被成下度奉願候、此旨被仰上可被下儀奉頼候、以上、

未十月四日

新納次郎四郎

右願書月番御用人伊勢兵部江差出候処、同月七日同人取次を以願之通被仰付候事、

右ニ付十月九日より差越之御届申出置、内実は同十二日帰着候得共、御暇日数残り居候付同十六日出勤、今曉罷帰候との旨月番御用人伊勢兵部江申出候、左候而御家老謁之儀は但馬殿御謁有之候筋可心得旨、同人取次を以致承知候事、

一十月九日、六ツ半時分打立、伊作西福寺并かせ田日新

寺江參詣として差越候、家来櫻井三次郎・下男之仁次郎召列、外ニ御用人座書役黒田吉兵衛、六組触役所書役助木脇休左衛門・染川伊平太致誘引候、左候而伊作之内柳ヶ谷茶屋江休ミ昼飯共給、七時分伊作西福寺江參着候間、直ニ住持江致面会彼是咄合、且西福寺格護之梅窓様御道具掛郷士年寄池上源七郎召呼

梅窓様御守刀并御硯石巻面鷹之模様有之、御服紗沓ツ御化粧皿大少六ツ・御紙台沓ツ・御文庫沓ツ、外ニ川上因幡守久國之被書記置候書付二卷、住持并右掛り年寄り相切封ニ付談合之上為開致拜見候、且又明日屹と參詣可致候間、御靈膳并御経共致説誦呉候様頼入置候而、暮時分西福寺引取、伊作之内片町之武右衛門宅江致止宿候、部当滿留宇左衛門則見廻候事、

梅窓之積善、及子孫有余慶、前大永五年乙酉梅窓逝去矣、日新乞遊行上人他阿弥陀仏、法名号妙芳梅窓住一房、於伊作建立道場、西福寺為菩提寺、所寄附菜地采カ五町、然文祿年間当寺社領勘落之時此寺領皆落矣、承応二年癸巳四月廿二日川上因幡守久國々々、

〔朱書〕
「位牌之面」

寛文三卯天四月十七日

〔島津吉貞男子〕
天眞院殿仁歎宗壽菴主

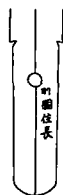
川上因幡守西福寺十八世之時

御守刀図長サ此絵図之通ニ而峯にも刃付居候、鏹涯迄同断

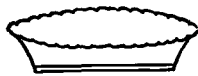


右御鞘柄有之候得共至極損シ居候

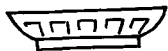
忠長サ図之通



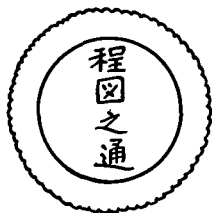
裏ニも有之候得共文字不知



脇より見候図

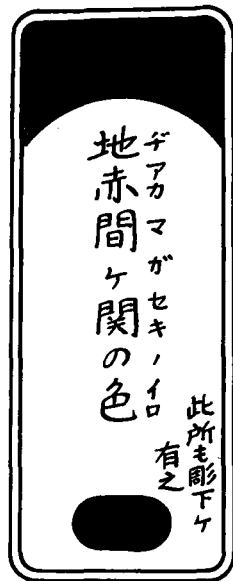
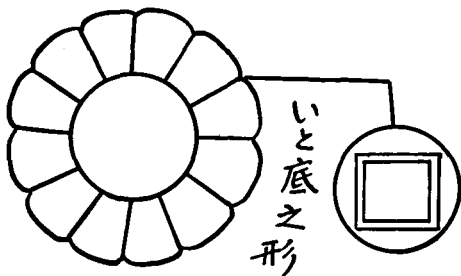


脇より見候図



御化粧皿四ツ
大之図

此程式ツ



デアカマガセキノイロ
地赤間ヶ関の色

此所も彫下ヶ
有之

一同拾日、晴天、梅窓様御正忌日ニ付毎年檀那忌ニ而御
 法事有之候ニ付、相濟候後所役々其外段々御靈膳下相
 振廻候向、四拾人内外有之由ニ付、拙者進上之御靈膳
 は其儀相濟候後進上可致候間、昼時分ニ可相成との事
 ニ付、五ツ過比より打立多宝寺江致参詣、御牌并御廟
 所江致拜礼、当寺格護之文書等致披見候、然共三十年
 計り以前山汐出、寺家廻り等都而致破損、其後造替之
 新寺家ニ而先住頂戴之公文少々有之、外ニは古文書等
 何茂無之候、夫より西福寺江参候処、昨日頼置候通御
 靈膳三汁七菜計ニ而、御菓子茂所調之丈ニ而念入取合
 奉備候、尤拙者致改服、御経読誦之内御仏前江相詰御
 焼香拜礼等仕廻、同寺内御廟所へも拜礼仕候、右ニ付
 官香荷包・御靈膳料金百疋致献納候、外ニ野菜一折・
 料物鳥目式百文住持江相送り候、左候而拙者列合中家
 来共迄御靈膳下、夫々相応ニ被振廻候間、致頂戴罷立
 候、夫より黒川次右衛門と申者案内ニ頼海藏院江差越
 候、当寺江は

日新公御寄進之螺貝二ツ并不動之絵掛物巻幅・雲龍画

沓幅・小遷筆之仙人画沓幅有之致拜見暫罷在、夫より城山江登り候、此所江は日新公御誕生並御産湯被遊候跡ニ印之石伏せ有之候所共致拜見候而下り候、夫より善勝寺江差越、越山公御牌并御廟所致拜礼咄共承候、此寺も式拾年計以前致焼失、古文書等何も無之候、夫より宮内八幡宮江参詣、模寄少々致見物候、八幡馬場之楠木誠ニ奇々妙々成古木ニ而候、夫より天徳寺等江致参詣、暮時分旅宿江帰り直ニ相仕廻、今夜六時分打立かせ田之様差越、五半時分かさせ田日新寺江参着、則吉兵衛を以此節伊作西福寺江参詣いたし候形行等申演、当寺江茂御同様明日も御靈膳進上ニ而御経奉誦誦具候様頼込候処、弥受合候旨承届候付、夫よりかせ田町市郎右衛門と申者所江止宿いたし候、然処部当前田源左衛門見廻候事、

但伊作打立之節池上源七郎・滿留宇右衛門・黒川次右衛門江刻たはこ二包・鬢付式竿ツ、宿亭主江刻たはこ五包・鬢付五竿・穂楊枝・歯ミかき粉など包合残し置候事、

一同十一日、晴天、五半時分旅宿を出六角堂并淨福寺江参詣、(島津貞久母)寛庭様御牌并御廟所致拜礼夫より日新寺江参候処、当住病氣ニ而、常潤院江致隠居候曹受出迎ひ彼是被致せ話、昨夕頼置候通御靈膳二汁五菜計ニ而相調、御菓子も干菓子等取合進上候而、御経被致誦誦候ニ付、拙者改服いたし御仏前江相詰居勤行濟致拜礼候、尤官香沓包・御靈膳料金百疋、并万事之布施として式朱銀一切致進納候、左候而拙者初列合迄も御靈膳下被振廻、家来・下人迄も一汁一菜之飯共被出候間、何れ茂相仕廻

日新公御守札三枚并御洗米・御菓子等致頂戴、且当寺御格護之御文書并日新公御鞍・鎧・轡其外御碗等拜見(并元不意)且神力房画像并笈迄も見候処、勇猛之次第何れも致感心候事共也、夫より常潤院江参詣、是又官香沓把致献納候而、御影并御刀・御長刀拜見仕候、此寺庭江御座禪石と申石も有之候、此所ニ而も暫時罷在彼是咄共承り、夫より釈迦院と申所江(島津貞久)大中様御灰塚御立被成候ニ付、夫江も参詣仕候而、帰

り掛神力房墓参等いたし、模寄^(巻)少々致見物日入時分旅宿へ帰り候、今晚召列候家来三次郎親利右衛門と申者かせ田町人ニ而候間見廻、且鶏之汁・粟之飯共致馳走候ニ付、列合中打寄り致賞翫候、此節諸所参詣ニ付而は九日朝宿元打立候節より致精進候得共、今日迄参詣事茂相済候ニ付、今晚初而魚肉も給候事、

一同十二日、雨中降りニ而候得共、五半比何れ茂打立鹿府江帰り候、中途伊作之町先夜泊候所江立寄り茶共給候処、黒川作兵衛見廻酒肴共差出候付打寄給候、且西福寺住持も見廻候而白餅四十計送り有之、旁ニ而暫時隙取打立、同所柳ヶ谷茶屋江休ミ夫より昼飯共給直ニ打立、谷山瀧之下江暫休ミ、夫より谷山・脇田之様通り夜入五ツ前宿元江帰り着候、列合之三人は模寄^(巻)より銘々相別れ候事、

但かせ田打立之節、三次郎親利右衛門家内中并宿亭主市郎右衛門家内中、部当前田源左衛門并役々相中江刻たはこ五包・鬢付五ツ・穂楊枝・齒ミかき粉二

包ツ、残し置、尤部当并役々相中より庭鳥二羽・玉子少々差送候間前文之通取合置候事、

一同十三日、いまた御暇内ニ付出勤不致候、尤九日より差越候届申出置候間、明後十五日迄筈合候間十六日致出勤、今晚罷帰候と之趣御届申出置候事、

十一月九日、月番御用人平川市左衛門取次を以左之通被仰付候、御数寄屋掛

右掛嶋津主計此節致出府候ニ付、罷下迄之間右之通掛寄被仰付候条可申渡候、

十一月 安房

一御用之儀候間明十二日四時可被罷出旨、但馬殿依御差図申達候、以上、

十一月十一日 新納主税

新納次郎四郎様

御用之儀候間明十二日四時可罷出旨、但馬殿依御差函
被仰渡趣奉畏候、為御請如斯御座候、以上、

十一月十一日

新納次郎四郎

新納主稅殿

右ニ付翌十二日罷出候処、於敷舞台主稅殿取次を以左
之通被仰付候、

青銅式百疋宛

唐本通事

新納次郎四郎

年季^(抱)拘家来

黒岩利兵衛

唐稽古通事

右同人

右同

黒岩勇藏

右は去年十二月屋久嶋漂着之来朝唐船式艘、当正月山
川兒ヶ水浦江送来候処、時化模様相成壳艘之唐船同所
湊江^{ひき}挽入方願出、大筒等手繫^繋打放至極差急候ニ付挽立

候処夜入別而及混雜候、折柄東風吹出渚之方江吹寄、

既ニ可及難船船中致騒動候ニ付、勇藏外通事共下知行
届漸無難湊内江挽入候、然処右通弥時化模様相成外壳
艘之唐船別而念遣有之、利兵衛其外江申付、同様挽入
方申論候得共、不任其意候ニ付、猶又細々申合度々差越
不容易対談等終夜別而骨折相動、且同所出帆後兒ヶ水
浦沖江致汐繫居候処、大時化相成挽船も難乘届、漸々
沓里計も相流既ニ可及危難差見得候、山田新介家来黒
葛原源八外兩人夜入漸々無難乘届、挽入方等ニ付而茂
始終皆共都合能相働、別而奇特成心入之段被 思召上
候、依之為御褒美右之通被下候条、難有頂戴可為仕候、
右御格之通申渡、青銅渡方之儀は御勝手方江可相達
候、

十一月

但馬

右之通被仰付候ニ付、大目付以上并取次御用人江口上
書を以御礼廻いたし候、左候而当人江は麻袴為致着用
拙者於宅則日申渡、御品之儀も当日御用人座ニ而被相
渡候付、是亦於宅同断頂戴為仕候事、

一未十一月十五日、金次郎立初之餅踏いたし、当日少々類中相招祝いたし候事、

口上覚

高山波見浦之紋太郎船三幾丸水主・串良柏原浦新町名子亡傳藏男子金太郎、沖永良部嶋江遠島被仰付置候処、去午十一月致牢死候旨申出、書役東郷直助江為致取扱候処、向々御帳消相洩居候儀氣相付不申、今更大形至極奉存候、依之差扣奉伺候、此旨被仰上可被下儀奉頼候、以上、

未十一月十八日

〔朱書〕
「新納次郎四郎」

右之通月番御用人平川市左衛門尉江差出候、勤方何様可仕哉之旨相伺候処、不及遠慮旨安房殿より同人取次を以被仰渡候、左候而御目通之儀奉伺候処、是亦同人取次を以同廿三日不苦候旨被仰渡候事、

一十二月十三日、月番御用人嶋津矢柄取次を以左之通被仰渡候、

新納次郎四郎

右は串良柏原浦之金太郎沖永良部嶋江遠島申付、便船迄之間入牢申付置候処、致牢死候旨申出候書付、書役東郷直助江為致取扱候処、向々帳面消相洩候を氣不相付、大形之旨差扣相伺候得共、不及御咎目候、向後可入念候、

右可申渡候、

十二月

安房

一十二月九日、月番御用人北郷左門取次を以、来ル十六日(德)礪御茶屋

中将様御前江、大番頭以下当番頭迄貳拾人計緩々被為召候ニ付、拙者ニも罷上候様(命田様意)美作殿より被仰渡難有御受申上置候、然処同月十三日より癩疾ニ而当日近寄倍相煩候ニ付、前日成行を以北郷左門江相付御断申上候、左候而右被為召候ニ付而は、御樽着代金貳百疋ッ、人別ニ致進上候様美作殿より内々致承知候ニ付、進上物は同席同様前日礪御方江相廻置候、外々同席之内伊勢兵部殿ニ茂病氣ニ而御断被申上候由、

但十五日・十六日兩日は大番頭以下当番頭迄惣人数
被為召候而、拜領物等被仰付候由承候事、

御側役格以上

右敷舞台江奏者番出席、進上之御太刀納之、

川上源十郎

新納次郎四郎

伊十院(集) 亘

中西十郎左衛門

一同月廿九日、礪御方御小納戸仙波市左衛門御取次を以
從

右同断家ニ付進上之御太刀納之、

義岡藏人

右同断

礪御方申年頭御規式

御手当之内左之通拔書置

一納太刀之面々江戸詰又は御当地不在合且病氣之人は、

御本丸夫々之於席名代を以御太刀納之、

礪御方申年頭御規式

御次第之内

正月朔日

川上源十郎

新納次郎四郎

伊集院 亘

一來申年頭御規式之次第承知可致旨、用頼御用ニ而被仰
渡御次第書之内左之通拔書置候、
御三殿様江

諸地頭

地頭所無之

中西十郎左衛門

右家ニ付於御本丸奏者番江相付御太刀納之、

義岡藏人

右同断、

一天保七年丙申

正月二日、月番御用人二階堂部取次を以左之通被仰付

候、

新納次郎四郎

^{〔朱書〕}
「本文御用掛之栗川家御叔母様御死去ニ付、差合ニ而御免被仰

付候事、」

右は御旧例之御関狩二月中於吉野被仰付候、依之御用

掛被仰付候条可申渡候、

正月

多門

一同月三日、栗川孫四郎殿御懷御死去被成候、御病氣は

前日夕方中風被為起、則より大切之御様体ニ而三日八

時分御養生不被為叶絶言語候、右は御養母様之御姉さ

まニ而、拙者も御叔母之御統ニ付定式之忌掛ニ而候事、

一御自分事忌中ニ而候得共、御用差支候ニ付忌被成御免

候条、明日より被致出勤候様、安房殿依御差図申達候、

以上、

正月四日

二階堂部

新納次郎四郎殿

私事忌中ニ而候得共御用差支候ニ付忌御免被成候条、

明日より致出勤候様、安房殿依御差図被仰渡趣奉畏候、

以上、

正月四日

新納次郎四郎

二階堂部様

一同月五日、加久藤役々年頭祝儀として見廻候間、例之

通面会いたし盃共遣し、於役所猶又酒・飯共振廻候、

且今日面会之節狩夫銀差免之儀、郷士年寄井上源右衛

門江左之通申渡候、

其元諸在百姓共近年連々相勞、涯々御高格護等茂調兼

候段相聞得氣之毒之至り候、依之拙者地頭中狩夫銀御物方は別段之事情ニ付、当分通ニ而拙者方は乍纒茂上納方差免候条、其趣委曲申渡、農業致出精折角御高格護行届候様可申渡候、

正月

次郎四郎

右ニ付去十二月上納分之儀も、村々庄屋方へ扣置候様申遣置候付、帰郷之上前文申渡、右扣置候狩夫銀茂銘々当人共江相返し、其首尾申出候様、取次川崎次左衛門を以申渡置候事、

口上覚

加久藤

爰元狩用夫

同村門

次郎八

外ニ式百三拾八人

右は是迄老年ニ兩度ツ、狩夫銀差上来候ニ付、去未秋取納仕置候処、此節 御地頭様より厚キ

思召を以当御地頭中御免被仰付候旨奉承知候、狩用夫中江右之段申達候処、難有御趣意ニ付、去秋狩夫銀銘

々頂戴為仕、印形帳相添御礼申上候間、此等之趣を以合候様被仰上被下度奉頼候、以上、

申二月三日

郡見廻定助

沼田清左衛門

郡見廻

松元休右衛門

右同

江平八郎兵衛

郷士年寄助

西田竹知

郷士年寄

井之上源右衛門

右同

萩原理右衛門

御地頭所

御取次衆中

一去冬 中将様御下向、十二月十五日・十六日大番頭以下御役々儀御茶屋御前江被為召種々難有被仰付候、拙者も人数ニ被召加置候処、折柄糲疹煩ニ付不及是非御断申上候処、申正月廿七日拙者頭ニ而無役寄合等都合二十余人被為召、大番頭以下被為召候節之通

御目見被仰付候、御前江緩々被為召、御酒其外種々

難有頂戴被仰付候、且御手自煙草入きせる袋一組青地羅紗

拝領被仰付候次第何も如前候、難有事共也、

但無役之面々は今日御肴料進上、且御小納戸を以袴

地等拝領被仰付候得共、拙者儀は年内進上物・拝領

物等相済居候ニ付、今日不及其儀候事、

右之通難有被仰付候付翌日御礼罷上筈候得共、次男金

次郎癩疹内攻ニ而難症相成、一向付添致看病候ニ付、

後日罷上り御小納戸堅山守衛ニ相付御礼申上候事、

一次男金次郎事、正月廿日過より少々熱氣共有之追日癩

疹相成、廿七日(患)江罷出候留守より内攻いたし難症相

成、拙者暮時分帰着、誠ニ当惑之事ニ而医療手を尽し、

拙者等も実ニ差はまり、一睡も不致昼夜精々看病等心

を尽し候得共、追々煩相増終ニ二月三日申刻三歳ニ而

夭亡、天命ニもあるへくなれ共金次郎性質随分宜敷も

のニ見受、初めの女子も夭亡なれば、かた／＼家内い

つれも幾久しく撫育せしに、また／＼如斯仕合誠ニ言

葉も筆もふるふて涙に沈むはかりの事共也、扱翌四日

興国寺の先塋に葬送し法名

春夢禪童子と号す

右金次郎癩疹内攻いたし難症相成候時分より、肝付家

御隠居靜樹院殿御事も御病氣ニ而、追日難病被為成終

ニ御死去、三月四日夜遺体喜入江引越之節金次郎(ニカ)も

葬送ニ而、千石馬場筋佐司屋敷前通、御番屋前より黒

木屋敷裏門通り、広小路より新橋平佐屋敷前通滑河筋

興国寺江差越之節、黒木屋敷裏門通ニ而靜樹院殿江御

行逢いたし候由、靜樹院殿は久敬君の御実母ニ而、金

次郎統は御曾祖母にて候処、何様之因縁ニ候哉、葬送

ニ而ケ様之行逢は奇遇成事と久仰等聞て猶悲ニ堪かた

し、因て此よし後の今を聞く便りと記し置ものなり、

石塔之後背ニ

春夢禪童子名金次郎、新納次郎四郎久仰次男、以天保

五年甲午十一月十六日生、是歲丙申二月三日以病夭、

越四日葬興国寺先塋側云、

位牌之後背ニ

春夢我次子称金次郎、以天保甲午十一月十六日生、母

久敬女、以病夭、年三歳、葬與国寺山中先塋側

父久仰記

一同八拾

東郷源六叔父

東郷源兵衛

一中将様今般御下向被為在候ニ付、老年之者共江御祝可被成下候間、年輩相糺可申出旨被仰渡趣有之、左之通、

覚

右は男女共八拾歳以上年輩之者御祝可被成下旨被出候ニ付、相糺名前書付を以可申出旨被仰渡趣承知仕相糺申候処、右之通御座候間此段申上候、以上、

加久藤

申正月十三日

組頭

齋藤多次右衛門

十郎右衛門親隠居

郷士年寄

萩原理右衛門

一年八拾四

家督

御地頭所

一同八拾二

江平彦兵衛

御取次衆中

右同

右之通申出趣承届申候、当分私地頭所之故此段申出候、

一同八拾

園田清八

以上、

永山矢右衛門

申正月十五日

新納次郎四郎

一同八拾四

瀬戸山彦次

祖母

宮内字平次

母

一同八拾三

加久藤

母

地頭江

母

一同八拾六

加久藤

母

銀耆兩宛^(丸)

前文七人之名前略ス

中将様今般御下向被為

在候処、右者共及八拾歳以上候段被聞召上、思召を

以御祝右之通被下候条、難有頂戴可為仕候、

右之通於地頭仮屋所役々出席之上申渡、婦人之儀は

仕来之向を以申渡候様可取計候、此旨御格之通り可

申渡候、

四月

佐渡

安房

右之通被仰付候ニ付、大目付以上并取次御用人江御礼

廻いたし候事、

一五月十日、御用人北郷左門取次を以安房殿より左之通

被仰渡候、

此節老人御祝ニ付、家来末々之者ハ百歳以上より御祝

被成下候得共、厚

思召を以九拾歳以上より御祝可被成下との御事候間、

来ル廿五日限名前取しらへ申出候様向々江可申渡事、

右之通被仰渡候ニ付、大口木之内村家来鮫島長八事当^(氏)
年九拾歳罷成候ニ付、其段口達覽書を以御用人北郷左
門江申出置候事、

一六月廿九日、御用人北郷左門より、明日御用之儀候間、
四時可罷出旨被仰渡、御受申出置翌朔日罷出候処、於
敷舞台左門取次を以左之通被仰渡候、

新納次郎四郎江

青銅三拾疋

新納次郎四郎家来

鮫島長八

中将様今般御下向被為 在候処、右者共及九拾歳以上

候段被

聞召上 思召を以御祝右之通被下候条、難有頂戴可為

仕候、

右之通於宅申渡候様可取計候、此旨御格之通可申渡候、

^(朱書)
〔佐渡〕

右之通被仰付候間、大目付以上并取次御用人江御礼廻

いたし候事、

右長八江申渡振之儀は何様可致哉之旨、内分御用人迄
相伺候処、他郷江居住之者本郷江招呼申渡候而は迷惑
ニも可相成候ニ付、本郷役々又は支配頭等より居住郷
役々江問合越可申渡被仰渡候間、右之趣ニ準シ可然旨
致承知候付、長八儀も木之氏仮屋江当人又は名代ニ而
も召出可申渡旨、且青銅渡方之儀も左之通被仰渡候旨、
用頼東郷孫八より差引、新納尾之助江申遣候事、

員数略ス

名前略ス

今般 中將様御下向被為

在候処、右者共及老年候段被

聞召上 思召を以御祝右之通被下候ニ付、銀錢之儀は
最寄下代蔵より相渡、銀は料物ニ而夫々無滞相渡候様
御代官受持被仰付候条、如例可被仰渡旨御差図ニ而候、
以上、

申七月朔日

町田監物

北郷左門

御勝手方

右之通細々申越置候通長八江申渡等相濟、難有御礼申
上候段、左之通申越候事、

青銅三拾疋

鮫島長八

錢にして三百文

右九拾歳以上相成、此節

中將様被 聞召上御祝被成下候段被仰渡趣、難有承知
仕候、依之私共請取書認、菱刈与御蔵下代衆方江差遣、
右員数相受取、長八親類窪田甚右衛門名代ニ而罷出候
間、委細申渡錢相渡申候処ニ、別而難有奉存候段申出
候間、右之御礼被仰上可被下候、尤木之氏役目立会相
渡申候、当分新納尾之助事、遠方小川内定番勤ニ而、
私方江相頼申候付、此段申上候、以上、

申八月五日

有村隼之介

東郷孫八様

一 申七月廿三日、御用人町田監物取次を以左之通被仰渡
候、

小普請銀掛

新納次郎四郎

右之通掛被仰付置候得共御免被成候、

右可申渡候、

七月

佐渡

右之通被仰渡候訳は、川上孫左衛門事御用人勤被仰付、
右之掛被仰付候付、拙者は御免被仰付候事、

天保八年丁酉

一 正月三日、御用人川田求馬取次を以左之通被仰付候、

新納次郎四郎

右は御旧例之御関狩二月中於吉野被仰渡候、依之御用

掛被仰付候条可申渡候、

正月

〔朱書〕
「喜入」多門〔朱書〕
「久通」

一 正月廿七日、六時打立伊集院妙円寺御成就見分并御遷

座ニ付、但馬殿初御役々被差越候ニ付拙者も差越候、

書役黒田八郎次・木尾助七被召付候、左候而即日御成

就見分有之、翌廿八日御遷座首尾能相濟則日夕方打立

致帰宅候事、

但伊集院江差越ニ付、米銭等入用賤敷事候得共、為

見合左之通記置候事、

一 白米老斗式升式合五夕

内三升 供廻拾人廿七日朝飯

老升式合五夕 上下昼飯

四升 伊集院ニ而廿八日昼飯

四升 婦之上、上下拾六人晚飯

一 錢六貫九百五拾六文

内八百八文 弁当重老組仕立用

老貫三百三拾六文 酒拾六盃代

五百文 包煙草廿包代

三百四拾八文 蠟燭拾式丁代

百五拾式文 鬻付老斤代

右四行持越用

六百五拾四文 伊集院ニ而諸弘

老貫三百四拾八文 右同献納銀(銭カ)

七百式拾八文 酒拾盃代

百七拾四文 焼酎五盃代

九百文 雇人足二人賃

右三行婦着之扱

右之通米錢扱有之、為見廻記置候事、
(合カ)

正四位下行左近衛中將源朝臣齊興

〔朱書〕

上棟 薩州日置郡伊集院郷妙円禅寺客殿

天保七年丙申七月起功

同八年丁酉正月畢功

〔朱書〕
「本文客殿并書院江同案ニ而相掛候事、」

家老

島津但馬藤原久風

大番頭寺社奉行動

島津求馬源久馮

勘定奉行兼側役趣法掛

三原藤五郎藤原經福

御小姓組番頭兼用人

新納次郎四郎藤原久仰

側用人

本田六左衛門藤原貞前

側用人趣法掛

高田十郎左衛門藤原利容

作事奉行

福崎助五郎平季脩

道奉行細工奉行動

貴嶋甚兵衛源兼澄

目付

本田休兵衛藤原貞愛

國分十右衛門惟宗友張

寺社方取次

東次郎左衛門藤原良賢

横目

前谷伊三次平惟程

蔵方目付

黒岩庄左衛門藤原政裕

作事方下目付

有川源助中原貞雄

作事方下目付

高崎四郎右衛門藤原直當

帖佐為右衛門平 經德

深柄七左衛門源 政直

餅原平右衛門藤原惟中

圖師眞左衛門藤原安郷

大脇主右衛源 為巳

高崎藤五郎藤原直躬

平田藤助平 清貞

家村彦作平 住台

谷村彦助橋 昌徳

野崎善左衛門平 直義

三原源五左衛門藤原經哲

河野小四郎越智通明

富田傳右衛門越智通安

細工所書役

作事方書役定助

細工所下目付

作事方下目付助

作事方下目付定助

石切頭

山口覺之丞平 詳當

大工頭添役

久木山四郎太藤原行次

繪師主取

森 玄心平 良知

塗物師主取

植村平左衛門藤原長旭

中村喜兵衛藤原明數

張物師主取

川越八左衛門平 通良

鋳師主取助

有村市郎平 正吉

仏師主取

大塔正右衛門源 良吉

縫物師主取

有村源左衛門藤原武清

正月廿八日

御遷座之御次第

一朝五時より御供、寺社奉行御用人其外之人数芳真軒江相揃候上、御影前江御菓子御茶湯差上住持御焼香申上飄經有之、直ニ御出鉢相鳴、僧侶其外御役々御供ニ而東廊下通鑑司寮前大門内山門下江御出、山門より仏殿跡通、御家老衆は朝五時より妙円寺江御出、西玄喚（開）より侍衆御案内ニ而書院江御通、御影様御入之節半袴ニ而仏殿跡辺迄御詰之場ニ而御出迎有之、客殿正面より

御入箱檀江奉安置、直ニ御役々西之方縁頼江御詰、御

菓子御茶湯差上、住持御焼香申上飄經有之、終而御役

々御退席、

一御莊殿相濟半鐘相鳴し住持衆僧出席、御役々御出席、

一御靈膳差上、住持御焼香御半斎遶行相濟衆僧着座、侍

衆御案内ニ而

太守様御代參、御家老衆、

中將様 少將様御代參、御側御用人当番頭之場ニ而御

代參、

御内証様より御内々ニ而御広敷御用人御代參、

太守様より大官香五把

中將様 少將様より大官香三把ツ、被遊御寺納、右終

而衆僧退席、御役々御退席、

以上、

〔朱書〕「諸流稽古馬之内より

御借馬被仰付候、

二月

多門〔

口上覚

御借馬卷正

但馬具并中間・沓・籠持人足迄

右は来ル六日於吉野御旧例御閑狩ニ付罷登申管候処、
乘馬病馬ニ而御座候ニ付、御借馬并御借物被仰付被下
度奉願候、此旨被仰上可被下儀奉願候、以上、

二月二日

新納次郎四郎

右御懸掛御用人鳴津矢柄殿江差出置候処、同月五日願
之通被仰付候、

一酉二月六日、御閑狩御旧式ニ付、当朝五時分出宅、御
用人座書役黒田八郎次・橋口彦次・木尾助七・敷根仲
次郎・組方書役石原清之進・西田次郎太召列差越、吉
野村庄屋所ニ而、山奉行山元彦右衛門并書役下役等出
会揃之上列立罷登り、吉野原おろしより少し上之方江
椎柴立置、其脇江押巻敷村有之、其所江着座、則山見
廻より山之神祭如例相勤、一刻ニ而相濟候間、夫より
中之別府江立宿手当有之候ニ付差越弁当共相開キ、山
奉行始下役何れも寄合候処、一刻ニ而引取山方役々引

取有之候ニ付、跡ニ而拙者方一列緩々相休ミ、夕方打
立銘々帰宅候事、

但弁当八寸重巻組、酒沢山并肴類手荒キ品過分持越
候習俗ニ付、其通致手当候事共左之通ニ而候事、

一錢五貫百六拾弍文

内弍貫九百拾六文

酒四拾盃代

六百七拾文

燒酎十九盃代

五百文

弁当仕立代

八百文

鯛巻疋代

百文

下人巻人雇賃

百七拾弍文

馬巻疋雇賃

一白米巻斗弍升

内弍升七合五夕

供廻拾巻人朝飯

弍升七合五夕

右同晩飯

六升五合

上下廿六人吉野ニ而
昼飯

右之通之入目ニ而候事、

行列左之通、

一乘馬

一家来三人
安藤十郎 松雪尚八
又木為十郎

一鉄砲耆挺

一手鍬

一片挾箱

一合羽籠耆荷

一小者

右之通ニ而、拙者支度野袴・野羽織着用、家来共股引・野羽織着用ニ而候事、

一五月十九日、御用人町田監物取次を以左之通被仰付候

事、

一異国船掛

一御兵具方掛

一御数寄屋掛

新納次郎四郎

右之通被仰付候条申渡、可承向江も可申渡候、

五月

但馬

右之通被仰付候、外ニ異国船掛耆人新納主税江此内よ

り被仰付置候事、

〔朱書〕
一本文西四月廿七日御勝手方

御用人上野善兵衛殿江長野源助差出候、

口上覚

大口

木之氏村

一高式百四拾耆石余

右御蔵入

一同九拾耆石余

右嶋津右門持高

一同五拾九石余

右新納次郎四郎持高

右は大口木之氏村之儀、新納次郎四郎持切在ニ而御座候処、先年は百姓三四家内罷居候得共、式拾ヶ年以來都而禿家部罷成、当分所郷士并家来共御高格護仕候得共、近年凶作打統猶又去年之儀極々難波ニ而上納米不足仕、他借又は家財・衣類等相片付皆済仕候得共、人勢不相応之御高格護仕、去年は四拾石程之余り高ニ候処、

当年は百石程ニも相及、弥凶作ニ付而は作職取放れ候

上候、

者共数家内有之、乍漸堀根等を以生計仕居、当分通ニ

酉四月廿七日

新納次郎四郎

而は家来共別而難波仕居、部下下り之願申出、いつれ領

本文ニ付

主方より教方被致儀相当之筈御座候得共、所帯方困究、

田高三百九拾弍石四升余

其上部下り向之儀不取馴之儀ニも御座候得は、手沙汰

大口

之取計調兼申候間、家来共之儀ながら困究之儀難見捨

木之氏村

置候ニ付、御時節柄恐多御座候得共、百姓同様御高格

一門教拾四

護仕居候ニ付、御見合を以部下下り被仰付被下度、左候

一竈数四拾弍

而何篇之儀茂御物御計を以御取扱被仰付被下度奉願候

一作人六拾老人

諸郷百姓共同様之向ニ茂難申上候得共、今形ニ而は差

但木之氏村江罷居候所郷士又は家来共之内、老人ニ

禿申外無御座候付、旁之御取訳を以此涯御救、部下下り

付作職六石余ニ廻ル、

頭御免被仰付被下度奉願候、左様御座候ハ、右余勢

一他借分三百九拾九貫百文

を以人配移者をも追々御願申上候ハ、余り高ニも相及

右壱行貸主証文銘々見届候、

不申、第一御高格護方茂最安可罷成候間、此等之趣被

右は大口木之氏村新納次郎四郎持切在ニ而候処、当分

仰上可被下儀奉願候、以上、

は所郷士家来共之内より作職仕来難波之向を以、御物

但木之氏村持切在ニ付而は、兼而差引頼置候郷士年

御計部下下り之願被申出吟味被仰渡、掛而何分難申上折

寄其外よりも右様問合申遣候、尤御蔵入外給地も

柄、受持同席町田孫大夫廻勤ニ付、村居之榮旁旁之成

過分有之、手沙汰取計難叶御座候ニ付、此段も申

行見分いたし可申越旨致掛合候処、木之氏村之儀は大

御支配之節より百姓纏之家内罷在、作職等は家来又は所郷士之内より致取始末、在役共は以前より家来之内より相勤居、当分は百姓逆は都而禿家部相成候得共、居住者共江割作申渡、折角余り高不及様、是迄之間は掛所役々より致取計来候へ共、全体悪地之地面多、人少之在内手入拵等存分不行届、其上近年打統之凶作ニ付、家来共日用賃取体罷成、今通ニ而は追年差勞御高格護等不相調体可罷成候段、孫太夫方より申越猶又吟味仕候処、大口之儀は一統差勞、郷内殊右体人少之在内御高格護難成、至而難涉之場所候付、願之通御物御計部下り被仰付度、於其儀ハ御蔵入并脇給地高之儀は帖佐与方より足米引給被仰付、次郎四郎領分高は足米不被成下、自分計を以取納差引被仰付、其外取扱向之儀は御物部下り同様、先規之通被仰付方ニ茂可及御座候哉、左候ハ、漸々村居潤付、人配移者等被仰付候ハ、おのつから土地ニ染付、人勢相増候様可相成と吟味仕候、乍然何分御沙汰次第奉存此段申上候、以上、

西五月廿日

郡奉行

〔朱書〕
「一比表郡奉行しらへ之向を以願之通申付候条、如例可被申渡候也、」

六月八日

御勝手方印
取次
上野善兵衛

御勘定奉行

郡奉行

御代官

右朱書之通六月八日上野善兵衛取次を以被仰付、用頼長野源助致承知候、御証文写至翌九日返納いたし候、左候而御取扱振り郡方書役崎山平左衛門江承合候処、先比御免被仰付置追而郡方吟味之上、何年より何ヶ年何部下り被仰付との段可被仰渡旨、平左衛門より承届候事、

天保八年酉六月撰州兵庫出在家町人御本亭小豆屋島山助右衛門御訴訟付、次郎四郎久仰より添御内意之覚、

但助右衛門儀當時町年寄相勤、外ニ同役老人有之、

毎も二人役之規定ニ而下役拾貳人竈九百軒計之由也、

口上御内意之覚

兵庫御本亭畠山助右衛門事内願之儀有之、此内より御当地江差越居、私実家支族之者ニ付、今般願之趣預内談且心添仕、猶又願達仕候向御内意をも申上呉候様承候付、願書細々致内見候処、慶長五年關ヶ原御退陣御帰国之節泉州堺迄

殿様奉始御姫様・川上土佐様・喜入攝津様御着ニ付、小豆屋先祖理兵衛自船ニ而御迎ニ参り、小豆屋方江御入被遊候処、当浦又は一ノ谷辺ニせき衆御座候而御通被遊候事不能成候ニ付、理兵衛御案内仕ぬけ道ひよとりこゑと申難所ニ御姫様ママおい奉り摂州筋江御供仕、其より御国許江御下向被遊候趣申出候、小豆殿家伝とハ乍申、不案内之儀御座候付、世上之旧記を以勘考仕候(島津様志) 惟新様關ヶ原より御帰国之節は摂州住吉まで御立退、自其伊勢平左衛門御使ニ而、田邊屋道與江御頼被遊候得は、住吉之宅迄被為入候処、猶御心遣被思召、

道與兼而入魂之鹽屋孫右衛門(號)之宅江夜通御案内申上暫被遊御座直ニ鹽屋宅より御出船、夫より日州美々津江御着船、御帰国被遊候由、右之節

惟新様御夫人實窓様、(島津家久)中納言様御夫人持明様為御質以前より大坂江被為詰、右通

惟新様住吉迄御退陣被遊候節、御夫人様方御同道ニ而御下向被遊度

惟新様被思召候ニ付、專秀坊と申者大坂御城江差越

惟新様御事 秀頼公為御奉公於關ヶ原被遂御戦死候ニ

付而は、御質之實窓様ニも御暇被下度、尤中納言様御

質之

持明様は如本可被為詰願上、惟新様御方之御質御下向之御手形被出候付、無御心遣可被遊御帰国候得共、

(島津家久室)持明様御下向之御手形不出候ニ付、猶更被尽御吟味、

大田筑前守娘お松と申女中を御質様之筋ニ偽、取持筑

前守は勿論、吉田美作守其外右之お松江被附置暫御跡

ニ可居留旨被仰付、別而迷惑乍被存、御請申上候由、

然共いつれ一大事之御企故一先為御試、最上土佐守娘

ニ女中式人、其外鎌田安房介等男三人被相付、御城より暮時分被為忍出、縦令番人何様見咎目及必死候共、何れ茂其時迄ニ格護相究、曾而相名乗不申様、右之安房介江堅被仰含被差出候所、案中番人見咎目為追廻由、然共面々遁延、夜ニ入漸皆尋合如境為參由、左候而御屋敷居留リニ被仰付置候お松等一列は如何謀出候哉、頓而於兵庫御船ニ奉追付候由、又境之様忍落候最上土佐娘なと列合は何様船手当等仕候哉、御跡より出船仕候而漸豊後辺ニ而追付上候由、左候而実正之御質持明様は御下向之御手形無之ニ付、實窓様御方女中ニ被為相混候而御忍出、大坂川口より御首尾能御出船、於沖御待合翌朝、惟新様御座船ニ被為乗移、皆様目出度御帰国被遊候由、現在御供為仕人之覺書等ニ相見得磋商事と奉存候、然は此度助右衛門訴書ニ泉州境迄殿様奉始御姫様・川上土佐様・喜入攝津様御着ニ付、先祖自船ニ而御迎ニ參り小豆屋江被為入候趣は、右通一旦謀計ニ御取立被為置候大田筑前娘のお松と最上土佐娘之列合共小豆屋を便り、船手当旁頼入出船為仕筋

ニは有御座間敷哉、田邊屋善兵衛と申者書出ニも、惟新様御退陣之砌泉州境田邊屋道與宅江

御光着、御下国之儀被遊御頼候ニ付、兵庫小豆屋申談何角為肝煎、上之趣茂相見得、且長壽院致供關ヶ原江

罷登候井之上主膳覺書も、長壽院御国許出船兵庫江船を着、地下人ニ銀子などを呉相頼候は、当時乱中ニ而

御かミ様なと其外薩摩衆在京被仕候、如何様成事も候ハ、通用を心付可有由條々申置候、定而此人は問屋

なとにても候哉、名を覚不申、大坂ニても同前ニ被成候と書記置候へは、決て右小豆屋なとへ真先ニ申付置

候半、旁を以考合候へは、何分にも薩州人忍下向之衆江致世話、尽懇志候事は別儀有御座間敷奉存候、左候

而小豆屋と申屋号之儀は、關ヶ原御退陣之折、惟新様理兵衛宅江被為入候節小豆粥御祝ニ進上仕候、其佳例

ニ而屋号ニも為被定下趣申伝候事は決而誤ニ而御座候半、然共長壽院事、其以前天正十五・六年ニも

御供ニ而上洛仕居、本より御意ニも相叶候上、石田治部少輔取成も有之、御家老御役迄被仰付、勿論、惟

新様ニも其時分より關ヶ原乱前迄度々御上洛為被遊由候間、左様之御通掛ニ御供仕、小豆屋江被為入、母子御目見仕候事茂有之候欤、就中小豆粥為御祝進上仕候筋申伝候儀も、慶長三戌十二月朝鮮御帰朝より直ニ御上洛為被遊事も御座候由、左様之御祝儀ニ欤為差上事共を、子孫ニ至り無考ニ關ヶ原御退陣之時と口碑誤伝為申欤、何分ニも慶長十五年以前より小豆屋と唱候儀は無疑訛は、魚商売ニ付御分国浦役人中江為被仰渡、紀伊守以下三人之連名御証文通ニ而、凶書頭忠長は慶長十五年戌霜月死去と承候へは、無紛証拠ニ御座候、且又小豆屋薩摩問屋と申儀も、慶長十九寅十一月大坂冬陣ニ付、從 中納言様、為御使川上式部大輔殿江稅所弥右衛門・川上泰助・伊地知吉右衛門其外被付遣、同廿八日兵庫着船之折柄、兵庫御藏本へ被詰居候鎌田左京・猿渡新介・法元仁右衛門等之内、鎌田左京下向之乗船は池田三左衛門殿手之米船と及喧嘩候を被見受早々漕付左京乗船ニ致加勢候様下知有之、米船上乗士老人・水主六人・伊地知吉右衛門等相勵皆海中ニ切流し

其後池田家之船と相知、沖之方江池田家より為番船被出置候大船罷居候間、則法元仁右衛門を以成行之届被申達、決而可及大事と式部大輔殿を初いづれも格護相究被待居候砌、寺澤志摩守殿衆被見当、直ニ平野源右衛門主取ニ而人数式百人召列陸地左右ニ相備、薩州船為加勢船着之場迄被馳統、式部大輔殿初此方人数主從共彼之方備之中ニ包込ミ無難ニ上陸為致、則兵庫薩摩問屋小豆屋之様為被送付事、其節式部大輔殿為被召列家来之内長命之者罷居、延宝四年寛書仕置候内ニ相見得、是又現在之証拠ニ御座候、且又元和元年夏陣之比ニも御座候哉、大坂御藏奉行福崎新兵衛・大寺主計兵庫ニ被參候節、池田武藏殿家来衆兵庫相固メ居、薩州殿は大坂城中ニ被為籠候哉と尋掛候得共、兩奉行否返答無之候処、小豆屋助右衛門存知候半迎、籠舎迄為被仰付由、左候得共無程此 御方様は城中ニ不被為籠事相知れ出牢被仰付候、其事薩州江相聞得、為忠分御知行可被下と之御内達も御座候得共、兎角御船宿被仰付被下候様申上、其通被仰付、不相替御国許御用不殘相

勤候趣之古書留も小豆屋江持伝罷在、旁以御譜代之薩摩問屋ニハ無別条事ニ御座候、然は惟新様御事は境より

御姫様方は大坂川口より前件之通御出船被遊候儀無疑小豆屋御世話為仕、御姫様などは右通持明様御無難ニ被為通候計之謀ニ御取立有之候、大田筑前娘のお松欵、最上土佐娘之列合ニ余程抛有之哉ニ相考申候、夫故田邊屋道與・鹽屋孫右衛門并道正庵・三輪山等之儀は無申迄、蒔絵屋彦七・中村常和など御国諸士等之忍下向旁之為ニ尺懇志候面々は、銘々御知行御切米等過分被成下、尤蒔絵屋彦七江は蒔絵御用等被仰付候様、

惟新様御書中ニ相見得、田邊屋道與使江は唐物都而可引渡旨本田助之丞状杯有之、左様之類ニ而小豆屋事茂魚商壳懇望仕候ニ付、御免状且御紋付小指までも被下置候半、何分ニ茂關ヶ原御陣前後より御国御用相勉候儀は、右通諸旧記ニ相見得無別条奉存候、勿論御記録等ニハ相知候事ニ可有御座候得共、不案之儀夫形為願出候茂恐多奉存、段々相糺候処、右之次第御座候而、

御遠祖様御以来御国之蒙御厚恩、当助右衛門迄拾貳代相統、就中当時は御本亭等相勤、殊ニ当助右衛門儀も段々此日不容易御心付等被仰付難有仕合奉存候、然共色々不仕合ニ而当分別而困究罷成候、是以畢竟御用向キ相勤、終ニハ過分之借財罷成、何共難渋凌得候手段無之処より奉願訳ニ而難然止、就而は右通是迄数代難有被仰付来候由緒之者ニ御座候間、旁之御取訳を以何卒御憐愍被召加、似合敷御取救助右衛門江被仰付被下候様私より茂奉願候間、成合候様被仰上可被下儀奉頼候、以上、

〔朱書〕
「天保八」

西六月

新納次郎四郎

〔朱書〕
「右ニ付諸旧記類しらへ拔書一冊有之候得共、繁雜ニ付是ニ略ス、」

一酉七月十日、朝佐多之御崎ニ・三里之沖江白帆大振之船壳艘相見得候段、即刻仕出之飛脚、同日夜入時分佐多地頭鳴津矢柄方江到着、則右之届書拙者異国船掛之

故拙宅江被差出候間、則拙者より異国船掛御家老嶋津但馬殿御宅江持參致披露候処、最早但馬殿御方江は佐多より異国船掛御用人宛之届書新納主稅方江相届、右之届書主稅より暮前持參被致、則より異国方書役其外御役々被呼出御手当相成、夜入五ツ前比但馬殿登城有之候付、拙者共も則付添登城、諸御役座明ヶ方申渡、殿中殿外之大騒働無申計候、左候而主稅儀は其夜中則山川江出張候様被仰付、其外御役々同断被仰付候得共、御手当并仕廻方等ニ而隙取、夜明ヶ早朝より追々之出陣ニ而大騒相成、翌十一日七ツ時分但馬殿大頭ニ而、御備与被差越候様御沙汰之由ニ而、右之御手当被仰渡哉否、又々殿中殿外貴賤之奔走中々筆紙ニ難尽候、左候而但馬殿儀は則刻御殿ニ而支度替供揃有之候処、無程打揃則御殿より七ツ過出陣、下馬より乘馬被致、且嫡子又六郎殿儀も看病御暇ニ而但馬殿江御城下より則付添父子共乘馬、供廻之行粧美々敷勇敷次第也、其外被召附候御役々殿中より直ニ出張も有之、又一刻帰宅ニ而出陣も有之、一々難尽筆紙候、左候而拙者儀は夜前

より詰通シ、諸御手当大体片付御兵具所より雜道具迄も繰出シ相濟候首尾承届、十一日夜入四ツ過退出、尤異国方御家老座は今晩ニも詰通ニ而、御家老始諸御役々御用無之面々先致退出候、今日之御備与繰出し、兼而御手当殿格成故神速成事目をざまし候次第也、左候而佐多并山川其外浦々より成行之注進者柳之齒を引かごとく、拙者儀は翌十二日より但馬殿御帰陣有之迄は、朝五ツ時分より出勤、七ツ又は大鐘比退出、此一巻之御用向多無調法者大心配いたし候、然共異船早く出帆ニ而上下之安心不過之候、猶委敷は識者之記録を見て知るへし、

一仰渡御書面左之通、

一番駈付

新納 主稅

御用人座

書役 木脇 善助

新納主稅

用達 中村仲右衛門

右江相付
足輕式人

右は佐多之沖江異国船漂居候旨申出候ニ付、兼而被定

置候通一番駈付被仰付、被差越候条、早々差越被定置

候御手当帳之通相心得諸事可致差引候、左候而子細も

可有之様子候ハ、御家老拾騎備又は拾五騎備之内備

与人数ニ而可被差越候、子細も無之候ハ、式拾八人之

手廻ニ而可被差越候条、委細様子見届早々可申越候、

勿論其所人数迄ニ而差支候ハ、兼而賦付之通其最寄

加勢之郷江勤方之儀ニ可申渡候、

竹下覺左衛門

益満新十郎

松元半助

異国船掛

兒玉主左衛門

上野彦吉郎

田中猪三太

右江相付

足輕四人

絵師一人

唐通事一人

右同断被差越候付早々罷立、諸事異国船掛御用人江得
差込可相勤候、

横目

一人

右江相付

足輕一人

右同断被差越候間可申渡旨大目付江可相達候、

御徒目付

一人

右江相付

足輕一人

右同断被差越候間御側役江可申渡候、

郡奉行

御代官

右一番駈付人数送人馬飯米等之儀無滞様可申渡候、且

又一番駈付御用人より一左右次第、御家老式拾八人手

廻ニ而被差越候欤、又は様子ニ寄拾五駈備、拾騎備之

内可被差越候間、早速送人馬寄せ置、飯米・野菜・薪等之儀兼而被仰渡候御手当帳之通無滞可申渡候、

右申渡、可承向江も可申渡候、

七月十一日

但馬

吉利 仲

御兵具所
書役

老入

右江相付

御兵具方

与力

六人

足輕

三十人

右は佐多之沖江異国船漂来ニ付、為取締早々被差越候条、一番駈付新納主稅唐船改江申談可相勤候、

右申渡、可承向江も可申渡候、

七月十一日

但馬

郡方書役

老入

右は佐多之沖江異国船漂来ニ付早々被差越候条、一番駈付御用人其外御役々等野菜・薪、平田直次郎江得差凶無滞致手当可相渡候、若直次郎御当地江罷帰居候ハ、書役見計を以同断可取計候、

右申渡、可承向へも可申渡候、

七月十一日

但馬

大橋八郎右衛門

御代官所
書役

老入

右は佐多之沖江異国船漂来ニ付早々被差越候条、一番駈付御用人其外御役々等飯米無滞致手当可相渡候、

右申渡、可承向江茂可申渡候、

七月十一日

但馬

異国船御手当掛

鳥井平八

右は佐多之沖江異国船漂来ニ付早々被差越候条、御賄

料等之儀諸事如例可申渡旨御差図ニ而候、以上、

酉七月十一日

新納次郎四郎

弓頭

鎌田哲二郎

右同断ニ付右之通被仰付候間、兼而被仰渡置候御手当帳之通可相勤候、

表医師

本科外科
伊佐敷道淵

右は佐多之沖江異国船漂流ニ付早々被差越候条、勤向

之儀は新納主税江可得差図候、

右申渡、可承向江も可申渡候、

七月十一日

但馬

物頭江

右同断ニ付、御兵具方之儀兼而被仰渡置候御手当帳之通無滯様可申渡候、

鎗奉行

御小姓与番頭
二階堂 蒨

右は兒ヶ水沖江異国船漂流ニ付、大頭但馬殿江被仰付、

拾騎備与人数御預ニ而早々被差越候条、兼而被仰渡置

候御手当帳之通可被相勤候、

奥掛書役勤

益山八右衛門

唐船改寄

園田與藤次

御家老座

書役
知識喜之助

右江相付

足輕式人

右同断ニ付、但馬殿江被召付候間、得差図可相勤候、

鉄砲頭

物頭
郷原 轉

長柄奉行
物頭寄御馬廻
川上武右衛門尉

旗奉行御馬廻
安藤平右衛門尉

御目付
東郷十九郎

騎馬
御小姓与
指宿市郎左衛門尉

川上三七

平山加十郎

上井甚五右衛門尉

津留八之進

木藤彦助

中津平八

鎌田佳藤太

上床直太郎

和田萬太郎

左右騎馬
御小姓与
中山甚五兵衛

深見休八

田上利兵衛

山口十藏

有馬六之進

但馬殿
用達

鎌田五太右衛門尉

并小旗奉行
御馬廻

中西賀一郎

使番
御小姓与

園田彦左衛門尉

白尾孫次郎

目付
御小姓与

染川六郎右衛門尉

右は同断ニ付、右之通被仰付候間得差図可相動候、

横目

谷山次郎右衛門

右同断ニ付、御手当帳之通可申渡旨大目付江可相達候

御作事奉行

菅人

右同断ニ付、兼而被仰渡置候御手当帳之通、早速罷越無滞様可相勤候、

御馬預

右同断、兼而被仰渡置候御手当帳之通、乘馬并雜馬鞍置御借物無滞可相渡候、

御春屋役

右同断、兼而被仰渡置候御手当帳之通、塩(味脱力)・噌無滞御代官方江可相渡候、

郡奉行

三人

郡方書役
三人

右同断、兼而被仰渡置候御手当帳之通、早速罷越人馬

渡方之儀無滞様可申渡候、

右之通早々可申渡候、

七月十一日

伊勢

御兵具方

書役助

久保弥右衛門尉

右は此節山川江異国船漂着ニ付、被差越候様被仰渡候間、右之通被仰付度奉存、此段申上候、以上、

物頭

鎌田哲二郎

西七月十一日

郷原 轉

右申出之通被仰付候、

馬医見習

小田原宗右衛門尉

右は山川江異国船漂着ニ付拾騎備与被差越候付、兼而被仰渡置候通馬医右宗右衛門差越候間、此段御届申上候、以上、

西七月十一日

御馬預

郡奉行

有川藤左衛門尉

郡方書役

伊地知喜右衛門尉

右谷山

郡奉行
町田次郎九郎

郡方書役
有馬仁之助

右喜入

郡奉行
丹生矢兵衛

郡方書役
今村嘉兵衛

右指宿

郡奉行
村田甚左衛門尉

郡方書役
川田甚四郎

右山川

右は此節山川江異国船漂来ニ付、右御手当相掛候御用
物并御家老衆其外御役々被差越候付、送人馬為差引右
御宿々江差越候様被仰渡、右人数差越申候間、送人馬
御扶持米相渡候様被仰渡奉存候、此段申上候、以上

郡奉行

酉七月十二日

加治木十郎

市來新左衛門

新納主税

用達

中村仲右衛門尉

右は兒ケ水沖江異国船漂流ニ付、一番組駄付ニ而被差
越置候処、長崎御使者被仰付、彼所より直ニ出立久見
崎乗船ニ而被差越候条、小早船壹艘并伝間取仕立御船
奉行江申渡、可承向江茂可申渡候、

七月

伊勢

長崎御奉行江御届書左之通、

上包
美濃
折懸

松平大隅守内

新納主税

大隅守領内大隅国佐多村沖江当月十日相見得候異国船
壹艘寅卯之方江乘行候処、彼辺海上別而荒波之場所故、
薩摩国之内兒ケ水沖江漂居漸々近寄候間、差出候手当
之人数共大筒等打放打払方嚴重取計候処、右船無異儀
東之方遠沖江走出、同十二日夕方帆影相見得不申候付、

家老嶋津但馬其外手当之人数都而引取申候、右之段直ニ罷越可申上旨大隅守申付候、猶委細之儀は但馬より申上候通御座候、私相越見分仕候付、此段御届申上候、以上、

七月廿九日
松平大隅守内
新納主税

別紙

新納主税江申含之覚

此節佐多村沖江相見得候白帆之異国船老艘、兒ケ水浦沖江漂居帆影不相見得候付、長崎御奉行江之御使被仰付、久見崎より小早乗船ニ而被差越候条、海上差急致出崎在勤長崎御付人申談、別紙御口上書之通入念可相勤事、

一大隅国佐多村沖江今月十日白帆之異国船老艘、寅卯之方江奉行候体相見得候段申越ニ付、早速城下より手当之人數差越候、然処彼辺海上別而荒波之場所故、薩摩国之内兒ケ水浦沖江漂着居漸々近寄候間、差出候人数共大筒等打放、猶又家老嶋津但馬江一組之備相添差越

候、弥打弘方殿重取計候処、東之方遠沖江走出、同十二日夕方帆影不相見得段申越候旨、長崎奉行所江御書を以被及御届、御家老中より茂書状を以同断申上候間、自然御尋も候ハ、右之趣を以可致演說事、

一御城下より佐多村江被差越候人数御尋も候ハ、其方并手当之人数共早速差越候折、兒ケ水浦沖江異船致漂流候旨於途中相違候付、直ニ同所江差越候旨可申上事但佐多村江は兼而手当之人数段々留置候ニ付、猶亦

陸より堅固ニ相守居候、

一右船地方より何程相離、帆影又は旗印等之儀御尋茂候ハ、式里位茂相離帆數拾式三相見得候得共、打続兩天故慥成儀不相知旗印等茂不相分候付、御届書ニは相除候旨可申上候、正徳三年七月十七日串木野沖江白帆之異国船老艘見得肝付主殿被差越と秘録ニあり正徳二串木野沖江白帆之船相見得候節は里數帆數迄茂為被及御届筋相見得候間、旁得其意右之成行都合能可致演說候事、

一御城下より早速被差出候御手当之人数御尋茂候ハ、其方并掛役々・物頭・与力・足輕等余多差越候旨可申上事、

一但馬殿江被差添候人数御尋も候ハ、兼而及御届候通

一組三百五拾人召列之旨是亦可申上事、

一御手当惣人数御尋も候ハ、兼而諸郷々江手当申付置

候ニ付、最寄郷々より追々其場江駈付候惣人数弐千人

余相及候旨可申上事、

但近浦江は猶亦手当向敵重申付候、右人数外役々等

段々陸より相守居候旨是亦可申上候、

一其方役柄之儀御尋も候ハ、番頭と御答可申上事、

右之外御尋も候ハ、御付人申談、何分ニ茂御都合可

然様可相勤候、

以上、

七月

八朔御規式御手当拔書

一御一門方并諸大身分其外持參太刀仕来候面々着服白帷

子・長袴、右外都而着服白帷子・半袴、

一寄合并着服染帷子・半袴、

一中将様・少将様江御祝儀謁者半袴、

一御三殿様江御太刀進上之面々御当地江

不在合又は病氣之人は夫々於席名代を以納太刀、

一御太刀・中紙進上仕来候人、当日差合等之向は追而進

上、遠慮等被仰付置候人は赦免以後同断可被仰付候、

九月相過候ハ、不及其儀候、

酉八朔御規式御次第拔書

一御对面所江

一御出座

川上式部

右御太刀持參御中段御敷居内四疊目ニ置之、三疊目ニ

而御礼退座、

但御太刀奏者番拾之、

新納次郎四郎

伊集院 亘

桂 内 記

諸地頭

右次郎四郎・亘御中段御敷居内上三疊目ニ而御礼、其

外兩人ツ、

二疊目ニ而御礼退座、

但進上之中紙目錄於敷舞台奏者番請取之、

新納衛守
町田主馬

右敷舞台舞羅戸より三疊目ニ而御礼退座、

但書同断

中将様 少将様江

川上式部

右敷舞台奏者番出席、進上之御太刀納之、

一中紙

義岡藏人

新納次郎四郎

桂内記

諸地頭

新納衛守

町田主馬

右同断進上之中紙目錄納之、

一中将様 少将様江

無役之

一所持

一所持格

寄合

寄合并

右嫡子「末子」

右敷舞台江大目付以上出席一同謁御祝儀申上之、奏者番取合、

大番頭より

当番頭迄

詰衆

右於松之間縁頼謁御家老同断申上之、

一酉八朔右御次第之通罷出御祝儀申上候事、

一八月廿八日、但馬殿より月番御用人町田監物取次を以明廿九日御用之儀候間四時可罷出旨口達を以直ニ致承知候間御受申出置候、翌廿九日罷出候処於敷舞台御用人取次を以左之通被仰付候、

紗綾二卷

新納次郎四郎

右は妙円寺御造立付御用掛被仰付候処、出精相勤此節御成就ニ付右之通拝領被仰付候、

右御格之通可申渡候、

八月廿九日

〔朱書〕
「嶋津」但馬「久風」

〔朱書〕
「本行紗綾を以嘉永二年酉九月直衣を製して家蔵ス、其年の所

ニ委細記し置也、」

〔朱書〕
「御目錄豎紙七ツ折」

紗綾

二卷

右御書付并御目錄敷舞台ニ而被相渡、御品之儀は於御
用人座被相渡候事、

右ニ付大目付以上并取次御用人江御礼廻いたし候事、

一右同断付拝領物被仰付候人数左之通、

紗綾二卷ツ、

嶋津 求馬

但寺社奉行勤之内

三原 藤五郎

高田十郎右衛門

本田六左衛門

新納次郎四郎

福崎 助八

嶋上布二疋

同 二反ツ、

但御作事奉行勤之内

猿渡彦左衛門

本田休兵衛

東次郎左衛門

前谷伊三次

知識喜右衛門

芭蕉布二反

右は妙円寺御造立付御用掛被仰付候処、出精相勤此節
御成就付、右之通拝領被仰付候、

同 二反ツ、

御家老座書役

兒玉五兵衛

伊集院金左衛門

横目

黒岩庄兵衛

御作事方下目付

深柄七左衛門

右同助

大脇主右衛門

平田藤五郎

御細工所下目付
野崎善左衛門

三原源五左衛門

寺社奉行所書役
土橋藤右衛門

川上休右衛門

市來源之丞

家村曾兵衛

御側御用人座書役

内田八郎次

御用人座書役

黒田八郎次

右同書役助

木尾助七

御作事方書役定助

河野小四郎

御目付役所書役

大庭八郎右衛門

右同書役助

龜山甚七

山奉行所書役

與倉善兵衛

御細工所書役

富田傳右衛門

右同断出精緻骨折候付右之通被成下候、

右御格之通可申渡候、

八月廿九日

但馬

御作事奉行

御細工奉行江

金貳百疋

御大工頭添役

久木山四郎太

青銅百疋ツ、

大工棟梁

田中四郎左衛門

大迫助四郎

木挽主取

八木新兵衛

塗物師主取助

植村平左衛門

中村喜兵衛

絵師主取

森玄心

筋師主取助

有村市郎

仏師主取助

大塔正右衛門

八月

但馬

大塔利助

縫物師主取

有村源左衛門

張物師主取助

川越八左衛門

夫賦

善六

青銅三百疋

定番

伊兵衛

当分

名主勤

久木元源藏

相中江

伊集院地頭

用達江

金子百疋ツ、

伊集院郷士年寄

阿多平右衛門

右は田島竿次并掛り物等之一巻委細取寛別而奇特之心得ニ而、殊ニ去々未秋田方上見内見之節以来彼是御用立候旁之訳を以、為御褒美右之通拝領被仰付候条猶又可致精勤候、此段御主人様依御沙汰申渡候、

中原主右衛門

西十月

長野源助

右同横目

月野新兵衛

一御用之儀候間明廿一日四時可被罷出旨、但馬殿依御差
月申達候、以上、

右は妙円寺御造立ニ付出精緻骨折候付、右之通被下之候、

〔朱書〕
〔天保八年〕

右可申渡候、

十一月廿日

川上孫左衛門

新納次郎四郎殿

御用之儀候間明廿一日四時可罷出旨、但馬殿依御差図被仰渡趣奉畏候、為御請如斯御座候、以上、

十一月廿日

新納次郎四郎

川上孫左衛門殿

右ニ付翌廿一日四時罷出届申出置候処、於敷舞台右孫左衛門取次を以左之通被仰渡候、

新納次郎四郎

右は兒ケ水沖江異国船漂流ニ付、早速罷出向々江御手当等無滞申渡、心掛宜敷段被聞召通御褒美被 思召上候、

右御格之通可申渡候、

十一月

〔米〕「嶋津」但馬〔米〕「久風」

右之通被仰渡候間、為御礼右之但馬殿・孫左衛門江見廻置候、尤山川江出張之人数は勿論、留守詰ニ而於御役場右之御手当等致取扱候面々足輕末々迄も無残

御沙汰有之候事、

〔朱書〕「申出之通被仰付候、

十二月

將監

右之通十二月廿九日被仰渡候事」

口上覚

私共事来年頭付持参太刀仕、御礼申上管御座候得共、奏者勤ニ付差支申候間納太刀被仰付被下度候、此旨被仰上可被下儀奉頼候、以上、

十二月廿四日

新納次郎四郎

前後十六人略ス

右之通年頭掛御用人新納主税江差出置候事、

御内意之覚

私養父内藏病氣ニ付退役願出候砌、乍不調法者数十年相勤其内江戸江茂相詰、脱体持高迎は少分之事故借財迄過分追屯難涉仕居候ニ付、彼は補之為勝手向御訴訟奉内願候処、表向株立候儀は難被仰付趣承知仕、家来名前を以鮪・鯉骨粕一手売支配方年数先キ五ヶ年御免被仰付、是以年々金子五拾兩位は利潤も可有之品柄ニ

而難有奉存、乍漸年數待合支配之年間罷成取付可申段奉伺候処、其以前御差支之訳有之、疾御取揚相成候段承知仕当惑仕候、右ニ付而は外ニ致方無之一向奉訴候処、御金三拾兩ツ、年々十二月限五ヶ年可被成下段、去ル卯十二月承知仕、辰年は引寄夏分則三拾兩御下金被仰付誠難有奉存居候、然処は又翌巳夏相成御金筋無之候間、当年よりは右御金筋不被成下段三原藤五郎御取次口達ニ而承知仕、又候当惑仕候得共、何共致方無之夫形罷居候、然ニ困究者猶更当借をも過分相成、其上類家之中難捨置合力仕向茂有之、彼是難渋弥増罷成候付、又々此内より御訴訟申上度存念候得共、一旦御金不被成下候段承知仕上、又候奉願候儀不成合至極奉存是迄差扣罷在候、然共前文申上候通願意毎々違変仕、第一御心付筋段々減少仕纔三拾兩老ヶ年被成下迄ニ而何共奉込入候、当時借財相増別而差迫罷居候ニ付、再往奉願候儀は如何敷奉恐入候得共、養父勤役中より之願意殊ニ御心付纔老ヶ年被成下候旁之御取訳を以、当年より先キ四ヶ年最初之御趣意通何卒御下金被成下候

様幾重ニも恐多奉存候得共、偏ニ奉歎願候段御内意被仰上可被下儀奉願候、以上、

西十二月

新納次郎四郎

〔朱書留〕
一張紙

本文文政十年亥五月は養父内藏退役以後ニ而候得共、内実は内藏病氣差起退願出候以前、口達御内意を以奉願趣御座候処、其以前御心附等も被仰付置候得は、又候表向株立候儀は難被仰付候間、一手支配類見合願出候様内々御口達を以承知仕、本文骨粕一件矢張口達を以奉伺候処、随分御免可被仰付御内決有之候、然共余り年限先キ掛候事故、一仕切前之年限相成候節願出候様御内達承知仕、本文之通亥年五月ニ相成願出候次第御座候、」

乍恐口上覚

一 鮪・鯉骨粕

一 御礼銀五枚

但年々十二月限上納可仕候、

一年數十ヶ年

右は又木嘉右衛門江本行骨粕一手支配方当亥年より御

年迄五ヶ年御免許被仰付置候、跡引続来ル辰年より先

キ十ヶ年私江是迄通之御仕向を以何卒御免許被仰付被

下度奉願上候、此等之趣を以成合候様被仰上可被下儀

奉願候、以上、

〔朱書〕
「文政十年」

亥五月

新納内藏家来
徳田直助

〔朱書〕
「此表願年数相減、来ル辰年より先キ五ヶ年願之通用付候条如

例可申渡候也、

亥十月十日

御勝手方印

取次
北條織部

町奉行

御船奉行

物奉行

郡奉行

乍恐口上覚

鮪・鯉骨粕

右一手支配売買之儀是迄之仕向通を以、来辰年より先

キ五ヶ年私江支配方御免被仰付置難有仕合奉存候、依

之奉願上候、右骨粕類外ニも段々被仰付置候段奉承知

候ニ付、来辰正月より取付申儀ニ付而ハ、当冬より其

手当等仕事ニ而彼是混雜仕事も可有御座奉存候間、乍

恐向々江被仰渡置被下度奉願候、御繁多之御恐多奉存

候得共何卒此等之趣を以成合候様被仰上可被下儀奉願

候、以上、

〔朱書〕
「天保二年」

卯九月

新納次郎四郎家来
徳田直助

右卯九月十九日御勝手方御用人嶋津壬生殿江用頼長野

源助差出候、翌廿日用頼御用有之同人罷出候処、先年

願之通被仰付置、其節向々江御証文を以被仰渡置候付、

此節又々被仰渡ニは及間敷、骨粕買円方売捌方来辰正

月より取付候段、御船手又は郡方等江届申出候儀は此

方吟味次第ニ候、尤御趣法方江も吟味ニ被相下候処、

前文之通之事候間願書被相下候段、嶋津壬生殿より被

仰渡候筋を以、書役岩切助右衛門より源助承知いたし候事、

乍恐口上覽

鮪・鯉骨粕

右一手売買之儀来辰年より先キ五ヶ年私江支配方御免被仰付置難有仕合奉存候、依之右骨粕外ニも段々被仰付置候段奉承知候付、来辰正月より取付申儀ニ付而は彼是混雜仕事も可有御座奉存候付、向々江被仰渡置被下度当九月奉願候処、最初御証文を以被仰渡置候付、其儀ニ不及段承知仕候、然処当分御手網方御計相成居申候哉ニ粗奉承知候間、右通取付方仕候而も御差支有御座間敷哉、此旨奉伺候間何分之儀被仰渡被下度奉願候、此等之趣被仰上可被下儀奉頼候、以上、

天保二年卯十一月十九日

新納次郎四郎家来

徳田直助

御手網方

御見聞役様

右之通長野源助より御趣法方書役鶴丸猪右衛門江差出候、然処最初何様之訳ニ而右一手支配方御免許被仰付置候哉、成行書付を以申出候様致承知候付、養父内藏儀御家老御役迄も被仰付、過分之御役料等被成下、誠以難有奉存候、乍然以前之借財且御役ニ付而之行粧其上江戸詰等彼是之物入過分相成、持高逆は纔百四拾石余有之、都而他借を以差繰置、別而難渋罷在候付、誠ニ恐多候得共首尾能退役被仰付候付、乍不調法者御憐愍被召加、彼是補之為勝手向御心付被仰付候様奉願候処、一手支配類願出候様承知仕、前文骨粕一件願出候処、難有御免許被仰付候次第ニ候、然処御手網方御計相成居候哉ニ粗承知仕、左候而は何共迷惑仕儀御座候間、何卒最初より之趣意相立候様被仰付被下度旨、書付を以御趣法方掛見聞役田畑真助江次郎四郎より申出置候、

但御手網方御計ニ而一手支配疾ニ御仕向替相成居候

段は此砌初而致承知、誠ニ案外之儀ニ而何共当惑仕、則より最初之趣意を以、向々江御内意一向奉

訴、御金三拾兩ツ、被成下候様難有被仰付、左之
通承知仕候、

〔朱書〕
一「張紙」

本文通難有被仰付候次第成立候儀は主計殿御事は無申迄、其
外三原藤五郎・有川藤左衛門・高田十郎右衛門・和田源太兵
衛・久保七右衛門・佐々木新藏・田畑新介等世話ニ而御座候

一金三拾兩ツ、

新納次郎四郎

右は所帯方難渋ニ付内々願之趣有之、家來徳田直助江
鮪・鯉骨粕一手売支配方申付置候処、差支之訳有之、
此節取揚申付候、右ニ付而ハ可及迷惑候間、別段之御
取訳を以來辰年より先キ五ヶ年年々十二月中右之通被
成下候条可申渡候、

〔朱書〕
一「天保二年卯」

十二月

主計

右之通十二月朔日御勝手方御用人北條織部殿取次を以
被仰渡承知仕候、

〔朱書〕
一「同三年」

一翌辰年御金三拾兩引寄夏分御渡被下難有頂戴仕候、

〔朱書〕
一「同四年」

一翌巳年八月廿一日、御趣法方より用頼御用ニ付長野源
助罷出候処、三原藤五郎殿より鮪・鯉骨粕一手支配被
仰付置候得共、被差留御手網方御本年限ニ相成候間、
別段金三拾兩ツ、五ヶ年被成下旨被仰渡置候処、当分
納り金迎も無之、段々御吟味も有之候得共、御時節柄
之儀ニ付御金繰難相調御取返し被成、当年より不被成
下候間、左様致承知候様治部殿より御内意を以被仰渡
候旨、藤五郎殿より致承知候、

右之通相認ニ通共取揃相良甚大夫江相頼但馬殿江御内
意申上候処、段々違変ケ間敷迷惑相成候段尤之願意候、
然共年内最早余日無之候付、いつれ年明ケ諸向御帳留
等相糺、此内何様成御金筋より可被成下段相究居候哉、

被是得と御吟味之上追而何分御返答可被仰聞旨同人江
御沙汰有之候段十二月廿五・六日比承候事、

戊年頭御規式之御手當

一 太守様 中將様 少將様 江御太刀進上之面々御当地江

不在合、又は病氣之人は夫々之於席、名代を以納太刀

被仰付候、

一 御太刀進上仕来候人、当日差合等有之向は追而進上、

遠慮等被仰付置候人、赦免以後可被仰付候、二月相過

候ハ、不及其儀候、

一 御礼之節御一門方・諸大身分・寄合并・御側役以上諸

地頭持參太刀之面々着服熨斗目・長袴、

但持參太刀無之面々は熨斗目・半袴、

右之外前後入用無之ケ条略ス、

ニ置之、同三疊目ニ而御礼退座、

但表御年男御太刀拾之、

一 数之御土器

一 長柄之御銚子

一 御加

川上式部

新納次郎四郎

伊集院 亘

右御中段上より一疊目ニ而右人ツ、御盃頂戴、御土器

持下、畢而数之御土器等引之、

川上式部

新納次郎四郎

伊集院 亘

中西十郎左衛門

御規式之御次第

三日 御対面所御上段江

御出座

川上式部

新納次郎四郎

伊集院 亘

右 太守様 江御太刀進上之同日敷舞台奏者番出席、

中將様 少將様 江家ニ付進上之御太刀納之、

無役之

一所持

右右人ツ、御太刀持參、御中段御敷居内上江四疊目下

同格

寄合

寄合井

右嫡子末子

右敷舞台江大目付以上出席、

一同謁

中将様 少将様江御祝儀申上之、奏者番取合、

大番頭より

当番頭迄

詰衆

右於松之間縁類謁御家老同断申上之、

右之外前後入用無之、ヶ条略之、

天保九年戊戌

正月十日、但馬殿より月番御用人新納主税取次を以、

御用之儀有之候間明十一日四ツ時可罷出旨致承知、翌

十一日罷出候処、於敷舞台主税より左之通被仰渡候、

郡山

郡山一代郷士

地頭江

新納次郎四郎

年季^(抱)拘家来

唐本通事 黒岩利兵衛

右は数拾年唐通事正道相勤、唐船漂着等之節毎度被差

越、長崎江唐船被差送候節茂被付遣御用無滞相弁、旁

別而御用立候御取訳を以此節被召出、右之通被 仰付

候条、至子孫不致忘却通事無断絶可心掛候、

右御格之通申渡、可承向江茂可申渡候、

正月

但馬

右通致承知候付、口上書を以御家老・若年寄・大目付

并取次御用人江も致御礼廻候、左候而右利兵衛江は郡

山地頭方より申渡有之候ニ付、拙者方不及其儀候事、

一 正月十六日、月番御用人嶋津矢柄取次を以左之通被仰

付候、

御用人

新納次郎四郎

(佐土原藩主島津忠愍)

右は当年嶋津飛彈守殿御当地江被差越管候ニ付、御用掛被仰付候条、可申渡候、

正月

伊勢

右之通被仰渡、外ニ同役新納主税、御側御用人本田六左衛門、御趣法方掛御用人高田十郎右衛門、御使番田原藤太左衛門同断被仰付候事、

一態以手紙申上候、年内より御頼申上候勝手向内願之儀、其砌より御趣法方江被相下高田十郎右衛門取扱之由山本新左衛門より承候、尤為差訳も無之、只御金筋無之迄之処より、屹と被仰渡置候儀を御打切ニ而は御無理成被成方故、何れニも御手を被付被下御舎之由山本より承り、別而難有思召之程不浅奉存候間、則高田江も催促仕候処、何分ニも御金筋無之処より右次第候へは、何欵金筋不相見得候而はどふも被成方無之故、急キ候而も不相叶今少し待居候様承り、めつさり仕候得共致方もなく夫形罷在候、其後催促も致度候得共、我々數御金繰も不存、何か程せつき候而も矢張同断之返答可有之は一定御座候得は、其上強張り候儀も不相叶恐入

引取申外は無之、明暮及工夫候得共、頓と良計無之只々案し煩居候迄ニ而御座候、然処大夫も近日より御湯治引統御領地江御越候由、就而は御越無之内何卒今御一声被掛置被下儀は相成申間敷哉、兎角高田・三原等江も大頭之御沙汰ニ無之候得は、我々數何十返掌を合候共、応之申事無之一言之返答ニ而打切られ申は案中御座候へは、頼御方とては実ニ大夫之御一方迄御座候付、何卒貴様今一往右之所御働被下儀は相叶申間敷哉昨日も鯉船乗ためしニ而右之太夫并高田・私など重富浜屋敷江七後迄相勤、夫より菱刈八郎太所江参り、四ツ時分迄及雑話致帰宅一睡之処、夜前之強風ニ吹被起弥以貧究之両家、いらかをはしめ板屋廻り相損、朝夕之宮は勿論手ニ行廻り罷在中ニ茂春中仕切之借銀等も有之、一方ならず、行而も帰而も心配仕候処、夜前之風ニは尚更心痛相重弥以右之願事一向奉折候事ニ御座候、昨日も右通之事ながら私事自由ニ申候も如何敷奉存、一言半句も難申入差拒居候事ニ御座候、いつれ今一往不奉願候而は立而も居而も難罷在事故、今朝推参、

猶又御頼申上度含ニ罷在候処、用向到来いたし難罷出御座候間、此段以手紙申上候付、何とそ大夫江之御都合千万奉願候、以上、

尚々、太夫をはしめ上せは、敷申上様無勘弁之至と御しかり共有之候而は頓と迷惑仕候間、其段は宜敷御見計可被下儀是亦奉頼候、以上、

四月五日

新納次郎四郎

相良甚大夫様

口上覚

嶋津主計組御小姓与入田萬兵衛・町田監物家来有馬武右衛門事、親類又は主人依願沖永良部嶋江居住被仰付置候処、去酉年致病死其段語代官より御届申越候書付、書役助橋口彦次江取扱為致候処、大目付衆御方御帳消相成居且支配頭并主人方江申渡後ニ相成候を氣相付不申、今更大形之至奉存候、依之差扣奉伺候、此等之趣被仰上可被下儀奉頼候、以上、

〔朱書〕
〔天保九戌〕

閏四月八日

新納次郎四郎

右之通月番御用人嶋津矢柄江差出、勤方何様可仕哉之旨相伺候処、安房殿より同人取次を以不及遠慮候段則日被仰渡候、尤取扱書役橋口彦次同断差相伺候処、是又勤方同断被仰渡候事、

一 閏四月廿三日、月番御用人嶋津矢柄取次を以左之通被仰渡、書役橋口彦次事も同様被仰渡候事、

新納次郎四郎

右は依願嶋方居住者病死之届御用人座書役助橋口彦次江為取扱候処、大目付方帳面消又は向々申渡及延引候を氣不相付大形之旨、差扣相伺候得共不及御咎目候、向後可入念候、

〔朱書〕 右可申渡候、

〔朱書〕 〔戌〕閏四月

〔朱書〕 〔亥〕安房

口上覚

〔朱書〕

御馬預しらへ之通ニ而

願之通被仰付候、

五月

將監

御借馬老足

但馬具并中間沓籠持人足迄

右は明四日於谷山中之鹽屋大御見分ニ付差越管御座候処、乗馬病馬ニ有之候付、右之通御借馬并御借物被仰付被下度奉願候、此旨被仰上被下度儀奉願候、以上、

戊五月三日

新納次郎四郎

右願書月番御用人町田監物江差出置候処、同人取次を以則日願之通被仰付候事、右ニ付翌四日雨天ニ而候得共、湊川源左衛門流儀見分有之候ニ付相勤候事、

一 戌六月六日、夕方より二階堂源太夫殿御祖母清鏡院様

痢病御煩付追日被為重候、然処同月五日夜中より源太

夫殿次男五歳之小兒も痢病ニ而是茂段々難症相成、六

月十三日終ニ養生不相叶候、清鏡院様御大切之御煩中

故御聞せ不申上取計候方可然との申談ニ而、御病中込

入たる事共ニ而候、左候而清鏡院様弥御難症被為成、

同月廿一日七半時分御養生不為叶奉絶言語候、右ニ付

而は拙者儀定式之通二十日之忌、九十日之服ニ而候事、

一 六月廿三日、巡見使方掛御用人吉利主馬取次を以左之

通被仰付候、且月番御用人永江伊右衛門取次を以忌御免迄も被仰付候事、

新納次郎四郎

右は巡見使方御用掛平川市左衛門旅行跡掛寄被仰付候条申渡、可承向江茂可申渡候事、

六月

但馬

伊勢

御自分事忌中ニ而候得共御用差支候付忌被成御免候条明日より可被致出勤旨、但馬殿依御差図申達候、以上、

六月廿三日

永江伊右衛門

新納次郎四郎殿

私事忌中ニ而候得共御用差支候付忌被成御免候条、明

日より可致出勤旨但馬殿依御差図被仰渡趣奉畏候、以

上、

六月廿三日

新納次郎四郎

永江伊右衛門様

右ニ付翌廿四日より出勤ニ而巡見使方御用人座松之間

縁頼江相立居候付、彼之方江相勤候事、

金式両

新納次郎四郎家来
松雪辰之助

〔朱書〕
〔本文天保十五年辰七月御褒美有之、其場ニ記ス〕

右は今般西丸御普請御用金被為蒙仰候処、引統之御金納ニ而不容易御時節之段厚汲受、右之通差上度旨内願之趣別而寄特成心入ニ而候間願之通被仰付、御用途被召加之段は追而可達 貴聞候条、納方之儀は御買物蔵江致上納、其届申出候様可申渡候、

但此涯上納申付候、

六月

但馬

〔朱書〕
〔本文ニ付右同断〕

一 地頭所加久藤郷士之内同様差上金願出候者有之、同断被仰渡候得共略ス、

一 七月四日、巡見使會我又左衛門・大久保勘三郎・近藤勘七郎三人御領内差入出水泊、同五日阿久根泊、六日

水引泊、七日川内川登り宮之城泊り、八日雨天ニ而穴河

渡り不相調同所滞在、九日金山泊り、十日加治木泊り、

十一日鹿府差入下町泊りニ付、当朝六ツ時分出宅下町

濱田十右衛門所御用宿ニ而御用人座書役五人共出張、

翌十二日巡見使出立有之、其内昼夜詰通シニ而九ツ過

御用宿より直ニ御殿江出勤、御用向相仕廻八ツ過退出、

尤御家老始諸御役々同断、左候而十二日喜入泊り、十

三日山川泊り、十四日二百十日ニ当り昼時分より時化

立候付同所滞在、十五日鳥濱江渡海大始良泊、十六日

志布志泊、十七日都之城泊、十八日寺柱より飢肥領江

首尾能出放れニ而諸事都合能巡見相濟候付、廻り御用

人平川市左衛門・御留主居勤本田六左衛門其外御役々

一統引取有之、廿一日より市左衛門出勤ニ付拙者儀も

掛り座日勤引取、本座江相勤候事、

但御勝手方御用人巡見使掛り吉利主馬六月廿四日迄

出勤有之、廿五日より病氣ニ而引入鹿府江差入之

節も出勤不相調、市左衛門旅歸り之節迄も出勤無

之候事、

一佐土原より左之通書状并品々到来いたし候事、

尚々、御地江被致参上候付而は、追々用向等御伺可
被申上候間、其節御差函被成可被下儀是又宜申上旨
被申付候、以上、

一筆致啓上候、弥御堅固可被成御勤珍重被存候、然は
飛彈守吹出物ニ而相勝不申候ニ付、隅州踊之内明礬温
泉所江差越入湯被致度旨、先達而於江府被奉願候処願
之通被仰出之忝次第被奉存候、依之貴様儀用向御係被
仰付候由被致承知、何角御世話御苦勞之至被存候、万
端御引廻御頼申度被存候、仍縞越後杓反・仙台平袴地
杓反・炙鯉簀卷二被致進覽之候、此段私より宜得其意
旨被申付如斯御座候、恐惶謹言、

七月朔日

曾小川帶刀
久健判

新納二郎四郎様

参人々御中

一筆致啓上仕候、愈御壮健可被成御座珍重奉存候、然
は飛彈守儀此節其御地江参上被致候ニ付、私儀供被申

付候間、何角御心易御指南被成可被下儀奉願候、仍炙
鯉簀卷二・穗北紙一包致進上之候、聊書音之印迄御座
候、恐惶謹言、

七月朔日

曾小川帶刀
久健判

新納次郎四郎様

参人々御中

御札致拜見候、
飛彈守様弥御勇健被成御座珍重之御儀奉存候、然は縞
越後杓反・仙台平袴地杓反・炙鯉簀卷二被成下仰之旨
被示聞趣被為入御念御事忝奉存候、御序之砌宜敷様御
執成頼存候、恐惶謹言、

七月五日

新納次郎四郎
名乗判

曾小川帶刀様

御状致拜見候、弥御堅固被成御勤珍重存候、然は飛彈
守様此節御越ニ付御供被成由ニ而被示被聞趣、殊炙鯉
簀卷二・穗北紙一包被懸御意入御念儀忝存候、御礼旁
為可申入如斯御座候、恐惶謹言、

七月五日

新納次郎四郎
名乗判

曾小川帶刀様

右之通中奉書半切ニ相認銘々文箱ニ入付、油紙包差札ニ而佐土原飯屋守江相頼候、尤新納主税殿も同様ニ而候事、

一七月廿七日、月番御用人嶋津矢柄取次を以左之通被仰付候、

新納次郎四郎

右当八朔御祝儀御用掛川上孫左衛門江被仰付置候得共被成御免、代被仰付候条可申渡候、

七月

伊織

口上覚

^{〔朱書〕}「本文ニ付十月廿一日不及御咎目、向後可入念旨被仰渡候事」

私支配下春田加吉其外之者共先達而聊之儀有之、禁足申付候、右ニ付而は兼而申聞様不行届大形至極奉存候依之差扣奉伺候間、此等之趣被仰上可被下儀奉頼候、

以上、

戊八月七日

新納次郎四郎

右之通月番御用人新納主税江差出、且勤向方之儀何様可仕哉之旨相伺候処、不及遠慮候段御家老伊勢殿より同人取次を以則日被仰渡候事、

一戊九月朔日、御側御用人高田十郎右衛門取次を以左之通被仰渡候、

但馬殿より被相渡候御書付之写

新納次郎四郎

^{〔朱書〕}「本文当人江は御納戸奉行より申渡有之候事」

家来御納戸支配
打物師
満田清右衛門

右聞得之趣有之、勤方差免候条可申渡事、

一重富屋敷内用頼御用人吉利主馬先達より病氣ニ而長々出勤無之候付、快氣迄之間内用向拙者承與候様山城殿并靜洞殿より坂元權之丞御使を以八月初方致承知候付一往之儀ニ候ハ、随分御受可申上段相答、其通内用向

承居候処、吉利氏八月末終ニ病死ニ付、又々坂元を以永々内用承呉候様山城殿より致承知候ニ付、一往之儀は御受申上置候へ共、永々之事ニ御座候へ、外ニ同席も多人数中ニは年輩茂宜敷者も罷居候付、外ニ人柄御吟味被成度、拙者若輩旁何も不取馴之事候ニ付御断申上度旨相答置候処、九月二日主馬殿を以、別段差支之訳さへ無之候へ、年若之遠慮は不及段、亦々被申聞候ニ付、此上は御辞退も不都合ニ付無異儀御請申上候との趣主馬殿江致返答候処、則日左之通被成下候、

(島津久光)
山城殿口上

弥御無異珍重被存候、然は内用向御頼被申候処御請合給忝被存候、右御挨拶以使被申述候、随而御肴忝折御樽一被致進入之候、以上、

九月二日

右之通使者を以被下候、左候而九月九日重富屋敷刃祭礼ニ付、山城殿初其外何れ茂様御逢可被成候間、拙者儀八ツ後より可参旨留守居を以承候付、右刻限より差越候処、山城殿・又次郎殿・靜洞殿并山城殿之奥方・

又次郎殿奥方并山城殿二女・三女ともに御逢被成候而御盃共被下候、左候而夜入五ツ半時分肱岡伊左衛門亭主振にて坂元權之丞其外御付之本田孫右衛門・伊集院弥三右衛門等段々被罷出候、尤拙者初而参上之儀ニ付、看一折・酒一樽差上候事、

一 九月十四日、(佐土原藩主島津忠敬)嶋津飛彈守殿上祇園洲江八ツ過御着船、

即刻上町会所江御着有之候、右ニ付当日四時より御殿江出勤、御用相仕廻九ツ時分より上町会所前瀬戸山政右衛門所江御用宿手当いたし置彼之方江出張、左候而右会所御着ニ付玄喚江出迎、則拙者先立いたし書院江案内、夫より主税初御役々段々罷出御挨拶等相濟候ニ付、拙者共は御用宿江引取候、左候而御用濟罷帰候事、

一同十五日、四ツ時より御用宿瀬戸山所江出張居候、今日御城代并御三役方飛彈守殿江御見廻ニ付彼之方江相詰候、尤今日拙者儀は出掛ニ飛彈守殿御逢被成候、左候而八ツ時分諸事相濟候付引取候、今日主税儀は御殿江

出勤御用被相勤候付、拙者御旅宿之方ニ相勤候事、

一十六日、飛彈守殿今日登城被成候、五時分出勤、飛彈守殿四時登城有之、諸事都合能八ツ時分相済、夫より

大奥江御上リニ付表方は七ツ時分都而退出致候、拙者なども同断、乍然右江相掛候御役々ニハ居残り候事、

一十七日、四ツ時出勤、九ツ時分より御用宿江出張候、今日も飛彈守殿御逢被成盃共可被下候間、扣居候様内々承候付其通心得居候処、七ツ後御逢被成盃共被下吸物二ツ被差出候、暫御咄申上候而日入時分退出いたし、尤主税并御使番田原藤太左衛門罷出候事、

一十八日、飛彈守殿南泉院并聖堂・南林寺江御参詣付、四ツ時分より相勤七ツ半時分南林寺より帰り候、三ヶ所共都而都合能相済候、主税儀も同断也、

一十九日、御殿并御用宿江暫ツ、出勤候事、

一廿日、飛彈守殿浄光明寺・福昌寺・惠燈院江御参詣付、三ヶ所共相勤候、何も都合能相済七ツ時前惠燈院より帰り掛御用宿江暫参り、無程罷帰り候、主税儀も同断也、

一廿一日、御殿并ニ御用宿江一刻ツ、出候、今日左之通被成下候事、

以手紙致啓上候、愈御堅固被成御勤珍重被存候、然は微少之至り御座候得共、在所紙三束・手樽一被致進覽之候、此段私より宜得貴意旨飛彈守被申付、如斯御座候、以上、

九月廿一日

曾小川帶刀

新納次郎四郎様

一廿二日、飛彈守殿儀御茶屋

御拜見ニ付、四ツ時分より彼之方江御出被成候、都而御側御用人請持ニ付表方何茂不差構候事、

一廿三日、御殿江一刻出勤、夫より御用宿江差越且会所江参先日之頂戴物御礼申上置候、主税同断、且今日帶刀見廻ニ而左之通、

以手紙啓上仕候、愈御壮健被成御勤珍重御儀奉存候、

然は輕少之至御座候得共椎茸一箱・半切紙五百枚進覽仕候、聊御見舞之印迄御座候、以上、

九月廿三日

曾小川帶刀

新納次郎四郎様

一同廿四日、飛彈守殿垂水屋敷江御出ニ付、彼方江拙者老人差越候、今日至極之御機嫌ニ而夜入過御立被成候間、拙者共儀も五ツ時分御暇いたし候事、

一廿五日、御殿并御用宿江出張、七ツ時分引取候、主税儀も同断也、

一廿六日、飛彈守殿御樓門并御藏々且御厩御拜見ニ付、五ツ時分出勤ニ而御兵具所并御厩江相勤候、左候而七

ツ半時分相濟下城ニ付拙者共も則引取候、主税同断也、

一廿七日、御殿并御用宿江暫ツ、出候事、

一廿八日、飛彈守殿(天文廳)明時館御見物、夫より嶋津但馬殿・

菱刈安房殿・嶋津伊勢殿敷台迄御見廻ニ而、伊勢殿所ニ而は暫御在付之賦ニ付、拙者儀は四ツ時分より伊勢殿所江差越世話いたし候、然処九ツ半時分飛彈守殿伊勢殿所江御出ニ付玄喚江出迎候、左候而緩々被為在夜入五ツ時分御機嫌能御立被成候、尤主税ニも同断被差越候、且高田十郎右衛門・本田六左衛門其外段々兼而出入之面々参居、世話被致候事、

一廿九日、御殿江出勤、八ツ時前退出候事、今日御使者を以左之通御捻被成下候事、

我等儀御当地江差越候ニ付而彼是預御世話御苦勞之至、殊樽肴等送給大慶存候、為謝礼如此候、恐々謹言、

九月廿九日

(花押)

上書

新納次郎四郎殿

忠徹

御宿所

島(ヤ)飛彈守

右御樽着とは御着当日鮮鯛一折主税相中より致進上、且十九日出水海老拾連・拾盃入樽老ッ進上いたし候、右等之御挨拶ニ而候事、

一晦日、飛彈守殿千眼寺御参詣、夫より尾畔御茶屋江御出之筈ニ付、四ツ時より拙者老人千眼寺江差越候、然処九ツ時分御参詣、暫ニ而御立尾畔江御出有之候付、拙者儀は八ツ前千眼寺より引取帰候事、

一十月朔日、御殿江出勤、暫ニ而御用宿江差越無程御旅宿江参、当日之御祝儀且先日被成下候御捻之御礼帶刀江申出置候、左候而当家所持之太閤公御朱印并道服其外陳扇子、家康公御肌着、且幸光之脇差、忠元君御指

料之刀等御覽被成度先日より致承知候間、今日持参懸御目候、且なめり川所持之寄進太刀并長壽院様御指料之切かひ有之候来之刀是亦懸御目候、左候而暫御話申上七ツ時過御暇いたし候、右之二品は則なめり川江返納いたし置帰宅之事、

一同二日、飛彈守殿宮之城屋敷江御出ニ付、拙者并主税ニも四ツ前より差越候、左候而垂水屋敷同様之御あひしらひニ而御機嫌能五ツ時分御立ニ而候間、拙者共儀も直ニ引取候事、

一同三日、御殿江出勤、暫ニ而退出いたし候事、

一同四日、飛彈守殿錦崎江御上被成候付、何茂御用は無之候故何方ニも出勤不致候事、且左之通手紙参候、

猶々、御三役様江茂御招被申筈御座候間、少早目より御出何款都合能御世話被下候様、是亦私より御頼可得貴意旨被申付候、以上、

以手紙致啓上候、然は明五日於旅宿緩々御物語等致度
被存候間、御繰合昼時比より御出可被下候、此段宜得
貴意旨飛彈守被申付候、以上、

十月四日

曾小川帶刀

新納次郎四郎様

一 五日、御旅宿江三役方并拙者共五人御使番迄茂昨日曾

小川手紙之通被相招候付、御殿より九ツ打直ニ罷出候、

彼是御取立ニ而御饗応被下候、左候而暮比三役方御暇

ニ付拙者などニも追々御暇いたし候、右參上付拙者共

五人相中より御肴料金子五百疋進上いたし候、

〔此一条誤歟ナリ〕
町田平實盈

泰量院殿清運玄高大居士

天保九年戊戌十月七日死去」

一同六日、御旅宿江罷出昨日之御礼曾小川江申出置夫よ

り御殿江出勤、八ツ時分致退出候事、

一同七日、飛彈守殿谷山慈眼寺江御越之筈候処、夜前よ
り風雨且少々は飛彈守殿も御不快被為在候付、御断ニ
而御延引相成候、拙者儀四ツ時分より御殿江出勤、八
ツ前致退出候事、

一同八日、出勤、九ツ時分より御用宿江出張候、左候而

今日御旅宿江（島津實典）讚岐殿・圖書殿為御暇乞御見廻之筈候間

拙者并主税ニも相詰彼是御取持いたし候様、御用聞を

以致承知候付相扣居候処、大鐘前より御兩人共御見廻

ニ付拙者共ニも罷出候、左候而夜入過御兩客御立ニ付

引続御暇いたし候、御側より三原藤五郎老人被相詰候、

且今日曾小川より手紙を以左之通頂戴并預送候事、

以手紙致啓上候、弥御堅固被成御勤珍重被存候、然は

滞在中彼是厚御世話被下、以御蔭勤向万端都合能相済、

偏御取持故と別、而忝次第御苦勞之至被存候、近々御当

地出立ニ付縮緬巻反・御肴代三百疋被致進覽之候、

右御礼旁私より宜得貴意旨飛彈守被申付候、如斯御座

候、以上、

十月八日

新納次郎四郎様

曾小川帶刀

以手紙啓上仕候、弥御壯健被成御座珍重御儀奉存候、然は滞在中彼是御配意被成下、以御蔭何角都合能相濟別而難有仕合奉存候、仍而輕微之至御座候得共板紙三束進覽之仕候、右御礼旁為可申上如斯御座候、以上、

十月八日

曾小川帶刀

新納次郎四郎様

一同九日、出勤無程退出、会所江參御用相仕廻八ッ前引取候事、

一同十日、今朝曾小川帶刀用向ニ付參候間則致面会候、暫ニて罷帰候、四ッ時出勤無程退出、夫より会所江參り明日御出立佐土原之様御帰之筈ニ付、彼是御用有之候、然処夜前より大風雨ニ付明日御出船難相調段御船奉行より申出候付、来十三日御出立之筋ニ御手当相替諸向江申渡置候、右御出立ニ付飛彈守殿江鮮鯛一折・

白唐紙三束御側御用人三人并拙者共兩人都合五人相中より致進上且御内々ニ而奥元寛作鐘穗沓本石突迄相添此節打調裏銘迄為打并唐扇子沓箱・唐燒盃并台肴皿九ッ沓箱ニ入付致進上候、并曾小川帶刀江鯛沓折・刻煙草沓箱・花毛氈沓枚相送り候、左候而会所并御用宿彼是御用相仕廻大鐘過引取候、且又当家所持之忠元君御手鑪并拝領之長刀等被成御覽度先日より致承知候間、今日懸御目候、且嫡家四郎殿所重宝之長光刀も借入懸御目候事、

一同十一日、出勤無程退出、夫より会所江參り御用宿江も參候、尤今日天氣も快晴罷成候付明日出立ニ而御帰り有之様御手当相替候ニ付、其段諸向江申渡方時都合(能脱カ)相濟、七ッ半時分主税一所ニ引取候事、

以手紙致啓上候、然は飛彈守方江為御饒別御心寄之品々被懸御意被入御念之段忝被存候、右御礼私より宜得貴意旨被申付候、以上、

十一月十一日

曾小川帶刀

新納次郎四郎様

以手紙啓上仕候、愈御壯健被成御座珍重御儀奉存候、然は近々出立仕候付、為餞別何寄之御品々拜受仕、誠以難有仕合奉存候、屹參御礼可申上之処、主用取込候付先乍憚以書中御礼申上候、以上、

十月十一日

曾小川帶刀

新納次郎四郎様

一同十二日、天氣順風宜敷、朝五ツ過御供揃ニ而飛彈守殿御機嫌能会所御出立有之候上、祇園洲より御乗船直ニ出帆、福山之様御渡海御帰有之候、拙者共今朝六ツ過御用宿江相揃、直ニ御旅宿江罷出候処、則御盃等被下候、尤三原藤五郎・高田十郎右衛門・本田六左衛門・新納主税・田原藤太左衛門・拙者ニ而候、其外御目付など出役有之候、御家老衆は一昨日御暇乞御見廻有之候故、今朝は無其儀候、御滞在中何茂無差障御機嫌能御帰府ニ而安堵いたし候、御用宿之首尾相仕廻四ツ

時御殿江出勤、御届等申出万事相濟候付九ツ時分退出いたし候事、

一十月廿一日、月番御用人町田監物取次を以左之通被仰渡候、

新納次郎四郎

右は支配下之者聊之儀有之、先達而禁足被申付候、右ニ付而は兼而申付様不行届大形付、差扣被相伺候得共不及御咎目候、向後可被入念候、

右可申渡候、

十月

伊勢

右は春田加吉其外之者共禁足等申付候付、八月七日差扣申出置候間、右之通被仰渡候事也、

一十一月十日、佐土原より書状并品物左之通被下候事、一筆致啓上候、弥御堅固御勤可被成候、珍重被存候、然は飛彈守今度其御地江參上被致候処、滞在中御叮嚀被成御馳走被仰付之、且湯治場迄茂段々御取持別而

被為入御念御儀忝次第被奉存候、誠右様彼是御世話罷成万端無滞被相仕廻不浅大慶被存候、依之此節使者被差上候ニ付、御礼被申述候印迄鴨簀卷二・手樽一宛被致進覽之候、此段私より宜得貴意旨被申付如斯御座候、恐惶謹言、

十一月六日

曾小川帶刀
久健判

三原藤五郎様
新納次郎四郎様
本田六左衛門様
高田十郎右衛門様
新納主税様

参人々御中

右老通連名ニ而参候、

一筆啓上仕候、愈御壯健可被成御座珍重奉存候、然は先頃其御地滞在中は何角御懇意被仰下、御蔭を以万端無滞相仕舞、且又御音物等被下御厚情之程不浅忝奉存候、右之御礼為可申上如斯御座候、仍干帥簀卷二進上

之仕候、恐惶謹言、

十一月六日

曾小川帶刀
久健判

新納次郎四郎様

参人々御中

一筆啓上仕候、向寒之節御座候処愈御勇健可被成御勤仕珍重御儀奉存候、然は先達而飛彈守供ニ而其御池江参上仕候処、彼是蒙御懇命以御蔭無滞相勤難有仕合奉存候、右御礼時候御伺旁為可申上如斯御座候、恐惶謹言、

十一月六日銘々より

富田藤吉
通純判

檢本六郎右衛門
成武判

新納次郎四郎様

参人々御中

右返礼左之通、

御礼致拜見候、

飛彈守様弥御勇健被成御座珍重奉存候、然は鴨簀卷二

・手樽一被成下忝奉存候、右御礼為可申上如斯御座候、御序之節可然様御執成頼存候、恐惶謹言、

十一月十六日

新納次郎四郎
久仰判

曾小川帶刀様

御札致披見候、愈御堅固珍重存候、然は千帥簀卷二被懸實意忝存候、御礼為可申上如是御座候、恐惶謹言、

十一月十六日

新納次郎四郎
久仰判

曾小川帶刀様

尚々、清水郷古書付只今相見得候処別紙差上候、猶又追々相見得候へ、重而可申上候、以上、

以別紙致啓上達候、其地肝付家筋之儀ニ付糺事御頼申上置候処、早速家伝之成行被仰越致領掌候、御着涯御繁雜ニ茂候半、甚御面働罷成候、当地肝付家之儀ニ付別而証拠相成誠ニ大慶之至り御座候、深々御礼申上候、此旨添書仕候、以上、

新納次郎四郎

曾小川帶刀様

御札令披見候、愈御堅固珍重存候、然は当地御滞在中之為御礼被示聞趣入御念儀忝存候、御報為可申入如是御座候、恐惶謹言、

十一月十六日

新納次郎四郎
久仰判

富田藤吉様

檢本六郎右衛門様

銘々江

十一月廿一日、御用人嶋津右門取次を以左之通被仰付

候、

御用人

新納次郎四郎

川上孫左衛門

右は甲突川筋双方屋敷掛并川面畦反御竿打分方付、御用掛被仰付候条可申渡候、

十一月

〔朱書〕安房
〔朱書〕「菱刈」
〔朱書〕「隆觀」

右之通致承知候付、孫左衛門申談、書役橋口彦左衛門・同助役數根仲次郎江掛申付候、左候而外御役々左之通掛被仰付候事、

御勘定奉行
二階堂 蒨

御勘定方小頭
松元十兵衛

御趣法掛

三原藤五郎

岩下新太夫

右は甲突川筋双方屋敷掛并川面畦反御竿打分方ニ付御用掛被仰付候条可申渡候、

友野市助

十一月

安房

森川利右衛門

一十二月三日、月番御用人鳥津矢柄殿取次を以左之通被

調掛勤

重田郷左衛門

仰付候、

久保小兵衛

新納次郎四郎

道奉行

川上瀬兵衛

新納主税

田畑武右衛門

右は来年頭御規式御用掛町田監物・伊木七郎右衛門江被仰付置候得共、被成御免、代被仰付候条可申渡候、

御目付

國分十右衛門

十二月三日

嶋津將監

早川九郎右衛門

郡奉行

大野四郎右衛門

迫田仲之助

御勘定方小頭勤
喜入九郎

一十二月十三日より甲突川筋双方屋敷掛御竿打分方相初り、右之掛御役々都而毎日四ツ時分より大鐘時分迄相勤、同廿日迄日数八日無懈怠相勤川下迄都而相濟候、尤絵図面取仕立御家老衆江差出置候事、

一同月廿三日、御趣法方御用人三原藤五郎取次之筋を以
岩下新太夫左之通被仰渡候、

但馬殿より被相渡候御書付之写、

金八拾兩

新納次郎四郎

右は亡養父代所帯方難波ニ付内願之趣有之、家来名前
を以勝手向申付置候処、差支之訳有之引替金三拾兩ツ
、五ヶ年、年々十二月限被成下候筋被仰付、老ヶ年被
相渡候処、是又差支之趣有之、其後不被成下段申渡置
候、然処此節猶又分而無抛内意申出趣有之、当時柄不
容易事候得共、別段之御取訳を以御内々右之通被成下
候条可申渡候事、

右之通被仰渡誠ニ以難有次第ニ付、廿三日則但馬殿
并藤五郎・新太夫且又相良甚太夫・高田十郎右衛門
御内意ニ付段々致心配給候付、見舞候而当座之挨拶
迄申置候、左候而翌廿四日右藤五郎取次を以御金八
拾兩老包被相渡候而致頂戴候事、

本文ニ付御礼として但馬殿江左之通、

大鯛三枚 代壹貫七百元

酒拾盃 代壹貫三百三十文

干菓子一箱 代九貫五百文

右箱調代壹貫三百四十八文

内入付之菓子左之通但三重物

上老重干菓子 代貳貫五百文

中老重紅みそれ餅 代三貫五百文

下老重小倉野 代三貫五百文

錢百文 諸雜費代

拾三貫九百八拾文

右一行日置屋敷之方

一三原藤五郎殿・山本新右衛門江

大鯛貳枚ツ、酒八盃ツ、遣候、

右鯛四枚代壹貫八百文

酒十六盃代壹貫三百三拾貳文

錢三貫百三拾貳文

右兩所分

惣合錢拾七貫百拾六文

外二

相良甚太夫殿段々預世話候付、在合之嶋縮緬あわせ
羽織壹ツ・金子百疋礼として差遣候事、

一なめり河のお時どの事、当春比より何となく身弱く候
ニ付、則より薬用・灸治等手厚養生有之候得共、段々
不塩梅ニ成行十月、霜月、師走弥増疲勞症相成、拙者
共も甚^(因)込入、十二月中旬比よりは類中申談繰廻し泊り
共いたし、一向看病いたし候得共、追日勞倦相成年末
極々不相勝、時節柄誠心配之事ニ而、歳暮も無厭致滞
在居候事、

一右ニ付来正月は月番廻り合候付、年頭掛り被仰付置候
得共、廿九日ニ相成御断内意新納主税を以申上置候、
然如同人取次を以左之通被仰付候、

新納次郎四郎

右は来年頭御規式御用掛被仰付置候得共、被成御免候
条可申渡候、

十二月

伊織

〔朱書〕
「天保九年戌十二月終」

〔表紙〕

久新納仰雜譜

天保十年亥正月ヨリ
十四年卯十月迄

〔新納久仰譜卷三ノ二自天保十年正月〕

一天保十年己亥正月元日、滑川病人弥増不相勝候付滞在ニ而登城等茂不相調候、然処同二日昼八ツ前終ニ養生不相叶迷惑いたし候事共也、因て同四日葬送、法名芳春院殿と申候事、

一同二月八日、晝寅刻畠山主計殿病氣養生不相叶絶言語候、主計殿事去秋比より病氣ニ而是亦疲労症ニ而段々

不塩梅相増候処、お明とのも同様病氣ニ付看病方も難相濟、諏訪家江滞在ニ而養生之処右次第ニ付同晚畠山家江病氣之筋ニ而被焔、同九日葬送有之、法名裕清院殿と申候事、

口上覚

又次郎殿儀踊之内榮之尾温泉江湯治御暇ニ而被差越筭候付、御附之御役々被召付度存候付御暇被成下、往来送人馬相渡候様重富役々共より申出其通願出候処、先年私領御暇等之節送人馬不被成下候旨被仰渡置候儀、役人取調差出候書面其儘ニ而差上今更大形之至奉存候依之奉伺差扣候、此旨被仰上可被下儀奉頼候、以上、

三月九日

新納次郎四郎

右は御附御役々都而奥支配故御側御用人江差出置、間違致到来候付、右差扣も御側御用人野崎良右衛門江差出、勤方之儀も相伺候処、不及遠慮旨同人取次を以被仰渡候事、

一 同月十日、致出勤居候処、樺山伊織殿宅江ハツ後親類
同道ニ而可罷出旨被仰渡候ニ付、名代二階堂源太夫江
相頼差出候処、御用人新納主税を以左之通被仰付候事、
逼塞

新納次郎四郎

右は樺山彌左衛門事、御用人座書役勤之節、役儀御断
申出候一件ニ付、不行届之儀有之候、大形付差扣相同
候、依之右之通被仰付候、

右可申渡候、

三月十四日

伊織

右は御用人一同不行届ニ付、去年初秋差扣連名ニ而申
出置候故也、

一 御自分事逼塞被仰付置候得共、御用之儀候間、今ハツ
時親類致同道伊織殿宅江可罷出候、病気等候ハ、名
代可被差出候、以上、

四月朔日

二階堂右八郎

新納次郎四郎殿

私事、逼塞被仰付置候得共御用之儀候間、今ハツ時親
類致同道伊織殿宅江可罷出、病気等候ハ、名代可差出
旨被仰渡趣奉畏候、以上、

四月朔日

新納次郎四郎

二階堂右八郎様

右ニ付ハ後樺山伊織殿宅江罷出候処、右八郎より左之
通被仰渡候、

新納次郎四郎

右今日逼塞赦免被仰付候条可申渡候、

四月朔日

伊織

右申渡相済、則伊織殿被為逢長髪御見届被成候事、

一 四月五日、月番御用人川上孫左衛門取次を以左之通被
仰渡候、

新納次郎四郎

右は又次郎殿湯治江被差越候ニ付、被附置候御役々往
来送人馬等被成下度旨内用頼御用人申出、人馬之儀は

自家計申渡置候処、役人願書取しらべ不行届候を夫形願申出、大形之旨差扣相伺候得共不及御咎目候、向後可被入念候、

右可申渡候、

四月

但馬

〔朱書〕
「願之通御暇被下候、

四月

但馬

口上覚

私事、長々腹之痛有之、段々尽手養生仕候得共、今以寸切と全快不仕、此涯湯治相応可仕旨療医より承申候、依之三廻御暇被成下度奉願候、左様御座候ハ、御蔭を以市來温泉江差越得と入湯仕度奉存候、此等之趣被仰上可被下儀奉頼候、以上、

但療医証文相添差上申候、

四月六日

新納次郎四郎

証文

新納次郎四郎事長々腹之痛有之、私療治仕候得共未寸切と無御座、此上は温泉相応可仕及見申候間、仍而証文如斯御座候、以上、

御小姓与
表医師

亥四月

海老原元信印

右之通月番御用人二階堂右八郎へ差出置候処、則日願之通御暇被下候間、則明七日より差越候段同人江届申出置、内実は六日より差越候事、

口上覚

〔朱書〕
「願之通御暇被下候、

四月

但馬

私事、腹之痛有之依願市來温泉江三廻湯治御暇被下置、去ル七日より差越折角入湯仕候得共、未寸切と全快不仕御暇日数も明廿八日迄管合申候間、何卒今一廻重御暇被成下度奉願候、尤療医証文相添差上申候、此旨被仰上可被下儀奉頼候、以上、

四月廿七日

新納次郎四郎

証文

新納次郎四郎殿事、腹之痛有之于今寸切と無御座、今一廻入湯有之候ハ、寸切と全快可有御座見受申候、私療治仕候付此段申上候、以上、

但私事、市來温泉江差越居療治仕候、

大根占郷士

四月

原田瑞節印

右月番御用人川上孫左衛門江差出候処、則日願之通被

仰付候、左候而御暇日数五月八日迄筈合候間、八日ニ

今晝罷婦候得共病氣ニ付名代を以御礼御届申上置、内

実ハ五月十八日罷婦候事、

一 右湯治中、地頭所儀新納主税支配下嶋津藏人江相頼置

候事、

一 筆啓上仕候、愈御勇健可被成御座珍重奉存候、然ハ

伊地知(季安)小十郎殿家系図吟味筋之儀ニ付而ハ、兼而於其

御地被仰聞置候趣段々承合候処、爰許ニ而も慥成系図

無御座由候得ハ稔と申上兼候得共、是迄承伝之儀共承

知之儘、御別紙ニ下札仕此節差上申候、御披見可被下候、此等之趣早速可申上之処、右様不分明之事故彼是手間取延引罷成候段偏御高免被成可被下候、恐惶謹言、

五月廿一日

檢本六郎右衛門

成武判

富田藤吉

通純判

新

次郎四郎様

参人々御中

御札令披見候、炎暑之砌候得共愈御堅固珍重存候、然

ハ当地御滞在之砌伊地知小十郎頼ニ而、家筋一件札事

御頼申上置候処、銘々引札を以委細被仰越、御紙上之

趣致承知候、忝致落手候、彼是御用多中余計之御取扱

事ニ而、嘸々御面働ニ罷成候半、乍去小十郎方ニ而ハ

至而落着罷成深々悦存候、屹と御礼茂申上越呉候様拙

者迄承候条、此等之趣御礼旁為可申入如是御座候、恐

々謹言、

六月十六日

新納次郎四郎

富田藤吉様

久仰判

檢本六郎右衛門様

一当亥八朔御規式御請被遊候付、用頼御用ニ而御次第拜

見被仰付候付、左之通入用之分写置候、諸事天保八年

酉八朔御次第之通ニ而候事、

御対面所江

御出座、

一中紙

新納次郎四郎

伊集院 亘

諸地頭

右次郎四郎・亘御中段御敷居内上三疊目ニ而御礼、其

外兩人ツ、二疊目ニ而御礼退座、

但進上之中紙目録於敷舞台奏者番請取之、

桂 内記

新納衛守

町田主馬

右敷舞台舞羅戸より三疊目ニ而御礼退座、

但進上之中紙目録於敷舞台奏者番請取之、左候而内

記儀は名代を以御礼申上候付、家格之席ニ而左之

通、

右外前後酉之八朔通故略之、

〔朱書〕
「申出之通被仰付候、

七月

將監

右之通同月廿九日八朔掛御用人嶋津右門取次を以被仰付候事

一私共事、当八朔御太刀并中紙進上仕、御礼申上管御座

候処、奏者勤方付差支申候間進上物納被仰付被下度奉

存候、以上、

七月廿六日

新納次郎四郎

外二十二入

一八月三日、王子登 城之節古在番佐久田親方琉球官服

ニ而御礼申上候節、奏者番鎌田藤馬長袴ニ而奏者相勤

服違ニ付、当人并月番奏者番は勿論、拙者など繰出等

相勤居者迄も氣不相付、大形之旨差扣相伺候様被仰渡、

則日一統差扣相伺候、右ニ付勤方并御目通之儀も相伺候処、不及遠慮候段被仰渡候事、

口上覚

一十月十四日、月番御用人伊木七郎右衛門を以左之通被

私事、大口之内江先祖之墓所有之、此涯墓参仕度御座候間日数拾五日御暇被成下度奉願候、此等之趣被仰上可被下儀奉願候、以上、

仰渡候、拙者名代宮之原三十郎ニ而致承知候事、

十月十五日

新納次郎四郎

新納次郎四郎

外ニ拾五人

右は当八月王子其外江

御目見被仰付候節、繰出又は奏者等相勤、古在番佐久田親方奏者着服麻袴之筈候処、長袴之筋心得違候を夫形氣不相付、大形ニ付差扣被相伺候得共、不及御咎目向後可被入念候、

十月十四日

但馬

本行墓参御暇ニ候得共、内実ハ前文差扣之一卷有之御暇之願難申出、病氣分ニ而九月廿三日より妻并萬太郎吹出物等ニ而至極致難儀候付、召列市來江湯治として差越、前文御当り相濟次第願出御暇相濟候付、早速十七日より差越候届申出十月晦日出勤、残り日数二日差上御礼申出候、左候而御家老衆御謁は安房殿御用御取込ニ而有之候筋被仰渡候、右御暇中地頭所并支配下之儀同席鳴津矢柄殿江相頼置候事、

〔朱書〕
一願之通御暇被下候、

〔朱書〕
一申出之通被仰付候、

十月

但馬

十二月

伊織

右之通同十六日月番御用人伊木七郎右衛門取次を以被仰付候、名代新納主税承知候事、

一私事、来年頭付持参太刀仕御礼申上筈御座候得共、奏者勤ニ付差支申候間、納太刀被仰付被下度奉存候、以

上、

亥十二月廿五日

新納次郎四郎

外二十六人

右通年頭掛御用人川上孫左衛門江差出候処、申出之通被成御免候事、

天保十一年庚子正月

口上覚

私支配下和田新助其外之者共、先達而聊之儀有之禁足申付候、右ニ付而は兼而申付様不行届大形至極奉存候、依之奉伺差扣候間、此等之趣被仰上可被下儀奉頼候、以上、

子正月八日

新納次郎四郎

右之通月番御用人新納主税江差出、勤方之儀何様可仕(及脱力)哉相伺候処、不遠慮候旨被仰渡候事、

口上覚

私事、支配下之儀付先達而差扣奉伺置候、依之御目通罷出候処、何様可仕哉奉伺候、此旨被仰上可被下儀奉頼候、以上、

子正月十四日

新納次郎四郎

右之通月番御用人新納主税江差出候処、則日同人取次ニ而石見殿より不苦候旨被仰渡候事、

一二月朔日、石見殿より月番御用人嶋津市十郎取次を以公義流人掛被仰付置候得共、吉利仲江右掛被仰付候間被成御免候旨被仰渡候事、

一同月四日、御用人嶋津市十郎取次を以左之通被仰渡候、

新納次郎四郎

右は支配下之者共聊之儀有之先達而禁足等被申付候、右ニ付而は兼而申付様不行届大形之旨差扣被相伺候得共不及御答目候、向後可被入念候、

右可申渡候、

安房

二月

一 滑川お宮との事去冬比より身弱く候処、是又追々不塩

梅相増、お明との同様疲勞症ニ而色々煩相増、終ニ三

月廿五日九ツ時分養生不相叶同廿六日葬送、法名清心

院殿と号し候、去春以来兄弟三人打統之不幸何様之因

果ニ候哉、母上様最早御老体ニも被為在、去ル子年兄

上様御死去当年拾三回忌被為當、去々冬分はお明殿・

主計殿病氣難症ニ而正月二日お明との死去、二月八日

主計殿死去、今としお宮殿死去、ケ様之不幸ハ類少き

事共ニ而、母上様御心苦之段言葉も筆も難及、拙者共

ニも愁傷無限、只々見聞之人々事情察せよかしと願ふ

のミ也、

一 畠山家継目養子願且御免被仰付候次第左之通、

口上覚

私親類亡畠山主計亡養父畠山主馬娘、嶋津内匠殿三男

村橋傳十郎江縁組為仕度内々申談候間、御免被仰付被

下度奉願候、右娘之儀は亡主計江継目養子奉願候節、

幼少故先様取合申度依頼御免被仰付置候得共、未取合

不申内主計事致病死候間、此旨被仰上可被下儀奉願候、

以上、

亥十二月廿四日

新納次郎四郎

口上覚

拙者三男村橋傳十郎江、亡畠山主計亡養父主馬娘縁組

為仕度内々申談候間、御免被仰付被下度奉願候、此旨

御申頼存候、以上、

亥十二月廿四日

島津内匠

一同月廿八日、於敷舞台御用人島津市十郎取次を以登殿

より左之通被仰付候、

新納次郎四郎

右は親類亡畠山主計亡養父主馬娘、嶋津内匠殿三男村

橋傳十郎江縁組願之通被仰付候、

右之通被仰渡、且又内匠殿方内用頼御用人平川市左

衛門一所ニ被召出被仰渡候、

遺言書略ス、

右は私共親類畠山主計事、去亥十二月致病死直子無之、

及両度跡職延之願申上候処、去亥三月より拾式ヶ月被

召延置被下難有仕合奉存候、依之島津内匠殿三男村橋傳十郎事、主計亡養父島山主馬躰之儀ニ御座候間、繼

目養子仕度内々申談候間、御免被仰付被下度奉願候、

尤主計跡持高百七拾七石七斗四升三合九夕七才、居屋

敷老ヶ所、下屋敷二ヶ所所持仕候、此旨被仰上可被下

儀奉願候、以上、

子二月晦日

嶋津 求馬 印

川上 矢五太夫 印

口上覚

拙者三男村橋傳十郎事、主計亡養父島山主馬躰之儀ニ

付右主計繼目養子遣申度内々申談候間、御免被仰付被

下度奉願候、尤傳十郎事初而之

御目見相済申候、此旨御申願存候、以上、

二月晦日

嶋津内匠

口上覚

私共親類島山主計繼目養子ニ島津内匠殿三男村橋傳十

郎事、亡島山主馬躰之儀ニ御座候間、繼目養子被仰付

被下度奉願置候処、其後右傳十郎妻病死仕候付、此段御届申上候、以上、

子四月廿六日

嶋津求馬印

川上矢五太夫

一子六月十三日、月番御用人島津又七郎取次を以左之通

被仰渡候、

島山主計繼目養子

島津内匠殿三男

村橋傳十郎

内用頼

御用人

願人 嶋津 求馬

川上 矢五太夫

右之通願申出置候付、傳十郎事忌五拾日、服十三ヶ月相受、忌明之節届申出候様可申渡候、

但八歳以下ニ而は五拾日致遠慮届申出候様可申渡候

六月

但馬

一各間考人御用之儀候間明廿一日四時可被罷出旨、登殿

依御差函申達候、以上、

八月廿日

川上孫左衛門

島津求馬殿

川上矢五太夫殿

一御用之儀候間明廿一日四時可被罷出旨、登殿依御差函

申達候、以上、

八月廿日

川上孫左衛門

村橋傳十郎殿

右ニ付御請書式通如例差出候事、

一廿一日罷出候処左之通被仰付候、

皇山主計繼目

養子

嶋津内匠殿

三男

村橋傳十郎

願人

右願之通被 仰付候、

川上矢五太夫

八月

登

一八月廿一日、村橋傳十郎殿江願之通皇山家繼目養子被

仰付難有仕合奉存候、右ニ付則日滑川江引越有之候、

尤前以より今廿一日良辰ニ付、右次第相成候様極内意

等申込、加治木江茂細々御引合申上置都合能相整致安

心候事、

(朱書)「願之通御暇被下候、

八月

登

本行九月三日より差越候届申出置、同月廿六日今晝罷帰候との

届申出候、始終用頼代長野源助取計頼候、左候而御暇中支配下

島津矢柄、地頭所之儀は新納主税江相頼候事」

口上覚

私事、長々腹之痛有之折角尽手養生仕候得共、今以寸切と全快不仕、此涯湯治相応可仕旨療医より承申候、

何卒三廻御暇被成下度奉願候、左様御座候ハ、御蔭を以日當山温泉江差越、得と入湯仕度奉存候、此旨被仰上可被下儀奉願候、以上、

但療医証文相添差上申候、

子八月廿四日

新納次郎四郎

証文

新納次郎四郎事、長々腹之痛有之折角薬用仕候得共、今以寸切と全快不仕、此涯湯治相応可致見及申候、私療治仕候間証文如斯御座候、以上、

表御小姓与

表医師

大河原淳良

右月番御用人吉利仲江差出置候処、同廿七日同人取次を以願之通被仰付、九月朔日より内々差越、表向御届は追而申出候様相頼置候、左候而則日夜入五ツ時分國分内村湯之元江致参着候、此節は母上様・お久どの・萬太郎召列、供廻東郷喜左衛門・竹村吉之助、下女主人・下男老人・主従八人ニ而同月廿六日迄入湯いたし、廿七日朝打立罷帰候賦之処、廿六日夜より萬太郎事足

痛ニ、ひへ入り熱氣差起り相煩ニ付、十月十一日迄養生いたし候得共歩行不相叶故、同十二日新川筋船ニ而罷下り小村川尻江壹宿、翌十三日未明より出帆之筈候処、雨降出し連雨ニ而滞在、然処十四日晝より又々萬太郎事熱氣再発ニ而、十五日も相応相煩候付、大心配いたし方々より医師共相招候、然共十六日相成快方ニ向候間、十七日早朝快晴ニ付出帆、海上よろしく八ツ前鹿府下町津畑江着船、主従無異儀帰宅大安心いたし候事、

右内村江罷在養生中、鹿府より有馬洞洲湯治として被差越幸之儀付療治相頼候処、快方相成候付川下りニ而新川尻江一宿之処、右次第兩天相成無致方滞在之処、又々右之通再発之様ニ而至極不塩梅多く、前後ニ行迫り及心配候段は筆ニも不及、早々湯之元江申遣有馬氏深夜ニ相招療治相頼候処、奇妙ニ薬法の中いたし壹式帖ニ而平和ニ相向、追々快方ニ而翌十五日押通り平和ニ而、同晩は洞洲弟子餅原正因代診として遣し被呉厚く預懇意候、快方を得候次第は実には生々難忘次第ニ候

事、
〔頭注〕此文原書三記載ナケレ共憲ヲ以テ正セリ
十二世祖考者翁君朝服記

朝服一具、藏志布志市人又木次兵衛家、俗所謂麻上下也、自渠祖先、世々相伝、為吾先 善翁府君所嘗賜渠先某遺物云、新納氏宗子、世食邑於志布志、我列祖亦居宗邑、家臣頗多、蓋又木亦其一也、而宗氏之失邑也、府君尚幼、乃偕父、婦順公室、屢著偉績、補大口地頭、而又木氏仍居故邑者年久矣、嘗遭火災、延及隣近、凡失火者、去移他邑、蓋為旧刑、議者咸曰罪婦又木、々々陳実曰、吾不敢失、発自隣明矣、然遂被逐、奔于大口、謁

府君曰、願仮君威力、得還旧宅、則匪啻以雪其冤、実
是再造恩也、 府君親問、審其情実、乃使又木齎回致
土持大膳等書曰、渠吾勲旧臣、聞非火亦所失、請其還
之、縱令失火、既遵其律、避則避焉、請今赦回、不亦
可乎、由是、又木得復回志布志、居墳墓地、事親 府
君書、可概知焉、且渠家世宝伝、以為
府君所賜遺物者、不独朝服、所謂野太刀長三尺老部、長半、無銘

刀長三尺三寸、治工信吉、鑓長三寸五部、治工、三州吉田来兼房、各一口併為四件、而今其族繁衍、府下亦有分徒、曰又木嘉右衛門者、(如)貫吾臣籍、嘗請渠父、齎来悉藏諸其家、未幾、荐火、恐其燼之、而託吾家者、十五六年于此矣、今茲仲冬、次兵衛

介・嘉右衛門、來請余曰、此是什宝、不藏于家、動遭祚薄、筮則崇云、故欲仍旧悉復受還秘襲于家、余聽而尽婦也、於是乎、以為吾家械器、有識章者、莫古乎此朝服、而 所謂輪違十文字云、亦謂此家紋、明矣、故欲備後饗、乃命工、別擬製之、幅尺染色莫一所違、以貽吾家、粗記其由於此、永使子孫以知有古製所可觀云、

天保庚子十一月穀旦 久仰記

一札

一御太刀 一腰

但無銘御白輸入

一御鎗 一本

但有銘

一御長刀 一振

但有銘

一御紋付御上下 一具

右又木家先祖は

新納御家御先代様より依代々御披官筋之由緒、從

御先君武藏守様(新納忠元)、私先祖江右四行拝領被仰付置、至子

孫ニ伝来家藏仕居候処、亡父代及衰微、尤又木家筋御
家来御身分之儀は御方ニ付從

先御主君内藏様、鎗・長刀本式ニ致拵方可致支配置旨
被蒙

御意格護被仕置候処、度々之御類焼ニ而念遣敷候故、
從当主君様御沙汰之訳も被為在、御屋敷江御格護奉願

上被置候処、此節私方より御相談御願申上候趣有之、
熟談之上御下ヶ方之儀奉願上候処、右之意味合被 聞

召上候上、願之通御免許被仰付難有奉存、本行之通繼
領納仕候、此上は聊龜抹之儀等無之様、屹度家藏仕置

子孫江堅固讓渡仕候様相守可申候、就而は此以來御方
同様御家来同然之心得を以、永々年頭八朔暑寒等之折

ハ、御機嫌伺御方江相付可申上候、仍為後証一札如件、

天保十一年庚子十月

又木嘉右衛門殿

又木次兵衛印

一札

一御太刀

一腰

但無銘白翰入

一御鎗

一本

但有銘

一御長刀

一振

但有銘

一御紋付御上下

一具

右又木家先祖は

新納御家御先代様より依代々披官之由緒、從

御先君武藏守様、御先祖江右四行拝領被仰付置、至子
孫伝来致所持居候処、先武次右衛門殿代及衰微、尤又

木家筋御家来身分之通は拙者方ニ付從

先御主君様〔頭注〕平時御家老内藏様久命〔系孫候〕、鎗・長刀本式ニ致拵方蒙御意致格護置候

処度々逢類焼念遣敷候故、從当

御主君様御沙汰之沢茂有之、御屋敷江御格護奉願上置候、然処此節御自分より相談之趣有之、熟談之上御下ヶ方之儀奉願上候処、願之通御免許被仰付候付、本行之通相渡候条吃度被致領納聊魚抹無之様、子孫永々堅固可被讓置候、就而は此以來拙者同様御家来同前之心得を以、永々年頭八朔暑寒等之折御機嫌伺此方江相付可被申上候、仍為後証一札如件、

天保十一年庚子十月

又木加右衛門印

又木次兵衛殿

口上覚

私支配下橋口甚九郎其外之者共、先達而聊之儀有之禁足申付候、右ニ付而は兼而申付様不行届大形至極奉存候、依之奉伺差扣候、此等之趣被仰上可被下儀奉頼候、以上、

十一月廿六日

新納次郎四郎

口上覚

方限取締森園(岡カ)新助事、昨廿五日遠慮赦免被仰渡、御礼之儀六組触役所迄ニ而相濟候を、大目付衆被為逢候様ニ致取扱候、大形至極奉存候、依之奉伺差扣候、此等之趣被仰上可被下儀奉頼候、以上、

十一月廿六日

新納次郎四郎

右式通月番御用人二階堂右八郎江差出、勤方之儀も相伺候処、不及遠慮旨安房殿より同人取次を以被仰渡候一事、

一大口有村隼之助方江左之通申遣候、

寒冷相催候得共弥以御無事、御家内中茂御安全之筈目出度存候、当方拙者初家内中無異儀候、御安意可給候、然は木之氏取納方催促として、役人代東郷喜左衛門と申者差越候、万事例年之通御世話可給、乍毎延引罷成候半、是のミ不快存事ニ候、委細は喜左衛門口上ニ御聞可給、且又心外之御相談ニ候得共、備前三郎國宗在銘之身刀一腰喜左衛門江為持差遣候、是は先年実父式部大目付勤之砌、先高輪

御老君御用ニ而致出府候節、長束市郎右衛門と云し鹿府第一之刀功者被相詰居、其仁などの世話を以本阿弥家より相求置是迄致秘藏居候得共、拾ヶ年内外^(因)込事勝ニ而、就中去春以来兄弟三人大病相煩、終ニ三人共養生不相叶病中死後大分之及入費、全体究家ニ候処右次第猶更及難渋、既ニ朝夕も凌兼家宝之道具も売却、誠ニ不謂差繰等いたす為体と成行残念至極ニ存候得共、

無致形右之國宗も脇方江為引当遣置、追々利分相屯無拋先方より承趣も有之、其道は償置候へとも全備不致、兎角此刀何方ニ而茂永代ニ差遣、夫ニ而首尾相結申度存候得共、当時爰元知音之向相談出来兼候付其元江差遣候条、定而道具は過分御持合ニ而御邪魔たるへく御座候得共、金子七両弍歩ニ御取入置給度偏ニ頼申入候、万々一右金高不相調候ハ、六両弍歩程ニハ是非御取入給度、左候而以後御心ニ不叶儀も致到来候ハ、今兩三年之内此節取組之金高ニ而拙者方江請返し、少も御迷惑不相成様ニ可致候、只今差当難儀之成行御座候間、此段分而御相談申遣事ニ候間、御不肖ながらも御聞濟

可給儀千万所希御座候、勿論ケ様之御相談等は兼々不申入存意ニ罷在候得共、父兄之恩を以人と成候実家可捨置様無之、不顧恥辱御相談申入候、心中御察被成偏ニ御聞濟可給候、猶細事喜左衛門可申述候、以上、

霜月廿九日

新納次郎四郎

有村隼之介殿

一大口より東郷喜左衛門書状差遣候付、また／＼左之通申越候、

以別紙申越候、從 且那樣御腰物御渡被遊候、其元江被持越有村氏へ御持参ニ而候処、隼之助殿は折柄在勤留主ニ而隼治殿江被渡置、其後度々御出ニ而先日隼之助殿江御直談相成候処、当年は田方不作等旁ニ而とも金子調達不致候付、御腰物御質請被成候儀は御断被成度、然共旦那様より分而被仰越候御書面之趣茂有之候付、此節は金子三兩御取替被致候間、御腰物は貴様御持帰被成候様隼之助殿より返答御座候付、何様可致哉之旨細々御問合之趣早速旦那様江申上置候、然処有

村氏金子調達不被致、三両程御取替と申事ニ而候ハ、其儀は御断可被成、夫と申茂有村氏は菱刈七ヶ郷ニ而、宍両人の内福者と相見得候へは、七両内外之金子はたとひ手元ニ不在合候而も、脇方へ相談被致候へ、可相調答と御推察ニ而、右之御相談被仰越、左候而御腰物も名刀ニ而御座候得共、少々は申分茂有之候付、隼之介殿心ニ叶不被申候ハ、今老兩年も相立畠山家御縁合を以御取返被成、有村氏迷惑ニ不相成様利払ニ而も可被遊、誠ニ此節畠山家色々之御物入ニ而御難波之故、無御面目候得共被仰越候而、兼々左様成事共は不仰越候、思召之段も細々被仰越、此節迄は別段之儀付とふそ才覚いたし給候様分而御相談之処、右之次第纒三両位取替可被致との事候得は、外ニ御手断も可有之候付、有村氏は御断可被成候、誠ニ以今更不詮立事ニ御恥辱も被捨置、金錢之御相談有村杯へ御直書被遣候儀御亦面被遊候而、別而御後悔之事候、此上は何共御相談ニ不及候間、三両之取替ハ御断被成、御腰物も御持帰り可被成、左候而隼之介殿江貴様御持参被成候且那樣御

直書も、御取返可被成候、返々茂不詮立儀候、見苦敷御書面被遣候、後年被残置候事共、是茂今更不詮立事ながら甚残念ニ被思召候間、其趣被仰入御請取可被成候、乍重言畠山家は御実家ニ而、只今難被捨置御難波之故難黙止被仰遣候処、前文之次第ニ而只々御恥さらしまで相成、何とも残念被思召候間、此書状有村氏江御持参被成、此内之御相談はふつと御打切り置可被成旨御沙汰ニ而候間、此段申越候、以上、

師走廿一日 安藤十郎

東郷喜左衛門殿

敵寒之節罷成候得共、弥無御障候半と珍重存候、然は先達而東郷喜左衛門其元江取納方として差越候節、心外之御相談申入候処、御聞濟被成金子七両程御調達給候而、國宗之身刀は御預被置候由、誠ニ御邪魔之至何共難申尽、乍去細々申上越候通、当時実家危急之砌ニ而諸所江内談いたし候へ共不相調、夫より心外之儀ながら喜左衛門へ為持差遣たる成行ニ而候処、一往は当

年凶作旁ニ而御繰合出来兼候段承り、左候ハ、随分脇

方ニ而も才覚可致候間、其元之儀は御断申入候様、纒三四兩位は誰人茂相調候事と手強申越候処、如何被成御考候や、七両程之御調達仕合ニ存候、然ながら余程御迷惑ニ御考被成候半、乍去今明年中ニは是非請返し可申候間、少しも御損亡は相掛不申候、仮初ニも金談等申入候存慮毛頭無之候処、此節不得止事訖ニ而押掛成儀相働候付、此一条を以御迷惑とも相掛候而は頓と面眉も無之候間、右之処江は少しも御心遣不及候、畢竟右等之儀ニ御遠慮有之、一往は六ヶ數有之候半と爰元ニ而は及評議候、是まで世上ニも大口之武士と誉れを承居候処、ちと不似合御氣先と致物笑候、誠ニ人間は色と欲との二ツにて道を失ふものニ御座候条御互ニめて度かしく、

尚々、御蔭を以節季之用弁いたし候段御礼幾重もあつく申入候、以上、

正月九日

新納次郎四郎

有村隼之助殿

一金子七両

右は天保十一年子十二月、國宗在銘之身刀引当として差上置、東郷喜左衛門を以御借用之儀内藏方より御相談被申入候処、本行之通御取替被遣、則致用弁仕合之至御座候、右ニ付而は其涯元利御返濟被致御礼も被申述度儀ニ候得共、段々吉凶之入費打続不首尾ニ而候処、先達而右之取次いたし候、東郷喜左衛門ニも屋敷暇いたし罷歸候ニ付而は、猶又不束罷成御不案ニも御考被成儀ニ付、早速御返濟被致度事候得共、年内は又々色々入費有之頓と繰合出来不申、段々延引罷成御失礼ニ及ひ申候、然処此節右之通致調達候折柄、大脇氏御出府ニ而任便宜此仁江相頼御返濟被致候間御受取可被下候、左候而右之金子は其砌貴所江御在合無之、外方より御借入ニ而被遣候哉ニ承及居申候間、利分之儀何様ニ差上宜候哉、勿論其節別段証文等を以世法之御引結も不仕、誠ニ御心安き間柄故、口達迄之事ニ而貴所より御付状考通有之、利分等之事も何も書記無之故、先比家来竹村吉之助其表江差越候付、右之趣も御口合申

上候様申付置、其通御口合申上候得は本金迄御返済相成候ハ、利分ニは不及段被仰聞候由御座候得共、右之通其節御借入金ニ而被遣候哉ニ候得は、兎角利払も被成置候賦ニ付、無利息ニ而は御迷惑之管ニ御座候間、少も無御遠慮利分之儀被仰知可被下候、右ニ付此節は先ツ本金迄本行之通御返済仕候付、御受取之趣并右之返答旁何分被仰聞度、此段私より御礼彼是得貴意候様被申付候間、如是御座候、以上、

弘化二年巳三月

役人代

武田治右衛門

有村隼治様

為見合此方ニ而之さんめん書

一 金子七両 錢にして五拾貫四百文

兩ニ付、七貫貳百文替

天保十一年子十二月より

同丑年閏込拾三ヶ月

同寅年拾貳ヶ月

同卯年閏込拾三ヶ月

弘化元辰年拾貳ヶ月

同二巳年三月迄三ヶ月

メ五拾四ヶ月分沓わり利錢

錢貳拾七貫貳百拾六文

元利合

七拾七貫六百拾六文

右之通之算当ニ而候、然共有村氏より何分返答有之答也、

右之通有村氏江懸合置候得共、兎角利錢之沙汰ニ不及旨返答有之候付、探幽筆之竹之画二幅対一流為礼錢差遣置候事、

天保十二年辛丑正月より

一 正月廿二日、月番御用人伊集院平格取次を以左之通被

仰渡候、

御目通遠慮格

新納次郎四郎

右は方限取締森岡新助遠慮赦免ニ付而は、大目付江は御礼沙汰ニ不及候を心得違ニ而御礼為申出候、大形ニ付差扣相伺候、依之右之通被仰付候、

右之通可申渡候、

正月廿二日

登

一同月廿五日、月番御用人吉利仲取次を以左之通被仰渡、拙者別勤ニ付名代新納主税ニ而承知いたし候事、

新納次郎四郎

右今日御目通遠慮格赦免被仰付候条可申渡候、

正月廿五日

登

右ニ付翌廿六日改服ニ而出勤、吉利仲江御礼申出置候事、

一閏正月八日、月番御用人鳴津市十郎取次を以左之通被

仰渡候、

新納次郎四郎

右は支配下之者聊之儀有之先達而禁足被申付候、右ニ

付而は兼而申付様不行届、大形之旨差扣被相伺候得共不及御咎目候、向後可被入念候、

右可申渡候、

閏正月

安房

一兵庫小豆屋より之書状到来いたし候事、

尊礼難有拜見仕候、如仰新春之御吉慶重疊目出度申取候、其御表御揃益々御安泰被遊御超歳大悦奉存候、随而弊宅無異加寿仕候、乍憚御安慮可被成下候、寔不相替預御懇書大慶不斜奉存候、自是は時々御窺も不申上失礼勝ニ打過申候段、御海恕可被成下候、仰之通旧臘より早春ニ至り近年不覚敵寒ニ而、折々雪降積今以余寒退兼候処、時候御障無之御健ニ被為入候半と奉悦候、尚カ当随分御自愛可被遊候、将亦被為懇尊意遠路之処御印籠根付一組御恵投被成下難有拜受仕候、不相替御懇情至而厚御礼奉申上候、且家族共へも毎度御懇御加筆被成下恐入申候、何れも宜敷御挨拶可申上様申出候、尚乍筆末御一同様江宜敷御鶴声奉希上候、随而鹿品之至

御座候へ共柄糸大小一組奉進候、御笑留被下候へは大慶奉存候、

一 御実家様御母堂様ニ茂随分御機嫌能為入候由御同悦至極奉存候、何卒御序を以宜敷被仰上置被下度奉願候、

一 主計様御繼目御養子之儀、此節御血統之御内ニ御男子無御座候付、段々御吟味之上加治木御屋敷様御三男御

貰受被遊度御内々御申込被遊候処、御聞濟有之、去秋〔朱書〕「天保十一年八月廿一日繼目養子願之通被仰付候事」御願通御繼目御養子ニ被仰付、高分畠山傳十郎様ニ而

御座候趣、万々目出度御儀御同前恐悦奉存候、依而今般御歛書状差上申候間、乍憚可然様御取成被下度奉願上候、右ニ付而は御妻女様之御儀も、此節は他家より御貰受当春中御取究御引越ニ被成候様御取計可被遊御思召之事共迄、御細書為御知被下忝承知仕候、就而は御内外何篇御心配被遊段奉恐察候、何分ニ茂宜敷數御取計程具々伏而奉希候、右之外御叮嚀之御細文被仰下候得共、乍失礼文略仕候、先は右御礼申上度貴報旁以愚札如是御座候、恐惶謹言、

二月十一日

畠山助右衛門

新納次郎四郎様
尊下

口上覚

〔朱書〕
一願之通御暇被下候、

三月

但馬

私事、長々腹之痛有之段々尽手養生仕候得共、今以寸切と全快不仕、此涯湯治相応可仕旨療医より承申候、依之三廻御暇被成下度奉願候、左様御座候へ、御蔭を以日當山温泉江差越得と入湯仕度奉存候、尤療医証文相添差上申候、此旨被仰上可被下儀奉頼候、以上、

丑三月朔日

新納次郎四郎

証文

新納次郎四郎事、腹之痛有之薬用仕候得共、于今全快不仕、此涯湯治相応可仕見及申候、私療治仕候間仍而証文如斯御座候、以上、

三月朔日

桂内記組
御小姓与
前田杏齋

右之通月番御用人永江伊右衛門江差出置候処、則日同人取次を以願之通被仰付候事、

事、

新納次郎四郎

右ニ付同月二日お久殿・萬太郎・家来式人・下女老人

右は

大御所様御法号御到来之上、於南泉院御法事并御位牌被遊御安置候付、御用掛被仰付候条可申渡候、

三月

央

浦人所江老宿、翌三日湯之元江参着、内村百姓善助所江旅宿いたし候、御暇御届之儀は四日より差越候筋ニ申出、帰り御届は同月廿七日今晝罷帰、日数管合御礼御届申出候段、名代を以申出候様頼込置、内実は同

一五月二日、月番御用人伊集院平格取次を以左之通被仰付候、

新納次郎四郎

月晦日湯之元打立、加治木向江町中宿之家来淵脇甚右衛門所江止宿、翌四月朔日帖佐米山之薬師并総禅寺、

鳴津權五郎

其外高麗稻荷・加治木長年寺・龍門瀧等諸所致見物、

右当八朔御祝儀付御用掛被仰付候条可申渡候、

同日夕刻淵脇宅打立夜道ニ重富脇元江参り一宿、翌二

五月

多門

日早朝出船心岳寺江致参詣、暫時罷在茶共給へ出帆、

四時鹿府下町江着船、主従無事帰宅、善左衛門事も一

刻立寄ニ而被帰候事、

一月番御用人嶋津權五郎取次を以左之通被仰付候、然共内分湯治より罷帰内付、名代新納主税ニ而致承知候

一久仰御用人兼務之内定式御用掛は勿論、不意臨時之御用筋取扱掛不携儀は相少、老君齊宣公磯御茶屋江御下向之時老人共江御祝被下候御用掛り町田監物・北郷左門江、且亦琉球王子上国ニ而御膳進上之事在り、此時新納主税・二階堂右八郎江御用掛被仰付、此二ヶ条の

ミ久仰全預らす、其余不時御用筋都而掛り被仰付相勤候事ニ而冥加之至りなり、因て窃に此よしを記し置也、

新納次郎四郎

一御用之儀候間明十一日四時可被罷出旨、但馬殿依御差
函申達候、以上、

右之通御役替被
仰付、御役料高是迄之通被下置候、

五月

但馬

五月十日

右之通被仰付候付御請御礼申上相下り候、左候而同日
於御用人座平格取次ニ而左之通被仰付候、

伊集院平格

新納次郎四郎

新納次郎四郎殿

右は寺社方御内用掛川上東馬旅行、又は何そ付差支候
節々差寄相勤候様被仰付候条可申渡候、

五月

但馬

御用之儀候間明十一日四時可罷出旨、但馬殿依御差函
被仰渡趣奉畏候、以上、

五月十日

新納次郎四郎

伊集院平格様

私事、今日寺社奉行江御役替被仰付難有仕合奉存候、
依之御序之節御太刀進上仕御礼申上度奉願候、此旨被
仰上可被下奉願候、以上、

五月十一日

新納次郎四郎

一十一日罷出平格江届申出候処、於敷舞台平格引進ニ而
左之通、

右之通杉原堅紙ニ而伊集院平格江差出置候事、
口上覚

寺社奉行

私事、今日寺社奉行江御役替被仰付候ニ付、御序を以

誓詞被仰付被下度奉願候、此旨被仰上可被下儀奉願候、以上、

五月十一日

新納次郎四郎

右杉原半切ニ相認、御小納戸永江休之丞江於鳴子之口差出置候事、

覚

一 寺社奉行

一 御役料高百八拾石

一 持高百四拾六石壹斗五升九合七夕四才

一 居屋敷千石馬場

一 当年三拾五歳

右は私事今日寺社奉行江御役替被仰付難有仕合奉存候依之明細帳為御見合此段申上候、以上、

五月十一日

新納次郎四郎

右杉原半切ニ相認御側御用人坂元平左衛門江壹通、伊集院平格江も壹通同案を以差出置候事、

一 右通御役替被仰付候付則より寺社方江差越相勤候、当分同席大目付ニ而寺社奉行勤川上東馬殿、寺社奉行一

篇鳴津藏人殿、拙者迄三人ニ而候、外ニ市田右近殿寺社奉行ニ而御小姓与番頭勤ニ而候、左候而八ツ退出より例之通口上書を以御家老鳴津但馬殿・鳴津石見殿・

菱刈安房殿・鳴津登殿・猪飼央殿、御側詰岩下典膳殿、

若年寄鳴津將監殿・喜入多門殿・樺山伊織殿、大目付

鳴津頼母殿・末川久馬殿・赤松主水殿・川上東馬殿并

大目付ニ而御側役勤碓山將曹殿并引進御用人伊集院平

格江見廻帰宅、類中并兼而出入之面々相招き賑々敷祝

ひいたし候事、

一 寺社奉行江御役替被仰出、同月廿二日より寺社方取次并書役迄三度ニ相招酒共振廻候、諸入目賤敷事候得共

為見合左之通記し置候、

一 錢九貫三百文

右御役替之当日祝ニ付酒肴代初諸色都而之払、

一同壹貫文

右同断ニ付座頭梅市召呼礼分、

一同八百文

右は御役替之当日書役松田金左衛門鼻紙袋手水所

江落し込候ニ付、取入を以別段遣し付代料、

ノ拾壹貫百文

一錢三拾三貫拾六文

右客人三日分魚屋・八百屋其外諸色代

一同拾壹貫九百六十文

右同断酒代

一錢拾壹貫六百拾文

右諸雜之払

一同七貫百四拾八文

右菓子屋色々々代

一同壹貫貳百四拾八文

薪廿四束代

一錢三貫百八拾八文

白米三斗壹升八合代之賦

一同九百文

醤油拾八盃代

ノ七拾貫七拾文

御役替ニ付寺社方大工并手伝且小仕等迄、武別荘江召

呼酒共振廻候節之入目

一錢貳貫八百四拾八文

右七拾貳文酒三拾八盃代

一同八貫四百五拾六文

魚屋・八百屋方払

一同貳百文

薪五束代

一同貳百四拾八文

醤油五盃代

一同四百七拾五文

白米四升七合五夕代之賦

一同四百文

豚代

ノ拾貳貫六百四拾三文

惣合九拾三貫八百拾七文

外ニ現米四斗九升九合払并

御役御礼ニ付進上物入目有之、

一氏神御宝前江手水針一ツ寄進いたし左之通記し置候事

天保十二年辛丑五月十一日
轉寺社奉行因恭献之

久仰

一 佐土原用人富田藤吉見廻ニ付、左之通手紙を以挨拶申入候、

今般当地江御越ニ付一昨日は預御見廻忝存候、右之御礼為可申入如是御座候、以上、

五月十五日

新納次郎四郎

富田藤吉様

右之通料紙中奉書半切ニ相認切封ニ而、家来東郷喜左衛門上下着用為致差遣候事、

口上覚

印判老ッ

右は私印判ニ而御座候処、此節相改申候間右印判差上申候、以上、

丑五月十八日

新納次郎四郎

右之通杉原半切ニ相認印判相添、月番御用人新納主税江差出候事、

一筆致啓達候、未暑氣甚敷候得共弥以無御障、御家内方茂御同様御座候半と珍重存申候、拙者無異儀罷在候、家内共且又於実家茂老母先は元氣之体御座候、御安意可給候、然は先便より拙者江何寄調法之柄糸一組、且又傳十郎方江色々御取合御惠投誠ニ以忝存候、毎々御厚情之程不残致受納候、早速右等之御挨拶も可申越之処及延引致失礼候、此節右御礼且時氣御尋旁申入度如斯御座候、恐惶謹言、

新納次郎四郎

久仰判

六月廿八日

畠山助右衛門様

参人々御中

追而申越候、傳十郎事先達而は詰衆御役被仰付候、誠ニ以無存寄早々敷右等之蒙、尊命難有次第奉存候、右御吹聴等は彼之方より申越候半、拙者儀も先月十一日

寺社奉行江御役替被仰付是亦冥加之至奉存候、旁御吹
聽申上候条御喜悅可給候、以上、

丑九月朔日

新納次郎四郎

受取

(朱書)
「本文願之通被仰付候間入目料

見分

愛甲源五郎印

寺社方江上納可被致候、

錢貳貫貳百五拾貳文

丑九月二日

銀ニして貳拾貳匁五分三厘五毛

寺社奉行所」

新納次郎四郎

口上覚

役人

河内守久逸公御寄進

右は伊作海藏院江有之候、

一御掛物 一幅

日新公御画像と申伝候御掛物御表粧調替依願寄進被仰

但文殊菩薩画像

付候、御表粧相調候付入目料として上納也、

右は日新公
(島津忠良)

丑九月四日

寺社奉行所印

御幼年之御画像と申伝、伊作海藏院江致格護来候処、

及大破寺社方御計を以御表粧調替之願申出候由、右ニ

付

一十一月十九日

(島津寄宣)

中将様御儀先達より御不例被遊御座候処、先月廿四日

御養生不被遊御叶御逝去之段御弘め有之、即日御家老

菱刈安房殿・大目付赤松主水殿・寺社奉行川上東馬殿

上可被下儀奉頼候、以上、

拙者江御用掛被仰付候、尤御用人新納主税・伊木七

郎右衛門、御側御用人高田十郎右衛門、御趣法方掛三

丑十二月三日

嶋津藏人

原藤五郎、御作事奉行田中仲次郎・迫水善左衛門、御

新納次郎四郎

細工奉行境田善助・伊集院早太等掛被仰付候事、

右願書御葬式掛御用人伊木七郎右衛門江差出置候処、

寺社奉行

同十二日同人取次を以御免被仰付候事、

新納次郎四郎

右は

中将様御逝去ニ付御用掛被仰付候条可申渡候、

天保十三年壬寅正月より

十一月

安房

一 正月十二日、福昌寺江

右之通月番御用人川上龍衛取次を以被仰付候、左候而

御遺体御入、同十五日御葬送、同廿日より廿四日迄御

五六日相過キ嶋津藏人殿江も同断掛被仰付度内々申出

中陰、二月一日より四日迄三拾五日并四拾九日・百ヶ日

趣有之、其通掛被仰付候事、

御法事被相混御執行、始終無滞被為濟首尾能相勤候事、

口上覚

口上覚

〔宋壽〕
「可為願之通候、

私嫡子新納萬太郎事、当年拾壹歳罷成申候間、御序之

十二月

安房

〔島津齊彬〕
大慈院様御葬礼之節、私共葬衣着用仕候儀御免被仰付

節元服被仰付被下度奉願候、私家之儀は御折六合・御

被下度奉願候、

樽三荷・御太刀馬代進上仕来申候間、是亦先格之通被

〔島津重宇〕
圓徳院様御葬礼之節茂葬衣着用御免被仰付候間、此等

仰付被下度奉願候、此等之趣被仰上可被下儀奉願候、

之段被仰上可被下儀奉願候、以上、

寅正月十五日

新納次郎四郎

口上覚

一 私嫡子新納萬太郎事、元服之願別紙を以申上候、依之御差支無御座候ハ、私事内藏と名替被仰付、萬太郎儀次郎四郎と名替被仰付被下度奉願候、此等之趣被仰上可被下儀奉願候、以上、

寅正月十五日

新納次郎四郎

右式通杉原堅紙ニ相認、大身分触役所江長野源助より差出置候事、

覚

一 蕎麦切料

三百疋

寺社奉行

一 蕎麦切料

三百疋

寺社方取次

一 蕎麦切料

五百疋

寺社奉行所

書役
手伝

右之通従

(島津齊興母)
寶鏡院様被下候事、

右之通寅二月五日福昌寺江御仏詣之節、於福昌寺詰合之取次櫻井半之丞江錦崎御附御用人池田市兵衛を以被下候、右ニ付翌六日錦崎江拙者罷上り、一統より之御礼取束右市兵衛江申上置候事、

新納次郎四郎

右嫡子新納萬太郎元服之願被申出、来月六日

御直元服被仰付候、御折六合・御樽三荷・御太刀銀馬

代進上仰被付候、

右可申渡候、

二月

央

右之通寅二月十八日月番御用人二階堂右八郎取次を以被仰渡、長野源助致承知候事、

[朱書]
願之通御太刀進上ニ而

来ル六日御礼被仰付候、

三月

伊織

右之通御用人宮之原三十郎御取次を以三月二日被仰渡候事

口上覽

一私事嫡子新納萬太郎、来ル六日

御直元服被仰付候旨被仰渡難有仕合奉存候、依之私儀御太刀進上仕御礼申上度奉願候、此等之趣被仰上可被下儀奉願候、以上、

寅二月十九日

新納次郎四郎

右之通杉原堅紙ニ相認大身分触役所書役高城七郎右衛門江長野源助より差出置候事、

一御自分事、来月朔日於御書院御太刀進上ニ而御役之御礼被仰付答候間、着服熨斗目・長袴ニ而当朝六ツ半時早目可被罷出候、以上、

二月廿九日

当番奏者番
嶋津東市郎
鎌田李之丞

新納次郎四郎殿

私事来月朔日於御書院御太刀進上ニ而御役之御礼被仰

付答候間、着服熨斗目・長袴ニ而当朝六ツ半時早目可罷出旨被仰渡趣奉願候、以上、

二月廿九日

新納次郎四郎

嶋津東市郎様
鎌田李之丞様

一御自分事、明後六日於御書院御太刀進上ニ而嫡子元服之御礼被仰付答候間、着服熨斗目・長袴ニ而当朝六ツ半時早目可被罷出候、以上、

三月四日

当番奏者番
菱刈孫兵衛
大野多宮

新納次郎四郎殿

私事、明後六日於御書院御太刀進上ニ而嫡子元服之御礼被仰付答候間、着服熨斗目・長袴ニ而当朝六ツ半時早目ニ可罷出旨被仰渡趣奉願候、以上、

三月四日

新納次郎四郎

菱刈孫兵衛様
大野多宮様

たゞきニいたし為持候事、

次郎四郎事
新納内藏

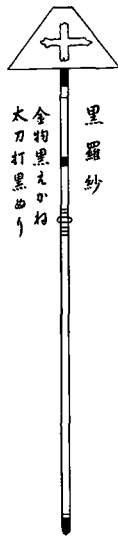
ノ

覚

私手鍵別紙絵形之通相替明日より為持申候付、此段御
届申上候、以上、

三月五日

新納次郎四郎



私嫡子新納次郎四郎事、此節元服被仰付候付、御礼日
等之節出仕仕管御座候得共、未幼少之儀御座候間一往
登 城御免被仰付被下度奉願候、此等之趣被仰上可被
下儀奉願候、以上、

寅三月七日

新納内藏

右之通相認御目付新納五左衛門江長野源助より差出候
事、右は拙者は迄為持候手鍵は分銅形黒ツミ毛直鍵

ニ而、以前久敬君為御持鍵ニ而候得共、右之鍵 久儔

君・久命君等数年為御持之佳例ニ付此節取替候、左候

而嫡子萬太郎事も明日元服ニ付、此節より同様相持白

右之通当朝四時月番御用人土岐平太夫取次を以、於御
用人座被仰渡候事、

三月六日

央

右之通名替被成御免候条可申渡候、

右之通杉原半切ニ相認、月番御用人土岐平太夫江差出
置候処、同十二日同人取次を以願之通被仰付候旨、口
達を以被仰渡候事、

一次郎四郎事、元服首尾能相濟難有奉存居候、然処三五

日相過御側役碓山將曹久徳に

上様御沙汰被遊候は、子共多キ中ニも北郷惣次郎・次

郎四郎など能キ子共ニ而候、先き様御用立ねハならぬ

よとの御意ニ而、惣次郎曾祖松翁ハ最早老体ニも候間、

親類但馬日置主久風也など世話可致様申遣と之事など仰られ

しよし、久徳私かに洩らされしを拜し奉り、実ニ人こ

そ多きに斯之こときハ祖先之余慶にやと肺肝に銘し、

家内一同恐入難有かり奉り、猶教諭怠るましきよし神

仏に誓ひ奉候事共なり、

但久徳懇意により大鯛二枚、酒一樽十盃入進覽いたし、

御礼厚申上置候事、

一次郎四郎久修右之ことく難有キ御意を蒙りしハ偏ニ祖

先之冥加ならんとそんじ、氏神之御前ニ石燈爐石基建

立いたし奉祈誓もの也、

天保壬寅三月六日

公手加男久修冠一循旧例時年十一

公向侍臣称其礼容余私聞之喜懼交集因恐成長後貞公

所鑑乃禱
氏神奠以石燈爾

藤原久仰敬書

奉賀

宗家新納君元服

維昔

先君競武日、我祖懷忠保

公室、輔翼功成称股肱、水魚君臣情軫密、爾来二百有

余年、精誠報国胆心専、

明主特賞忠功後、永賜裔孫

世祿伝、渥恩何物最貴重、元服之礼殊見寵、

君公開宮手加冠、更表世々是將種、今之嗣公賢且文、

夙振家声有令聞、起列

朝班奉職位、遠思祖考殊勩勤、令子秀骨又奇異、童

齒已見食牛器、今年始起謁

君公、加冠理髮礼悉備、

君公肇賜以嘉名、更加宝刀期後栄、宝刀燦爛飛電走、

魑魅鼠伏鬼神驚、此日吉辰大会客、為拳祝酒開宴席

珍種陳列酒如何、賀客醉歌不厭劇、宗末時升下座躑
半酬謝客敢一言、由来此宴真佳兆、華封三祝何須論

孝乎維孝施有政、千古格言起先聖、遺訓嚴肅能存家
請看積善有余慶、

末族時升拜具

口上覚

^{〔朱書〕}
「願之通御暇被下候、

七月

石見」

私亡養父、当十三回忌相当申候付法事仕度御座候間、
明九日終日御暇被成下度奉願候、此等之趣被仰上可被
下儀奉願候、以上、

七月八日

新納次郎四郎

右月番御用人永江伊右衛門江差出置候処、即日願之通
被仰付候事、

一御自分事、寺社奉行江御役替被仰付、去年頭迄は御礼
不相濟候処、其以後御礼相濟候得共、家ニ付進上物被
致来候間、来年頭より家ニ付於江戸御太刀進上被仰付
候、尤年々仰渡は無之候、此旨將監殿被仰候、以上、

但御受之届可被申出候、

十二月廿七日

鳴津權五郎

吉利 仲

新納内藏殿

私事、寺社奉行江御役替被仰付、去年頭迄之御礼不相
濟候処、其以後御礼相濟候得共家ニ付進上物仕来候ニ
付、来年頭より家ニ付於江戸御太刀進上被仰付候、尤
年々仰渡は無之候段、將監殿被仰候旨被仰渡趣奉畏候、
以上、

十二月廿七日

新納内藏

鳴津權五郎様

吉利 仲様

天保十四年癸卯正月より

一御用之儀候間明廿六日四時可被罷出旨、安房殿依差図
申達候、以上、

正月廿五日

二階堂卯八郎

新納内藏殿

御用之儀候間明廿六日四時可罷出旨、安房殿依御差図被仰渡趣奉畏候、以上、

正月廿五日

新納内藏

二階堂卯八郎殿

右ニ付翌廿六日可罷出候得共、於南泉院

(徳川家秀)

文恭院様御法事ニ付相勤難迎候間、成行を以名代嶋津

市十郎差出候処、於敷舞台御用人二階堂右八郎取次を

以左之通被仰渡候、

新納内藏家来

又木嘉右衛門

張紙

「本文嘉右衛門事申渡之節は、新納次郎四郎家来又木嘉

右衛門と為有之者ニ候、

右他国出差留被置候得共

文恭院様三回御忌御法事ニ付、此節御恩赦被仰付候、

右可申渡候、

正月廿六日

安房

右ニ付御三役方并取次御用人江口上書を以御礼廻いたし候事、」

口上覚

大口青木村

泉徳寺

右は新納内藏先祖武藏守忠元代天正十一年未六月、忠

元嫡子刑部太輔忠堯於肥前深江致戦死候を

(島津義久)

龍伯様深御感歎被遊、青木村之内懸命之地として拜領

被仰付則泉徳寺建立、当時迄無退転菩提所ニ而御座候、

然処同郷之内木之氏村茂忠元代拜領被仰付置、当時も

家来共多人数居住仕候、右家来共先祖之位牌は同郷之

内成就寺を初其外寺院江相頼置、法事等仕事ニ而候、

然共内藏菩提所致現在居候付而は、右泉徳寺ニ而法事

等執行候を当然之儀と存候、右ニ付成就寺其外寺院江

頼置候位牌追々泉徳寺江為相直申度候、乍去位牌相頼

置候寺内江墓所迄も有之候を引直候而は如何敷候ニ付

右等之分は矢張是迄之通位牌相頼置、不相替法事等為致執行、寺内之外卵塔中江墓所有之、位牌迄相立置候者共儀は都而泉徳寺江為相直申度候、

卯三月
成就寺

御役僧衆

右之通及御相談候子細は、泉徳寺之儀全体内藏菩提所故、破損等之節は都而内藏方より致修補来候処、内藏方も段々困究罷成修補難行届、且又家来共之儀も右通り菩提所故修補之節は木竹類相納来候得共、前文之通成就寺其外寺院江も位牌頼置候付、其寺修補等之節は似合敷致加勢儀も有之、双方之公役ニ而致難渋儀ニ候間、追々泉徳寺江相片付候ハ、内藏方主従は勿論、第一泉徳寺永統之為ニ可罷成事候間、御相談申上候条得と御勘考被下度、尤巨細之儀儀は(折カ)大口郷士新納武兵衛并家来共より御相談も可申上候間、前広此段申上置候様内藏被申付候間如斯御座候、以上、

用頼代
道嶋源五郎

〔朱書〕
「天保十四年」

一五月十一日 上様御機嫌能御着城有之候事、

一滑川母上様盆後より時候御障ニ而、きやく之様被遊御座候、全体皆腰脚に御痛所も有之、其上右之御不例旁ニ而至極御難儀有之ニ付、拙者共も折角御看病いたし滑河江滞在之處、拙者儀も時候当りニ而七月廿三四日より熱氣有之、廿八日ニ成りひとく気分狂ハしく致発熱候、折柄岩山玄伯母上様御療治中ニ付則より相頼候処、拙者もきやくの様見受候との事也、左候処無相違きやくニ相成、隔日のふるひ等にて帰宅も不相調、八月廿日比ニ成ふるひ等止ミ少し快方罷成候ニ付、廿五日致帰宅候へ共矢張稀ニふるひもあり、是は脚よりつとの辺引つり痛有之、九月中も寸切と無之、十月ニ成り余程快法を得候、尤当夏ハ雨廻り少く例年より暑氣甚敷、老若貴賤時候当り等多く拙者共も右之次第也、

口上覚

〔朱書〕
一願之通被仰付候

七月

多門

私事、当八朔中紙進上仕御礼申上管御座候得共、痛所にて御礼席罷出体無御座候間、進上物納ニ被仰付被下度奉願候、此旨被仰上可被下儀奉願候、以上、

七月廿八日

新納内藏

右之通月番御用人江差出候処、同廿九日願之通被仰付候事、

一天保十四年癸卯九月廿三日酉之刻男子誕生、于今久仰

三拾七歳、母久二十九歳也、

一同月廿九日七夜相立候ニ付、幼名を龜之介と附与いたし候事、

一拙者事前ニ記す通り、七月廿三四日より時候当りにて追々きやく湿ニ相成度々引戻し、十月十九日よりやうく出勤等出来之体相成、然共今以足之痛有之、歩行

難儀ニ付出勤往来もやうく馬ニ而相調候位なり、

寄進状

高拾石

右は此度就

忠元靈社御創建、為祭祀并修覆料永年奉寄進之者也、仍如件、

天保十四年卯十月十五日

新納内藏

久仰判

証文

大口木之氏村

竹之内門之内

高拾石

右は此度就

忠元靈社御創建、為祭祀并修覆料永年新納内藏被寄附之候儀寄進状之通御座候、依之諸出米御定法之通上納ニ而現所務取納可有之者也、仍如件、

役人

竹村吉之助印

天保十四年

卯十月十五日

用頼

天保10~14年

社司

二之宮勘解由殿

大口寺社掛

郷士年寄衆中

右同

組頭衆中

「久仰雜譜三終 天保十四年終」

道島源五郎印

新納久仰雜譜

天保十五年辰正月ヨリ
弘化四年未十二月迄

〔久仰雜譜天保十五年以來至
嘉永三年〕

四

天保十五年甲辰正月より

一 正月三日、家格ニ付持參太刀年頭之御祝儀申上候筈な
から、去卯七月末よりきやくニ而相煩ひ引続足痛等今
以不致快氣、持參太刀難相調、納太刀之願申上候処、
其通被仰付候付、名代を以納太刀相調候事、

一 三月十六日、夕方より次郎四郎事発熱追々疱瘡ニ相成、

拙者も十九日より引入致看病、中比少々煩も出合候得
共致順痘、十五日目四月朔日しめ揚相濟、都合能相仕
廻致安心候事、

一 次男龜之介事、四月六日夜より発熱ニ而是亦追々疱瘡
に相成、中比ニハ色々煩出合格別及心配候得共、都合
能十四日目同十九日しめ揚相濟別而致安心候事、
尚委細左之通、

一 四月六日夜より龜之介熱氣少々相発候ニ付、七日朝早
々重信怒成相招葉共もらひ候、然処夜入過より啼出長
々不相止候付、又々怒成江申遣候処、弟子参り腹痛ニ
而も可有之申事候処、其通ニ哉無程平和相成候事、

一 八日、熱勢相応有之少々疱瘡も見得候、昼怒成参候、
夕方相成又々啼出し暫不止候付、則怒成江申遣候処直
ニ参り、腹溝之氣ニ有之胸先こわり居候付、薬法加減
可致との事候処、無程平和ニ成り安眠もいたし候、且
亦今昼針科渡瀬幽察相頼候、針ハ至極宜敷様見得候事

也、

一九日、曉より又々啼出し候処苦痛甚敷体見得候付、早

々怒成并幽察江申遣候処、怒成弟子参り且又針治いたし候処九ツ半八ツ前比より追々平和ニ成り寝入候、夫迄の間ハ乳呑候事も無之、差出候而も大キニ嫌ひ見兼候程也、其後至極平和相成候間安心いたし候、夜中も押通り宜敷候而熟睡有之候、今日より馬場玄仙・重信怒成一会ニ而薬法吟味有之度相頼候、幽察は朝之内又夜入候而も相招候、昼八ツ時分針科飯田渭水も一度相頼候、昨夜迄ニ而は家内中夜起いたし候得共、今昼より彌太右衛門父子等被参呉候、晚野崎善左衛門或ハ家来又木元右衛門・黒岩勇藏等召呼候事、

一十日、疱瘡出揃ひ輕候事、昼中平和也、今日も玄仙・

怒成出会、幽察ハ当番ニ而隙無之、依而舍弟渡瀬玄悦并渭水相頼候、夜入押通り平和也、今昼も彌太右衛門等被参候、夜入林仲之丞・道島源五郎等也、

一十一日、疱瘡相応ニ出来候得共、重つ宜敷候間乍幼児致し安く有之と承り仕合之事也、両医師被参呉候事、

一十二日、今日も押通り順痘ニ而何茂差障り無之平和也、両医師相頼候事、

一十三日、今日も押通り候、玄仙病氣ニ而怒成迄被参呉候、夕方よりへきくわひ起り候間夜入針科西郷幽泉も相頼候、又玄悦も相招候、今晚は何分煩しく候間怒成留置泊り也、且伊地知小十郎・野崎善左衛門等も世話いたし被呉候事、

一十四日、今日は順痘相向、六ツ半時分ニハ自分より乳も呑候、昼玄仙・怒成出会、昼夕幽泉・幽察等も相頼候、夜入彌太右衛門等被参呉候事、

一十五日、弥順痘、玄仙・怒成・玄悦等相招候、夜入野崎・林・道島等也、

一十六日、弥順痘、玄仙・恕成一会、玄悦も相頼候、夜入彌太右衛門等也、

一十七日、朝順痘、恕成・幽察且又玄悦も相頼候、晩野崎・道島等也、

一十八日、順痘ニ而何も無滞仕合候事也、両医相頼候事、

一十九日、倍順痘ニ付今日しめ上げいたし候、両医師も被参候事、

右之通候間龜之介事ハ、去年九月極幼児之上相応之出来、殊ニへきくわひ等起り大キに致心配、且亦其砌り前方より召置候乳母追々乳少く相成、第一は人柄不宜事も有之、痲瘡食事第一の時分ニ乳不足の様相成甚込候儀ニ付、無抛乳母召替候筋ニ相決し段々尋方いたし候処、日置百姓娘よろしき乳筋之様承候付、早々申遣し召抱候処、乍病中不見知乳母にて吞付無之、是亦心配共何とも難申候処、其央ニへきく

わひなと起り弥大難渋いたし候得共、兎哉角当難相凌順痘相成無滞相濟候儀共、第一たツ宜敷強運之事と家内一統喜悦之事也、乍然右之通痲瘡のミならず色々煩も有之候付、今程は棄用等念入候事也、

一四月十五日より龜之介昇相立候事、尤紋所ニはれん上布調也、紋所ハ黄色ばれん朱塗ニ相調候事、

一兄弟の子共痲瘡ニ付三月十九日より引入致看病、順痘ニ而無滞兄弟共相濟候得共、龜之介ハ極小児ニ而痘瘡後之看病も有之、四月晦日より致出勤候処、五月二日晩より滑河母上様右之脚足御痛被為起、ひとく御難儀到来候付、兼而御療医之馬場玄仙・岩山玄伯猶又訳而御頼相成、御薬用篤手を尽し、拙者共も一向御看病いたし、勤場も頼合置滑河江致滞在御看病いたし候処、同月末ニ成り御痛は差而御引分ニも無之、只一向左りを下ニ遊し御打臥候儘ニ而、片時も右ニ御向被遊候事は不被為調御様体ニ而、誠ニ言語ニも難述御難儀之事ニ候、然共数日御伺様候付、拙者も六月初よりは致出勤候而御看病茂矢張相勤候事、

新建氏神堂記

自昔相伝、吾家有世所主祭、立祠於宅崇為氏神凡有五座、曰氏神、曰稻荷、曰山神、曰荒神、曰水神、而其体則實黒質小石、五神皆依一云、例祭冬至招中馬某令領祀事、至皇考顯高府君陸大監察與今第宅、享和二年壬戌広地於隣、先新此堂八月落成、五日招祝奉而登闕以妥厥靈、禱輒有応、近歳寢弊又欲興葺、時方靈社之遺烈往々如在、靡禱不驗、大口士民多蒙蔭庇、邑正胥議欲請建祠廟、崇贈神号、以歲時祀之者久矣、迨天保十三年壬寅国老調所廣郷承

今公論、遣近侍臣海老原清熙、勸民農業始自大口、其十二月邑正有村隼治等陳嘗所欲、以請清熙、且諾因吾族人新納時升有訪乎余、於是三日招会時升及伊地知季安等於宅以議其事遂煩季安博稽古編著撰忠元伝上下二卷比二十三日清熙発如江戸、上篇稍成、輒以往之、至翌二月朔日下篇又就、且別輯写

先公所世賜忠元書等為一卷、皆使時升附遂致之清熙以呈廣郷、廣郷以聞

公、五月清熙奉旨如京、時会大宮司本田出羽守親徳亦同在京、乃使親徳就神祇管領下部良芳、敬陳民情以奏請之、乃十一日 神宣贈忠元靈神、十三日又贈靈社号且親書社号以贈其額、使家老鈴鹿筑前守連胤等悉授親徳、於是清熙乃奉神体及神宣告文等、還抵大口眞廟竣事、七月廣郷還自江戸、九月復使清熙如大口卜地於邑之原田邨權現原、命工鳩材十月起功、甲辰二月祠廟方成距厩北十町余、而距墳廟東九町余、庭除高敞神殿廓廡至如齋厨、莫一不備、而宝扉両楹巧刻妙彫極為壯麗、時廣郷亦巡大口、乃三日味爽使親徳行迎享礼奉而登座以成民志、自師官吏蔭焉、費皆出于官、且命二宮勘解由世領祀事每歲必以春秋仲月及季夏初三行祭式、而其廟庭諸所陳具多係廣郷、清熙及督役官屬所各薦焉、但於其額成乎官貨云、初其經營令於邑民勿必靡農務以趨此役、士民子来惟競恐後、秦荆不蹊奮勇芟拓無独傷体、工亦竭材不日成之、遐適趨詣繼踵弗絶、各親其靡然廟堂寔可以妥威靈隆赫之英魂、咸欣々然莫不仰以感、公之仁徳、俯以欽神之忠誠、余及族属遙聞此盛時、踴躍歛

喜雖欲徑趨展拜廟下、竊於官務艱乎跋涉、乃謀親德四月為宮小祠以迎享法、十九日暫崇靈社於宅之旧堂、為晨夕遙拜處、而其九月攜男久修如大口邑、三日始謁廟下、獻祿拾斛永為祭田、兼供修營、伏惟是歲 官創社於春、久修兄弟稀痘於夏、行膽田畝、有年於秋、竣而回家萱堂七十、凡所禱求皆有庇驗、於是二十三日招親族義旧開之賀宴、如其詩歌亦鮮各不暢靈社所擁護焉、然而十月聞其未備使製神帳齋懸宝扁以酬愿矣、乙巳三月

靈社十二世孫新納久仰謹誌

尺余、旧堂乾向今卜為東向、而内設闕實之四祠、曰鬼神、曰諏訪、曰靈社、曰大黒、各扁其楹以識別之、而大黒蓋近世所拊甲子祭之、諏方乃靈社蹟大口農家世所宝藏、余獲拊此、倣木氏例初秋念六為其祭日、神器各備頗倍旧構、迺十九日復招親德處行其礼以登神座、伏祈公室隆盛家門榮昌永錫庇休以至無彊、庶乎吾後人願知概由、益致崇極以研汝誠、勿苟負神明之威德云爾、弘化三年丙午五月穀旦

公巡郡邑二十三日爇自鶴田臨大口廨、二十四日停輿於社庭、頃刻臨廟語廣鄉等、匪独神靈妥斯華潔、必子孫亦以感恩、四月八日

一地頭所之儀ニ付御用之儀候間明後廿日四時可被罷出旨
主計殿依御差函申達候、以上、

七月十八日

嶋津中務

新納次郎四郎殿

公竜駕舟還自柁城、余乃九日造 朝、私於近臣碇山久德獻折魚金五百疋以拜鴻恩、既又益懼旧堂就敗不以称敬仰之意、乃捐俵貲遂復一新、經始於四月落成於五月抑此举也雖固宿願幸獲逢靈社之享斯褒崇、故特極力欲以合祭、広於旧堂凡方尺余、設棟四阿以瓦葺之、如其礎壇四周葦石累崇可式尺、南北卷丈卷尺許、東西丈六

地頭所之儀ニ付御用之儀候間明後廿日四時可罷出旨、
主計殿依御差函被仰渡趣奉畏候、以上、

七月十八日

新納次郎四郎

嶋津中務殿

御用之儀候間明後廿一日四時可被罷出旨、主計殿依御差
差図申達候、以上、

七月十八日

嶋津中務

新納内藏殿

御用之儀候間明後廿一日四時可罷出旨、主計殿依御差
図被仰渡趣奉畏候、以上、

七月十九日

新納内藏

嶋津中務様

一廿日、四時罷出届申出候処、於敷舞台御用人右同人取
次を以左之通被仰渡候、

加久藤

地頭江

一芭蕉布二反ツ、

〔朱書〕
一本文人数金式両ツ、差上候由

加久藤郷士
宮内右源太

右同
黒木 亘

右同
萩原仙右衛門

右同
前田十郎右衛門

一芭蕉布一反ツ、

〔朱書〕
一本文人数金壹両ツ、差上候

加久藤郷士
西田主左衛門

右同
白坂勘之丞

右同所西郷村
中間門名頭 善助

右同東長江浦村
吉村門名頭 甚太郎

右は去ル戊午天保九年也御上納金之節、銘々依願金子差上

候為御褒美右之通被下候条、難有頂戴可為仕候、

右御格之通可申渡候、

七月

主計

一同廿一日、罷出候処於敷舞台同人取次を以左之通被仰渡候、

一芭蕉布式反

〔朱書〕
「本文金子式両差上候由」

新納内藏家来

松雪辰之助

右は〔天保九年也〕去戌年御上納金之節、依願金子差上候為御褒美右之通被下候条、難有頂戴可為仕候、

右御格之通可申渡候、

七月

主計

右之通被仰付候間、廿一日兩度之御礼口上書を以御三

役方并取次御用人江相廻置候事、

一八朔御規式之御次第用頼御用ニ而被仰渡候付、拔書置候、

川上式部

右敷舞台江奏者番出席、家ニ付進上之御太刀納之、

一中紙式束ツ、

義岡藏人

新納内藏

伊集院亘

諸地頭

新納衛守

右同断進上之中紙目錄納之、

但桂内記儀諸地頭引続、家ニ付進上物有之候事候得

共、当地地頭職被下置候付、其場ニ而進上物有之、

右之外当家見合ニ不相成候間前後略ス、

口上覚

〔朱書〕
「願之通被成御免候、

八月

石見

私嫡子新納次郎四郎事、当年拾三歳罷成申候間、角入御免被仰付被下度奉願候、尤初而之御目見相濟申候、

此旨被仰上可被下儀奉頼候、以上、

但御対客相濟申候、

辰八月十三日

新納内藏

右之通大身分触役所江差出置候処、即日御用人新納主
稅取次を以願之通被仰付候事、

右ニ付角入相濟候上、石見殿并主稅江次郎四郎御礼罷
出置候事、

口上覚

「願之通御暇被下候、

八月

石見

本文御暇差上候間十二月廿三日之場ニ書記置候事、

私事、長々足之痛有之段々尽手養生仕候得共、今以寸
切と全快不仕此涯湯治相応可仕旨療医より承申候間、
何卒三廻御暇被成下度奉願候、左様御座候ハ、以御蔭
市來温泉江差越得と入湯仕度奉存候、此等之趣被仰上
可被下儀奉願候、以上、

但療医証文相添差上申候、

八月十七日

新納内藏

証文

新納内藏事、長々足痛有之私療治仕候得共、今以寸切
と全快不仕此涯湯治相応可仕見及申候間、如斯御座候、
以上、

八月

馬場玄仙

右之通月番御用人新納主稅江差出置候処、翌十八日願
之通御暇被成下候事、

一者翁君の尊靈難有御取立相成、是迄度々代參為致候得
共、いまた拙者直參不致不本意之儀ニ付、是非此涯致
直參度、尤當時滑川御病氣等茂被為在候得共、却而御
祈願ニ茂相成可然存、第一療医馬場玄仙・岩山玄伯等
江申談且は頼入置、九月朔日より打立、次郎四郎并用
頼道鳴源五郎且有島六之進・伊東直左衛門等致誘引、
第一靈社其外諸社・諸寺江致參詣、用向急キ相仕廻、
同日九日致帰着候、其内滑川は御胸痛等も被為起御難儀
も為有之由候得共、先は御平和之方ニ被為成居難有儀
ニ奉存候事、

「天保十五年辰九月朔日より同九日迄」

我祖 耆翁君の靈魂神社ニ勸請し奉り、猶擁護も祈り願ひ度との事は、大口郷之士農ともに年来深く願ふ所なれ共いまた遂さりしに、此度

公の御免し有り、神祇の管領吉田家江願ひ告文もて

忠元靈社と勸請あり、同郷原田村之内權現原或は藤草ともいふ所に御陶もて社地定まり、則より御堂造立新初めあり、此とし天保十五年辰之春成就にて正遷宮ありし事共ハ別に委しく記し置ぬれば、爰にもらしぬ、

されは、我祖の功しをいさお斯まで褒美せられ、徳沢を万民感慕し、今度靈社にまで尊崇ありし喜びの事ともは、

筆にも言葉にも尽しかたく、直くに參詣し拜礼せん事をおもふといへとも、種々の事共にてさし延ひしか、

此月こそよかるべしと、悴の次郎四郎ともなひ辰の八月晦日鹿府出立の手当せし処、前夕より雨降り出し終日止されは、いたし方なく差延へ、明る朔日曉かたより降り止ミ、追々快晴なるへき模様なれば、卯之刻比我等父子出立、供廻りには譜代の臣竹村吉之助、湯之

尾郷士一往拘鎌田十藏、蒲生郷士同しく福島勇則、下

男にハ三右衛門・市左衛門・五郎などいふ者召列、我等父子乗馬して手鍵荷物などハ跡先きに遣し、又内用頼道嶋源五郎并ニ同し様出入の有馬六之進・伊東直左

衛門の三人も誘引し同刻に出立、我等ハ滑川江立寄り

母上様此内より御病氣、殊ニ頃日は猶また御煩も種々

ニあらせられし故、わきて御機嫌をも伺ひ候得は、昨日夜前共は至極御平和にて御安眠をもあらせられし由夫たけ御様子も能いらせられ何寄以うれしく奉存御暇

いたし、吉野筋罷越し關屋の茶屋江暫時休ミ、悴にハ幼少全体身弱之うへ当春痲瘡いたし、今以て全くの快

復に至らぬ故に束めしとも少し給へさせ、直くに白金坂を越し重富脇元へ休ミ、此所にて主従昼飯馬飼など

いたし、加治木別府川まで参りし処、譜代の家来淵脇甚右衛門といひし、加治木町網掛橋之涯江中宿の者出

迎ひ、また行先キ程なく大口家来組頭役弓削與右衛門、同役久保田市左衛門、横目白坂小之進、無役川畑源太

郎・四元小八・松坂平八など六人参り合、追ひ／＼販

やかに差越淵脇か宅江立寄り候得は、すくに酒やめしとも取出し段々もてなし候まゝ暫し隙取、また打立溝邊の内石原といふ所に暮時分参り着、人馬鎗所の模寄江一宿いたし、誘引の人々大口之者共までも賑々敷狭屋に一夜を明し侍りぬ、

二日、快晴、卯之刻比いつれも旅宿を出立、横川の町へ暫時休ミ、此所にてまた次郎四郎等へ束めしとも給へさせ直に打立参りしが、無程大口之家来多賀矢右衛門・黒木孫右衛門迎として参り合、また無程湯之尾町人馬繼所江まいり着けれハ、此所江おなしく大口より西田平七・牧山清兵衛・赤崎林八・黒木源七・同林八・東五兵衛・宮田七郎左衛門・橋口新四郎・上田庄八并ニ同所郷士新納武兵衛せがれ勘七郎などまいり居、なを賑々しく相成り皆昼飯や馬飼など仕廻急キ打立まいりし処、猶行さきく大口よりのむかひ参り合ひ惣勢五十人計に成り、大口之内小苗代原迄参りしかハ、此所江家来共より筵敷并へ湯茶など涌かし置、そばや芋など持出待迎へ居しまゝ暫し休ミ、夫より同所の薬

師堂へ参詣し

昔時

靈社の此堂に徘徊し、牡丹花下睡猫心飛蝶にありと衆書となされし事共咄しあひ、彼方此方と見侍りしに堂の左りに

(島津義弘)
惟新公後世御供道翁全徹上座桐野筑後

と彫刻したる自然石の高サ三尺計幅耆尺有余のありけるなともにして、また街道を行き

靈社御廟所の後ろ通り辺に而下馬いたし、遙に拜し奉りて申刻過る比、木之氏村仮屋迄伴ひし人々末々に至り滞りなく到着いたし侍りぬ、さて此度靈社に勧請ありし御事、我

君の御恵ミ山より高く、海よりも深く、宮殿は実に美材良工手を尽したる事共類稀也、されは昔も例し少々後代又あるへきにしあらねハ、我等類属はしめ譜代の臣へいふも更なり、大口郷之士農おしなへて喜ひあへる事限りなし、殊ニ人間難厄とせし痘瘡悴の二人も軽く滞りなく相済、こたひ参詣として爰に至りし事共、

木之氏西水流の家来ともや郷土の有村隼治・新納武兵衛なども喜ひにたへず、焼酎や玉子・山芋よふの物なと持寄りく、麁相ながらも二汁五菜計の料理菓子なとまてもてなし侍りしまゝ、亥子の刻にも及なん比皆打臥しぬ、かの隼治・武兵衛は古来訳ある者ともなれば中途まで出迎へ、それより付添ひ始終何事ニも世話いたし侍るなり、

また此度 靈社勸請に就而は、武運長久、家内安全、諸病恙除痲瘡輕安牛馬安穩の守護札相調へ置、望之者へはあたへべくとの事共所中より願ひの旨あり、鹿府惣大宮司本田出守方江調様の事共

靈社之社司二之宮勘解由より頼ミしかへ、彼本田差図あり、札本も出来せしまゝ鹿府士磯永孫四郎・伊地知喜十郎へ判木彫刻の事頼入しかへ、兩人にて寄進になり調ひ守札摺り方も出来候まゝ、此節持越し右之社司二之宮方江有村にて渡し侍りぬ、且又明三日我等父子靈社参詣可致ニ付神楽奏し奉り候事共はもとより神供神膳作法通奉献の事とも、隼治もて勘解由方江頼込ミ

侍りぬ、

三日快晴、辰之上刻比我等父子上下着用手纏とも為持行列とゞのひ、木の氏村諏方大明神へ参詣いたし拜礼相仕廻直ニ帰宿、また木之氏并西水流家来共凡五十人余皆上下着用いたさせ、都而先供にめし列我等父子も上下着用いたし乗馬にて猶行列相立

靈社へ参詣いたし、鳥居涯にて下馬いたし此所江二之宮勘解由出迎ひ居挨拶あり、直ニ先立にて参堂拜殿江着座なしぬ、まつ 御堂拜見せし処宮殿の結構聞しにましたる次第ハ中く筆に及はず、誠に昔時の御功し二百年來の今ニ至り斯まで輝きし事とも、只感涙を催す計なり、社地の勝景も実ニ御闔の程ありて、黒松・赤松の大きなるハ三人で尋取るとも届得かたきあり數十本大小立并ひ宮居神々たる為、是も筆には尽し得し、扱神供そなへ奉り、金子二百疋父子より進献し神楽を奏し祭式例之通りにて御幣并神酒とも拜戴し首尾能拜礼共相仕廻安心致しぬ、右終りて神号宣

命并告文等拜見且写し方いたし、また鹿府士磯永孫四

郎周徳より白鹿洞書院の銘扁額に調候壹枚、并此節從士の伊東直左衛門祐之牡丹花下睡猫の図画之額一枚寄進ニ付掛方とも差図いたし、また滑川母上様御病氣速に御快氣被為得候様との御立願にて、青銅百疋御進納有之候ニ付、是亦社司二之宮へ渡し神楽を奏し奉り御祈禱相勸候事也、右かた／＼相濟昼飯をも右堂社にて相仕廻緩々罷在候処、申刻時分相成り夫より同所山道通りいたし、長峯諏方大明神引続の愛宕社へも参詣し、三ヶ所共に賽銭奉納拝礼いたし、また山道通りにて祥雲寺内江出水之手

靈社の御廟所江参詣拝礼いたし、夫より水之手榊形辺にて惣供廻は相返し、相応之人数召列専念寺へ差越聲貞大姉の御牌并御石塔拝礼いたし候、当寺は此内出火にて寺家焼失本堂まで相残り、外ニ寺番罷居候木屋有之のミにて哀成次第なり、先年拙者初めて参詣の節、過去帳の内大姉の御法号或は寄付銀之事とも抜書置し今更誠に能仕合と存たる事共なり、それより成就寺へ参詣し是また清芳大姉御牌并御石塔へ拝礼共いたし、

当寺住持は当分鹿府江差越候留守なれば、小僧共より応対いたし候、夫より有村隼治所江参り緩々罷在、家藏之文書等披見いたし、種々饗応にて亥之刻時分罷立旅宿江帰りぬ、今日始終誘引の三士伴ひ侍りしなり、四日、快晴、辰刻比出宅、羽織袴乗馬にて大口井出水中宿の家来共弍拾人余召列、手鍬もたせ水の手へ罷通り大瑞院江差越、大島出羽守墳墓とも一覽いたし、夫より西原八幡宮江参詣し別当堀内良眼坊所江立寄ければ、良眼ハ当分鹿府江差越留守なれとも緩々休ミ、奉納物共一覽いたしそれより市山城江罷登り、得と見物いたし候、此所ハ市山村政所門の百姓二次右衛門といふ名主案内いたし候、此二次右衛門は先年拙者初めて当地江差越、同所見物之砌案内いたし候利右衛門といひ其時七十歳計成者の嫡子にて、当分二次右衛門も六十余ながら至而壯健成者にて、父子引続案内いたし候事共互ニ喜ひ、帰り掛二次右衛門所江立寄り暫く休ミ、夫より泉徳寺へ差越此所にてハ改服いたし、父子より金子百疋奉納いたし住持へ御仏事為相勸、都而拜

礼とも相仕廻又支度替いたし緩々罷在候処、住持より種々饗応いたし二汁五菜計の料理・菓子など差出し、もてなしにて内証向加勢として寺役人并羽月大聖寺小僧など参り居、且亦鹿府士当所江中宿名越平八ニも勝手へ参り居候付、皆共呼出し緩々咄共いたし、亥之刻比罷立候、今日御墓所拜礼とも仕廻候時分より小雨降り出し、今夜相応の雨にてせわしく候得共、木之氏村江帰宿直に打臥し候事、

五日快晴、父子并伴ひの三士も皆乗馬ニ而已之刻時分打立、家来共式拾人計召列有村隼治案内にて西水流拘地水損之場所見分いたし、夫より曾木天堂ヶ尾江見物として差越し候、此中途羽月の境船渡し川涯へ曾木郷士兩人案内として出迎居候、右は昨日有村より知人の郷士年寄へ内分しらせ置候故之よし也、左候而行先キ路傍へ立宿手当いたし相招候付、辞退いたし候得共強て申に任せ立寄候得は、年寄長谷川直記其外組頭横目など出迎ひ茶とも差出し、見事成飴とも茶受に出し、且亦耆尺余の鯉耆尾折柄取得候とて贈りに預り候、右

之直記は当所の宗廟悪瀬大明神の社司にて、宗廟には寺社方合力所ニ付直記案内にて参詣且ハ見分いたし、それより無程天堂ヶ尾へ参り着、緩々罷在諸方打詠め、それより羽月宮人村江去夏比被引移候大口手本城手之両御藏本へ差越、頃年大粧の御普請にて右之御藏下より船上下いたし候様、川筋瀬下ヶ相成候諸所之内御藏本より近きヨラの瀬など申難場、空船二そう乗り下し方有村肝いりにて相企候まゝ、我等父子ハ見物いたし、従士三人は乗試ミいたされ候、右等かたく見物いたし、同所江御内用計にて造立に成り候呉服并小間物店亭主は、鹿府下町人松村傳次郎と云者、表座敷借入相休ミ一同に昼飯共相仕廻、(最)模寄緩々見物いたし候也、名におふ滝の勝景ハ中く言葉も及ハねばもらしぬ、申刻過比打立いつれも馬を早め、羽月の内諏訪山・稻荷山へ暮時分やうく参り着、両所とも参詣いたし、又同郷園田の円通寺といふ禅宗あり、此寺の門の前に昔時(豊臣秀吉)殿下帰陣の節、
靈社伺公ありし場所と云ひ伝ふるあるよし承り及び、

右円通寺へ参り着候時分ははや暮過に相成、明松などして見物いたし候、寺家は至極の小庵、当時無住にて寺番老人住罷在、門の前ヲ老畦余空地あり、其所江水神勧請あり、此所則殿下の馬を立られたる場所と申伝ふ、尤今日我等とも往來の道筋関白道ととなへ、殿下帰路の道筋なるよし、

靈社大口城より御出張帰陣を賀せられたるは、相違あるましき場所と及愚案地利なり、それより西水流へ差越し弓削與右衛門所江立寄り、夕飯共給へ緩々休ミ、子之刻過時分木之氏へ帰宿直ニ打伏し候事、

六日、快晴、巳之刻時分仮屋庭にて木之氏居住郷士并家来共武芸見分いたし、引続近所野中にて鉄砲も見分いたし候、それより古木原稻荷社へ参詣いたす、此社は近き比有村隼治寄進ニ造替いたし候由にて新堂なり此堂之

鰯口

奉掛稻荷大明神御宝前薩州牛屎院大口郷木崎之村施

主島田親辰敬白

天正五年八月吉日

とあり、神体をもひそかに拝見するの所、周径二寸余ある鏡なり、かた／＼見物いたし夫より宇佐八幡宮江参詣す、此社は今般御内用計にて造替有之至極結構なり、当社江昔年

靈社の御寄附なされし大般若經あり、先年拙者一覽いたし奥書など少々写し置けれとも、又此度も奥書とも少々書とり緩々見物いたし、帰り掛木之氏村家来共榮勞少々見分いたし暮過帰宿也、

扱此度は前に記し置通り、毎日辰巳の刻より亥子の刻比迄徘徊かた／＼にて、木之氏村都而の榮勞見分等までハ行届かず候得共、此節ハ滑川母上様長々の御病氣、殊ニ追々御煩も重らせ候やうにて、何分行末安からざる御様体と伺ひ上候事故、早目に帰宅致度内存ありて前之ことく諸所拜参の事共仕廻、次には天堂ヶ尾などの

靈社御由緒の地など見物いたし候まゝ、明七日打立帰宅の手当也、されは家来中は申に及ハす、所郷士其外

知音の向より種々土産の品とも送り、あるハ焼酎・玉子類の品々ニ而もてなし、また新納武兵衛悴七郎は鹿府江物馴とし差越度旨武兵衛等より承り、可然儀と申談此節召列越賦なれば、今晚は武兵衛妻并妹も列立、また新納源之助妻等も土産品など持参にて、男女取り集り賑々敷、また此方よりもそれ／＼に置土産共見合方さま／＼にて深更に及び打臥し候事、

七日、快晴、今朝用或は見廻人多く、かた／＼にて大き取込ミやう／＼午之刻時分仕廻方相済、打立候まゝ家来共数多見送り致供、老幼婦女子は木之氏村境迄迄見送なり、それより拙者ともは水之手通りよりまた

／＼
靈社御堂へ参詣いたし、御廟所へも参り拝礼いたし、小苗代原より往還筋籠通り湯之尾人馬繼所江休ミ、此所にて次郎四郎昼飯とも仕廻、是より木之氏横目役立元藤七・松坂平右衛門兩人は鹿府迄付従ひ、また弓削與八・多賀安右衛門兩人は栗野迄付添ひ候筈にて、其余之家来共都而差返し、拙者共ハ栗野之様籠越候、其

段は先日内々申越置候故、栗野中宿家来玉置林右衛門悴福太郎并玉置正之進、且又郷士兩人も栗野境迄案内として出迎ひ居候まゝ、案内に任せ栗野の様差越、同所町中宿玉置林右衛門所江一宿いたし候也、当所江は大鐘時分着いたし候処、当所江は地頭横目安藤宇左衛門と申者用聞として着涯より一向付添ニ付、此者案内いたさせ徳元寺へ参詣、其外諸所模寄見物いたし、また当所之碓ほし踊之形は出来間しきやの旨申入候処、夜入地頭仮屋にて郷士拾四五人集り踊之形いたし候付是また一覽いたし候、夫れニ付役々并右之郷士中江金子百疋遣し置候、今晚亭主なとより焼酎とも差出しもてなし候まゝ、列合中寄合遅方ニ打臥候事、與八・安右衛門は暮時分罷立大口の様籠帰り候なり、
八日、快晴、今朝徳元寺・蓮乗院・盛伝庵列立茶袋其外色々銘々持参なり、所役ニも段々見廻、安藤宇左衛門も早朝より参り居何篇世話にて候、辰之刻時分出立、正若宮八幡江参詣いたし、此所にて社家之木瀬右京先

祖

惟新尊君より拝領いたし候御鍵并御鑿・御椀具など神
前江取寄セ拜見いたし、かた／＼にて夫より打立半里
計の所にて玉置兩人も相返し、夫より最初鹿府打立の
人数、外ニ大口より付添ひ候平右衛門・藤七・勘七郎

相加り、溝邊へ休ミ一同昼飯とも仕廻直ニ打立、大鐘
前比加治木迄参着、同所麓其外諸所模寄見物いたし、
暮比淵脇甚右衛門所江立宿いたし候得は、則酒や肴共
種々差出しもてなし候まゝ、いつれも緩々打寄り夕飯

とも仕廻、船出の都合待居の間暫し打臥居候処、丑之
刻時分順風宜敷候まゝ乗船いたし候様承り、いつれも
乗付候へは則出船、直ニ帆を引揚順風にて九日曉鹿府
上町津畑へ着船、拙者并直左衛門上陸、其外は宿元江

次郎四郎初罷帰候様申談し、下町津畑へ廻船、直左衛
門は中途ニ而分れ、拙者は滑川へ参上、母上様御機嫌
相伺ひ候処、当月朔日夕方より御胸先きより脇腹にか
け御痛被為起、五日之間ハ別而御難儀被遊候得共、昨

日ともより御和らきにて、夜前共ハ随分御安眠被遊候
由相伺ひ、少しハ安心申上候、御療医馬場玄仙・岩山

玄伯など毎日御窺申され候よし、暫時かた／＼承知い
たし五ツ前主従首尾能帰着いたし、有馬・道島にも拙
宅江立寄られ暫時にて銘々帰宅いたされ候事共なり、
右之ごとく

靈社御勸請結構の御宮殿相建、我
君の御恵ミは言葉にも尽しかたく、当春ハ子とも抱瘡
なども滞なく相済、此節父子初めて参詣いたし 慈母
芳樹君御齡ひ七拾と茂ならせられ、彼是類属中大慶の
事ともなりしまゝ、近き中かた／＼の祝ひ取はやし度

申談申候ぬ、
一中途迄為迎差越候人数
弓削與右衛門 久保田市左衛門
白坂小之進 川畑源太郎

四元小八 松坂平八
右六人加治木迄差越候、
多賀矢右衛門 黒木孫右衛門
右式人栗野迄之内幸田村迄、

新納勘七郎 西田平七

牧山清兵衛 赤崎甚八
黒木源七 黒木林八
東五兵衛 宮田七郎左衛門
橋口新四郎 上田庄八

右十人湯之尾迄、

黒木三左衛門 多賀嘉三次
弓削庄右衛門 弓削與八
馬場彦十 山元平太郎
黒川勘助 松坂平右衛門
内村仙良坊 立元藤七

右拾人馬越迄、

坂元萬吉 伊地知新右衛門
松下五兵衛 緒方金太郎
愛甲源助 飯田次八

右中宿郷士十六人小苗代原迄、

森田新助 芝原善太郎
四元助右衛門 岩城武右衛門
黒木孫八

右五人長尾迄

宮田新左衛門 森田善五郎
尾崎勘助 精松喜右衛門
松崎金五郎

右五人木之氏村白坂小之進居宅会所相立詰居候、

一六日於飯屋武芸致見分候人数

宮牟禮權右衛門 緒方金太郎
坂元萬吉 竹之内休左衛門
飯田次八 白坂小之進
立元庄八 黒木喜八
四元小八 川畑源太郎
精松喜右衛門 福山源助
内村仙良坊 黒木源七

一鉄砲人数之儀も右同断、外ニ拾人位出候得共略之、

諸到来品左之通、

〔朱書〕
「本文ニ付御返礼として品々御包物且又金子等も御見合夫々江

被出下置候事

九月三日

一茶沓包

同月三日

一同沓包

一柿沓盆

一栗沓盆・袋物一ツ・梨子式ツ

一鮎一苞・海老一苞

酒一樽・蜜一重

二之宮勘解由

大窪右衛門

細山八右衛門

中馬後藤

石神平太郎

牧澤次

岩崎覺左衛門

加藤吉藏

新納武兵衛

木之氏村郷土相中

一袋物沓ツ

一粟少々

一餅六拾三

一紙包沓ツ・柿八ツ

一多ひ八あみ

一木之子沓重

一柿沓重

一餅沓籠・木之子沓包

一紙包沓ツ・茶沓袋

海老六あみ

一紙包沓ツ

一茶沓粒・麦沓包

木之子沓包・菓子一袋

一千菓子一重・紙袋沓ツ

一餅五十

内村仙良坊

中村伴左衛門母

立元藤七

同庄八

白坂小之進

黒川喜太郎

古川八之進

古川市之進

泉徳寺

有村隼之助

有村隼之助

孫ミね

うら

羽月

大聖寺

久保田市左衛門

宮原眞太夫

一真綿少々・芋少々	弓削庄右衛門	一小紙包沓 <small>ツ</small> 但奥様江	芝原善太郎
一茶三袋・紙包 <small>式</small> ツ	成就寺	一袋物沓 <small>ツ</small>	黒木孫八
一猪沓斤・紙包沓 <small>ツ</small>	有島小太郎	一袋物沓 <small>ツ</small>	馬場與平次
一柿一盆	甲斐新兵衛	一右同 <small>式</small> ツ	川畑源太郎
一紙包 <small>式</small> ツ	白坂小之進	一右同沓 <small>ツ</small> 但奥様江	黒木孫八妻
一紙包沓 <small>ツ</small> ・栗一盆		一苧沓包	東五兵衛
一小紙包沓 <small>ツ</small> 但奥様江	中村伴左衛門	一袋物沓 <small>ツ</small>	立元庄八
一粟沓盆	四元助右衛門		上田庄右衛門
一茶沓包	郡山寺		川畑休作
	羽月社家		宮原新左衛門
一木之子一盃	筑地織衛	一袋物沓 <small>ツ</small>	
一紙包沓 <small>ツ</small>	久木元源藏		黒木甚八
一右同沓 <small>ツ</small>	久木元源助		中村小八
一紙袋沓 <small>ツ</small>	木之氏村郷土相中		白坂喜八
一糸 <small>ひ</small> 五あみ・袋物二 <small>ツ</small>	牧山小平次		宮田七郎左衛門
一袋物沓 <small>ツ</small> ・苧沓包	同 清兵衛		久木元源之丞
一袋物沓 <small>ツ</small>	黒川勘助		芝原勘助
			橋口新四郎

一袋物巻ッ	精松喜右衛門	一右同巻重	牧山小平次
一右同巻ッ	新納源之助	一粟少々	飯田仁助
一右同巻ッ	四元小金	一柿老盆	有村澤之助
一茶一包・平紙包一ッ	重久嘉三次	一小袋物巻ッ	荒武喜左衛門
一袋物巻ッ但次郎四郎様江	芝原善五郎姉	一右同式ッ	二之宮隼人
一右同巻ッ	黒木孫右衛門	九月七日	栗野
一右同式ッ	松坂平右衛門	一玉子并舞竹	久松矢左衛門
一右同巻ッ	松坂平太郎	同月同日	右同
一菓子老重・茶老袋	新納武兵衛	一茶大袋巻ッ	玉置福太郎
海老式れん	岩元伊八妻	同月同日	同庄之進
一茶式包	黒木源七	一茶三袋・漬物一重	徳元寺
一柿老盆	白坂喜八	右同	蓮乘院
一同老盆	宮牟禮權右衛門妻	一茶三袋ッ、	右同
一紙包式ッ但奥様江	多賀安右衛門	盛伝庵	
一袋物巻ッ	弓削與八	右之外少々人数有之候得共取込ニ而留後れ、又は加治	
一右同巻ッ	弓削與右衛門	木ニ而も淵脇より段々送物有之候得共略ス、	
一右同式ッ	黒木		
一あめ老重			

大口御越ニ付金錢仏

役人

竹村吉之助

一同老貫文

但青銅百疋代

右木之氏村郷士中江御残し土産

同

一同老貫文

但同断

右所役々江

同

一同老貫文

但同断

右二之宮勘解由江

九月朔日

一錢八百四拾八文 鹿兒島より加治木迄駄賃

同月同日

一同四百文

溝邊石原迄之宿札

同月三日

一同四貫文

但金貳步代

一同老貫文

御神楽料

右靈社様江御父上様より御寄進并御神楽料

四月四日

一同貳貫文

但金壹步代

右泉徳寺江御進納

同月六日

一同四貫文

但金貳步代

右大口之御家来中江御残し土産

九月六日

一同老貫文

右栗野ニ而踊御望ニ付所役々江

同

一同老貫文

右加治木より鹿兒島迄船賃

同

一同貳貫文

右加治木より鹿兒島迄船賃

同月七日

一同貳貫文

但金壹步代

右栗野ニ而踊御望ニ付所役々江

同月八日

一同貳貫文

但同断

右栗野御宿礼玉置林右衛門江

同月九日朝

一同老貫百文

右加治木より鹿兒島迄船賃

外ニ貳貫文位諸雜用有之候得共略ス、

合式拾貳貫三百四拾八文位

右弘化元年辰九月

御父子様大口江御越ニ付

諸抔等也、

竹村吉之助

神帳記

天保十五年甲辰春二月薩州伊佐郡大口創建

拙齋新納君之祠 神祇管領卜部朝臣良芳下

神宣賜号

忠元靈社夫

神之在世、忠武膽略不啻、顯赫于當時以為股肱爪牙、

矣天下後世仰其威德、稱其嘉績者藉々不已、況其遺

愛余沢之在邑士里民者乎其畏敬、嚮慕猶子之於父母

也、故其歲時之莫維馨之享莫不竭誠焉、而水旱疾疫

凡有求則必禱、莫不有

靈庇焉、宜乎其褒崇追榮益耀

神之威德也 新納久仰君者其十有二世之胄、而世為

本藩之名族、而古來往々早世者有之、独到 君之

皇考顯高君実始至七旬、而 令堂亦今年七十矣、先

是會藩中痘瘡大行 君有二令息予禱

神以求其冥助、及痘發而皆無恙矣、嗚呼 皇考・令

堂先後俱躋壽域、二令息并得稀痘、豈皆非

神靈之所庇庥哉、是最 君之所以感戴而歎欣也、

君猷神帳一具掛之壇前、以表丹悃亦寓賽願之意也、

因屬有裕錄其由於帳陰以垂久遠云、

天保十五年甲辰冬十月

史館肄業行助教事山田有裕謹撰

男有祐盥手拜書



〔朱書〕

「右戸帳辰十二月三日より奉掛候段、新納武兵衛より届申出

候事」

源氏物語一部

五拾四卷

内損物有之

外ニ

河海抄

上下二冊

弄花

四冊

花鳥余情

下一冊

但半本

源私聞

二冊

但半本

右は御先祖武藏守忠元君御手跡ニ而致伝来候得共、今般致附屬候、仍如件、

天保十五年十一月

新納内藏殿

北郷松翁

久珉印

右之通新納彌太右衛門時升取次ニ而預附屬候ニ付、左

之通返札差遣置候事、

源氏物語一部

五拾四卷

内損物有之

外ニ

河海抄

上下二冊

弄花

四冊

花鳥余情

下卷冊

但半本

源私聞

貳冊

但半本

右は先祖武藏守忠元手跡之由ニ而御伝来被成置候処、今般預御附屬忝致受納候、至子孫永年可致珍重藏仍如件、

天保十五年辰十一月

北郷松翁殿

新納内藏

久仰判

右源氏は忠元君御手跡と申伝へ、浄光明寺住持教淳致

所持居候を先年松翁殿御所望被成、是迄御所持之由ニ
而今般我等江御附属可被成依示致所望候、右は全体忠
元君之御手跡ニ無之候間、以来其段急度無伝失様可心
得事ニ候、尤忠元君御手跡ニ無之故致所望間敷哉ニも
相考候得共、脇方江誤伝候より茂当家江致所蔵、其段
無間違伝置候へ、猶可然との吟味ニ而右之通致附属置
候間、此段為後代記置候事、

右入箱蓋裏ニ左之通、

源氏物語五拾四卷

河海抄 二冊

花鳥余情 一冊

源氏聞書 三冊

弄花 四冊

此源氏物語は忠元君御手跡と申伝、浄光明寺住持教淳
致所持候を北郷松翁殿所望有之御所持之由、然に天保
十五年辰冬我等江御附属可被成旨承り現本致一覽候処
忠元君御手跡ニ無之、他人之筆ニ付致所望間敷と及吟
味候得共、脇方江誤伝候よりも当家江致所蔵、其段無

相違様急度伝置候へ、可然とて所望致格護置もの也、
仍而為後年此段記し置候事、

萬延元年申初秋

新納久仰判

一滑川母上様当五月初より御脚足の御痛つよく被為起、
其以前より段々腰・脚に御痛所も有之御弱りの上ニ、右
之通五月初よりの御痛何とも言語にも難述御事にて、
十月・霜月ニ相成猶又御痛等相増し、右を下ニ御敷御
寝被遊候儀は矢張片刻も御調不被遊、只左り一方御敷
通しにて中々御難儀共何とも有之難申上、其上ニ右
之御足時々御痛敷敷被為起候事も有之、無比類御痛に
て御臥敷被遊候方の御身半分は、中も恐ながら皮膚御
くされ被遊候程にて筆紙にも難願御事共、我々御付添
申上候而も実に難忍御難儀ニ而、只々何様之御煩ひニ
哉と奉恐入罷居候御事ニ而候、左候而十二月二日夜亥
之刻終ニ御養生不為叶、誠ニ以前文のとき御煩かた
く奉絶言語候事也、御寿六十八歳、御法号淨真院殿
眞相清鑒大姉と奉称候、福昌寺当住導師三仏寺ニ而御

葬送有之、御墓所大興寺御先塋ニ而候事、

口上覚

〔朱書〕
「願之通御暇被下候、

十一月

主計

私実母、此間より病氣有之難見放付添看病仕度御座候間、何卒日数十五日御暇被成下度奉願候、此旨被仰上可被下儀奉頼候、以上、

辰十一月十三日

新納内藏

右月番御用人嶋津市十郎江差出置候処、同十五日伊勢雅樂取次にて願之通被仰付候、左候而御暇中は地頭所之儀脇方江都合ニ不及段、御用人座書役より承届置候事、

放御座候間、又々十五日重御暇被成下度奉願候、此旨被仰上可被下儀奉頼候、以上、

十一月廿八日

新納内藏

右月番御用人嶋津市十郎江差出置候処、同廿九日願之通被仰付候事、

右御暇中十二月二日夜亥之刻母上様御死去付、翌三日忌中之御届申出残り日数差上候旨親類を以申出置候、左候而忌中は地頭所之儀同役島津藏人殿江相頼候事、一御自分事、忌中ニ而候得共御用差支候ニ付忌被成御免候条、明日より可被致出勤旨、石見殿依御差図申達候、以上、

十二月十九日

嶋津權五郎

新納内藏殿

口上覚

〔朱書〕
「願之通御暇被下候、

十一月

主計

私実母、此間より病氣有之、依願日数十五日看病御暇被下置候処、明廿九日迄ニ而日数筈合申候得共未難見

私事、忌中ニ而候得共御用差支候付忌被成御免候条、明日より出勤可致旨、石見殿依御差図被仰渡趣奉畏候、以上、

十二月十九日

新納内藏

鳴津權五郎様



但金象在銘金覆輪付

一小柄竿赤銅七子人形之細工色絵

一洗鮫

一鍬羽金着鶉目金

一柄糸下緒黒

一鞆昔唐皮

口上寛

私事、足之痛有之依願市來江三廻湯治御暇被下置候処、
内々無抛儀有之年内難差越ニ付御暇差上度奉存候、此
旨被仰上可被下儀奉頼候、以上、

十二月廿三日

新納内藏

右之通月番御用人鳴津權五郎江申出置候処、則日同人
取次を以石見殿被聞召置候段、口達ニ而被仰渡候書付
被相下候事、

口上寛

拵刀

一腰 無銘

長式尺三寸

一縁頭赤銅人形之細工色絵

一目貫同細工

一鏢鉄波ニ月兔之細工

右は新納内藏一昨四日御用人座廊下刀掛江掛置候処
相見得不申候付則御目付方江申出置、段々及糺方候
得共相知不申候付、此段御披露申上候、以上、
但廻知横目方江は同案を以申出候、

已正月六日

用頼代
長野源助

右之通御目付役所書役日高郷兵衛・長野源助より引合
御目付江入内見、廻り知横目鎌田與左衛門并御用人座
書役大久保倫左衛門銘々差出置候事、尤四日の日四ツ
後一斉罷出御用相仕廻可致退出出掛候処、不相見得則
其段御目付藤井綴喜江拵^つ振り旁委敷申出候処、則刻及
御門留御糺方有之候得共不相知、拙者儀は則宿元より

差替取寄致退城候事、

但書付略ス、

弘化二年乙巳正月より

新春之御吉慶不可有際限御座目出度申納候、

一 地頭所之儀ニ付御用之儀候間、明廿日四ツ時可被罷出
旨、石見殿依御差函申達候、以上、

且那樣益御安泰被遊御座恐悦奉存候、乍憚年始之御祝
詞奉申上度各様迄奉愚札候、御序之刻可然様御執成奉
頼上候、猶期永調之時候、恐惶謹言、

正月十九日

鳴津中務

新納内藏殿

新納内藏殿

畠山安次郎事

正月六日

改名 助右衛門

新納内藏様

義貫(花押)

地頭所之儀ニ付御用之儀候間明廿日可罷出旨、石見殿
依御差函被仰渡趣奉畏候、以上、

御侍中様

正月十九日

新納内藏

御披露

鳴津中務様

〔朱書〕
〔上封〕

新納内藏様

畠山助右衛門

右ニ付翌廿日罷出候処、石見殿より同人取次を以於敷

御取次

舞台、加久藤郷土萩原十左衛門事寺入被仰付置候得共、

御侍衆中様

大信院様御拾三廻忌御法事ニ付、御恩赦被仰付候旨被

参人々御中

仰渡候間、則日大目付以上并取次御用人江御礼廻いた

ウラニ從兵庫

し置候事、

二白奉申上候、今以余寒退兼候処、其御表 内藏様始
御家内御衆中様御揃益々御安泰 被遊御座候段、一同
喜悅安意仕候、誠其後は折々時候御窺可申上答候得共、
不得本意失敬打過候段眞平御高免可被遊候、次当方無
異罷在候間乍憚此段御休迄思召可被下候、然は親助右
衛門儀近年多病罷成御用難相勤候ニ付、私共江家督相
続仕度、且又太守様御通行之砌乍恐

御目見被為 仰付被下度段親共より願書差出置候処、
今般都而願之通御聞濟、不相替御用向可被為 仰付旨

蒙

尊命重々難有仕合奉存候、乍恐此段為御知奉申上度呈
愚札候、乍憚宜敷御取成被下度奉頼上候、恐惶謹言、

正月廿一日

安次郎事改名

畠山助右衛門

義貫(花押)

新納内藏様

御取次

御役人衆中様

尚々、乍恐御家内中様方江宜敷被仰上度奉希上候、本

文家督相続被仰付候ニ付テハ、名前之儀親共儀は助次
郎改名仕度旨願書差出候処、是亦願之通名前替御免被
仰付重疊難有仕合奉存上候、是亦為御知奉申上候、尚
親共より時候御伺、且ハ右等之趣別段以愚札可奉申上
答御座候得共、乍憚私共より宜敷可奉申上候様と申付
候、以上、

畠山助右衛門

新納内藏様

御取次

御侍衆中様

平安

ウラニ從兵庫

一筆啓上仕候、然は

畠山傳十郎様御養祖母貞院様御儀、昨夏より御不例
ニ被為在候付種々被為尽御手候得共、終ニ御養生不被
為叶旧臘二日御逝去被遊候由、畠山より為御知被下奉

驚入候、嘸御一同様御愁傷之程奉恐察候、乍恐於当地
茂御殘多奉存上候、右御弔奉申上度呈愚札候、乍憚宜
御取成被成下度奉頼上候、恐惶謹言

正月廿一日

安次郎事改名

畠山助右衛門

義貫(花押)

新納内藏様

御待中様

御披露

〔朱書〕
〔一上封〕

新納内藏様

畠山助右衛門

御取次

御侍衆中様

ウラニ

從兵庫

貴札致披見候、弥御堅勝被成御座珍重奉存候、拙者儀
無異儀罷在候、乍慮外御安意可給候、然は御隠居家督
之儀御願出被成候処、諸事先格之通被蒙尊命今般御通

行之砌

御目見を茂無滞被仰付御安堵被成候段、御吹聴之趣致
承知誠ニ以結構之御儀喜悦之至奉存候、右御報且御祝
詞為可申上如斯御座候、恐々謹言、

三月廿八日

新納内藏

久仰(花押)

畠山助右衛門様

御同氏助次郎様

参人々御中

副啓仕候、御家内様弥御安全、今般御隠居家督之儀誠
以千秋万歳目出度喜悦之至奉存候、於拙家茂家内一統
無事罷在候間御安意可給候、尚追々万端可申承閣筆仕
候、随而匳相之品ニ候得共、唐製手拭ニ御音信之印
迄致進覽申候間、御笑納被成置可給候、乍末筆御家内
様江茂今般之御祝詞御伝声御頼申上候、此等之趣猶御
歎旁申上度如斯御座候、恐々謹言、

三月廿八日

新納内藏

畠山助右衛門様

御同氏助次郎様

人々御中

一巳三月十三日御機嫌能

一筆致啓上候、然は畠山家之実母長々病氣之処、終ニ養生不相叶旧臘二日致死去候、右ニ付被仰聞御書面之趣忝致承知候、此節之仕合於拙家も誠以致迷惑候程は難述紙上候、御推察希入候、此等之段御礼旁如是御座候、恐々謹言、

三月廿八日

新納内藏

畠山助右衛門様

御同氏助次郎様

人々御中

上包美濃紙

畠山助右衛門様

新納内藏

御同氏助次郎様

参人々御中

但二通ニ相認差登せ候事、尤三月廿九日石見殿江相

付伊集院七之丞出府ニ付、右之人江相頼ミ差登せ

候事、

御着城、同廿一日六時玉里御茶屋御供揃ニ而御発駕、入來筋より菱刈・眞幸・日州表國分其外諸所被遊

御光越、夫より重富梅山別荘下より御乗船、磯御茶屋江御着船、御帰殿被遊候、右ニ付三月廿一日入來御泊、

廿二日鶴田御泊リニ而廿三日同所御立、鶴田之内熊越坂、宮之城求名村之内橋掛坂峠、曾木針持村之内矢立

松、曾木之内天堂ヶ尾等御野立ニ而、同所郷士海老原

喜左衛門所御休、又羽月之内遠目塚御野立ニ而、同晚

大口地頭飯屋御泊、廿四日御滞在ニ而同所御出、忠元

靈社御立場并洲原水天宮御立寄、曾木之瀧御見物、羽

月下之木場中宿松村傳次郎所御休ニ而御藏元等御見物

大口地頭飯屋江御帰宿、廿五日御滞在ニ而同所御出、

大口之内新村有村隼治木屋御立場并宇都宮八幡・羽月

白木観音等江御立寄、同所郷士永田儀兵衛所御休ニ而

大口地頭飯屋江御帰宿、廿六日同所御立、大口小苗代

原業師堂本城之内馬越原御野立、馬越地頭飯屋御休ニ

而、湯之尾・湯之元・栗野之内前之岡御野立等ニ而、

同所郷士川俣宗兵衛所江御泊、廿七日同所御立、栗野

之内熊之峰峠御野立ニ而吉松地頭飯屋江御休、吉田湯

之元并椿山馬關田之内小田水流御野立等ニ而、加久藤

地頭飯屋江御泊、同廿八日御滞在、朝六時極々御微行

ニ而加久藤御城内御野立江御出有之、夫より三徳所江

御立寄地神經之棗御聞被遊、三徳江金子三百疋被下置

夫より飯野之内野坂之上御野立ニ而、白鳥山御越御休

ニ而、又加久藤之内金丸御野立ニ而御帰館、廿九日御

立、諸所御野立等有之小林江御泊、御宿割之通諸所御

巡見、四月八日磯御茶屋江御帰殿被遊候、右御巡見之

内大口并地頭所加久藤之儀何茂不都合等無之、就中大

口靈社堂

御立場ニ而は緩々御見物被為在、段々難有 御意共有

之候段、御帰殿之上調所家より洩らし被為聞、誠ニ以

難有次第奉存候、右次第ニ付則九日御内々御肴料金子

五百疋進上仕、御側役碓山將曹殿江相付御礼申上候、

且調所家・碓山家江茂肴・酒共差遣し御礼申上置候事、

但委細は御巡見御次第并靈社御取立一卷ニ相見得候

事、

弘化二年巳二月より

入來筋より菱刈・眞幸・日州表其外諸所就

御光越御手当

一此節

〔朱書〕
一本文巳三月二日郡方江相頼宿次を以申越候事

御下国之上來月中旬方玉里御茶屋御逗留ニ而、夫より

同所御茶屋 御立、入來筋より菱刈・眞幸・日州表・

國分其外諸所江被遊 御光越、夫より重富梅山別荘下

より 御乗船ニ而磯御茶屋江御着船、同所御茶屋江

御小休ニ而可被遊

御帰殿旨被 仰出候段申來候条、可承向江可申渡候、

但 來月廿一日可被遊

御発駕旨被

仰出候、左候而當時柄之事候付精々御省略被仰付候付、

於向々精微致吟味何篇不及御入価様分而可申渡、尤奥計被仰付候旨を茂被仰付候、

二月

央

右之通已二月卅日友野市助以御取次被仰渡候、

一此節

御下国之上、三本御道具ニ而来月中旬比より玉里御茶屋

御逗留ニ而、夫より同所御茶屋

御立、入來筋菱刈・眞幸・日州表・國分諸所其外被遊

御光越、重富梅山別荘下より御乗船ニ而磯御茶屋下江

御着船、同所御茶屋江

御小休ニ而被遊

御帰殿箬候ニ付、奥計被仰付御手当等左之通、

一御光越ニ付

寶鏡院様より御使等御断、御一門方、御女中方、鳴津

和泉一列、大目付已上奥向伺御機嫌并進上物等不仕様

被仰付候、近郷寺院并役々等も同断、

一御通路筋之諸所地頭・領主并郷士年寄・与頭役人等も

進上物ニ不相及、伺御機嫌迄可申上候、

一御通路筋之諸所地頭・領主不及差越、御泊之所迎茂差

引人差越ニ不及、御供之御用部屋書役より可致差引候、

地頭代之儀御供之御側役江可被仰付候、

一御通路筋危所又は至而

御目障之場所は格別、其外之所は随分費無之様道作可

致取繕方候、尤

御光越ニ事寄自分失脚ニ而取計候場所も所調ニ取拵(しよとじのい)欵

宿々入用之器物類茂新規不相調候而可相済品茂、出錢

又は出米を以相調候儀共有之候而は如何之至候間、一

切右式之儀無之様、左候而右式之品は所有物之内借物

等ニ而可也ニ致用弁、折角費用不相掛様何篇氣を付候

様可取計候、

一御通路筋之諸郷夫仕等折角不相重、所中迷惑不相成様

万端取計候様被仰付候、

御光越先之儀はいづれニ茂每物大粧ニ成立事候間、御

供之面々御用ニ付人夫入用又は調物等有之節は、御用

部屋江申出取計候様被仰付候間、臨時夫仕等不相重様

万事氣を付可申候、

一 御行列廻其外諸向入用人馬并御供中人馬御吟味之訳有之、此節は奥計御雇揚ニ而人馬通シニ被仰付被相渡候間、諸郷寄人馬ニ不及候、

一 御休泊之郷々ニ而は差掛入用人馬も可有之候付、右之郷々江用心馬拾疋・用心夫三拾人可致用意置候、尤最寄郷より差出候儀は、其郷受持掛郡奉行引受ニ被仰付候、

一 御通路筋諸所境目より所横目兩人ツ、羽織股引ニ而御先払可相勤候、無役郷士之儀も八九人、与頭兩人相付同断之服合ニ而御先江御供可相勤候、私領之儀は前郷之者押通可相勤候、

但丸羽織・野羽織勝手次第可致着用候、

一 御通路筋之諸所役々并辻堅之郷士等麻上下ニ而相勤、

一 御逗留中は役々羽織・袴又は袴迄ニ而可相勤候、

一 御通路筋

御休 御小休之諸所迄
御座之間江所有物一種ツ、御棚飾いたし、御側役已上

江一汁二菜、士已上江一汁一菜、其已下江は東飯・染物類差出、御立場之依遠近、所賄差出候様被仰付筈候間、所付を以可申渡候間、其郷々ニ而御側役已上江湯漬、士已上江煮染類相付、其已下は東飯・香物之添ニ而可差出候、

一 御休 御小休之所食座奥向一席、士以上一席、与力一席、御小人・足輕・御口之者一席、又は家来・下人等一席、銘々席分張紙を以記置候様地頭并領主江可申渡候、

一 御休泊之諸所

御入 御立之節々詰居候郷士年寄・与頭役人等、麻上下ニ而御門外江可罷出候、

但御門内布砂、其外

御通路筋麓并町内可致立砂候、

一 於郷々里数半里内外山坂難涉之上り立等候へ、吞湯浦置、丹荷ニ水汲置茶碗十ヲ計、柄杓五六本相添差出置候様可有之候、

一 御泊之所ニ而は惣供廻江は都而上下押込、老人ニ式百文ツ、之旅込ニ而被差通、代払之儀は別段本占取払を

以大弘ニ被仰付候間、宿ニ野菜・薪等入付ニ不及候、
尤上卷汁二菜、下卷汁一菜ニ而可差出候、

一 於諸所酒・焼酎・取肴等差出候儀一切不相成候、

一 御休泊并御逗留之諸所表裏門共所郷士・私領ニ而は家
来、番両三人ツ、昼夜不明様繰廻可相勤候、御手道具
も老人ツ、繰廻可相勤候、

一 諸所御仮屋近辺火触可相廻、火消之儀も可申渡候、

御光越之諸所人々折角相慎可罷在候、就中軽キ者共江
は前以屹と可申付置候、

一 御逗留之諸所御膳所御用着・野菜・炭・薪・御茶道部
屋入用之分は寄物ニ而差遣候儀、郷々受持郡奉行引受
被仰付候、左候而油之儀は都而御徒目付方ニ而御買入
を以可被相渡候間、郷々ニ而其手当可致置候、取払郡

見廻・庄屋間より相勤、御徒目付より可致見分証印候、

一 御休泊并御立場諸所江草履・草鞋等差出候儀、且諸寄
物等受持掛郡奉行引受被仰付候、御駕籠者草鞋は大振
念入拵置候様、尤御小人頭より手当之儀筋々江相付可

申出候、

一 御前米之儀は御膳所より持越候様被仰付候、

一 御膳所御用米之儀は於所々時々御徒目付方ニ而御買入
被相渡、御代払之儀も御徒目付預分より相払候様被仰
付候、

一 御用蠟燭之儀は御徒目付預ニ而持越、向々入用申出候
ハ、御用部屋免許張紙見届相渡候様可被致候、

一 御用钱受取方之儀御徒目付差紙請取、引替ニ而手当相
成候向より相受取持越候様ニ被仰付候、

一 御徒目付方錢出入之儀

御光越相濟候上致差引、御用部屋江申出候様被仰付候
一 一身已下并家来・下人等亦は末々之者共江所役々并宿
主等江対し自儘等數儀共無之、御用之外徒徘徊不致様
頭人主人より可申付置候、

一 宿札之儀大目付已上中奉書堅二切、御側役以上横四切、
御納戸奉行・御小納戸頭取小奉書横四切、十人賦より
御小姓与迄小奉書六切、其以下割下ヶ宿札相認可差出
候、

一 御供廻郷士宿之儀は水夫入付、百姓宿は可成丈宿水夫

ニ而相濟候様可取計候、

卷里計

右之通被仰付候、尤当御時節柄之儀候間万端御手細之

下平坂之上

方ニ取計候様被仰付候ニ付、向々其心得を以致吟味、

御立場

有馬次郎右衛門拘地

御手当等不洩様可被申渡候、ヶ条外相洩候儀共は取調

半里十四町余

申出候様可被申渡候、此旨御差函ニ而候、以上、

御休

郡山之内一之宮御茶屋

巳二月

半里三町式間余

一此節

御野立

郡山之内御茶屋

御下国之上菱刈表其外諸所就

卷里六丁余

御光越、来月中旬方より玉里御茶屋

右同

御逗留、夫より御同断御茶屋

御野立

笹之段峠

御立ニ而左之通諸所

半里九町余

御休泊等可被遊

御野立

入來之内浮ヶ之口

御通行旨被

半里拾五丁余

仰出候、

御野立

右同松之元

一玉里御茶屋

卷里拾式丁三拾卷間

御発駕

卷里余

三月廿一日

御立場

黒岩御番所

御泊

入來院平馬飯屋

式拾三町余

御立場

入來副田村湯之元

半里拾三丁余

山崎之内

御野立

宇都山御茶屋之段

半里計

御立場

山崎地頭仮屋

拾四丁余

宮之城船木村之内

御野立

松之元

壹里三丁余

御休

鳴津圖書仮屋

拾五町貳拾九間

轟落

御見物所

宮之城之内

三拾四丁貳間

御立場

鳴津將監仮屋

佐志之内

壹里四丁拾六間

神子轟

御見物所

同廿二日

拾丁五拾三間

御泊

龜田郷土山下喜三右衛門所

壹里余 龜田之内

御野立

熊越坂

半里六丁余

御野立

鳴津圖書持飛地求名村之内

御野立

橋掛坂峠

半里五丁計

曾木針持村北郷作左衛門持

御野立

矢立原

壹里四丁余

曾木之内

御野立

天堂ヶ尾

式拾式丁

御休

曾木郷土海老原喜左衛門所

式拾式丁余

羽月之内

御野立

遠目塚

式拾三丁三拾六間

同廿三日

御泊

大口地頭飯屋

但御滞在

御出

拾七丁拾五間

御立場

忠元靈社

式拾八丁余

洲原

御立寄

水天宮

半里四丁余

御見物所

曾木之瀧

拾壹丁計

羽月之内下之木場中宿

御休

松村傳次郎所

壹里半余

廿四日

御帰宿

大口地頭飯屋

御出

式拾三丁余

大口村内新村

御立場

有村隼治木屋

拾壹丁三拾間余

大口

御立寄

八幡宇都宮

壹里半五丁式拾間余

羽月

御立寄

白木觀音

式拾丁五拾間余

御休 羽月郷士 永田儀兵衛所

壹里壹丁拾八間計

廿五日

御帰宿 大口地頭飯屋

御立

拾九丁四拾壹間

大口小苗代

御立場

拾七丁五拾間余

薬師堂

本城之内

御野立

拾六丁拾貳間計

馬越原

御休

壹里八丁四拾間

馬越地頭飯屋

湯之尾

御野立

壹里七丁三拾間余

湯之元

栗野之内

御野立

半里拾丁貳拾五間

前之岡

廿六日

御泊

栗野郷士 川俣宗兵衛所
三拾壹丁三拾間

栗野

御野立

壹里拾七丁余

熊之峰峠

御休

壹里半拾三丁五拾三間

吉松地頭飯屋

御野立

半里十三丁五拾六間

湯之元

馬關田之内

御野立

壹里壹丁七間

小田水流

廿七日

御泊 加久藤地頭飯屋

但御滞在

御出

式拾八丁計

加久藤之内

御野立

金丸

壹里計

飯野之内

御野立

野坂之上

式拾式丁式拾九間

御休

飯野白鳥山満足寺

廿八日

御帰宿

加久藤地頭飯屋

御立

壹里三丁

御休

飯野郷士秋丸唯右衛門所

三拾四丁

飯野大河平村之内

御野立

藤坂峠

壹里壹丁三拾間計

小林北方村之内

御野立

茶屋之平

壹里三丁五拾間

小林

御野立

辻之堂

式拾丁三拾七間

右同

御立場

雛守社

壹里六丁五十間余

廿九日

御泊

小林地頭飯屋

壹里拾六丁

高原廣原村之内

御野立 遠目塚

壹里貳拾間

高原

御野立 廣原村中

壹里四拾四間

右同

御立場 神徳院

貳拾九丁余

右同

御休 錫杖院

壹里貳拾四丁

御立場 高原地頭飯屋

壹里計

右同

御野立 鹿兒山原

貳拾七町拾間余

野尻

御野立 猿瀬之上

半里拾貳丁四拾間余

四月朔日

御泊 野尻地頭飯屋

半里拾壹丁余

野尻麓村之内

御野立 天ヶ谷

半里五丁三拾間余

右同紙屋村之内

御野立 今別府

半里拾壹丁三拾間計

御休 紙屋村郷士西田利左衛門所

壹里半三丁五拾間余

高岡

御立場 本永寺

壹里拾七丁四拾間

右同浦名村之内

御野立 橋上

式拾五丁拾四間

同二日

御泊 高岡地頭飯屋

御滞在

御出

壹里貳拾八丁五拾間計

御立場 御料本座十日町

半里四丁七間

右同深年村之内

御立場 吉祥院善載坊所

貳里貳間計

御休 右同法華嶽寺

三丁余

身投嶽

御見物所

壹里拾七丁余

高岡原手村之内同所郷士

御立場 長野九郎左衛門木屋

拾七丁五拾間計

吉祥院

御立場 吉載坊

貳里拾四丁五拾七間

同三日

御帰宿 高岡地頭飯屋

御出

拾三丁貳拾九間計

御立場 香積寺

五丁九間計

御立場 栗野宮

拾八丁拾貳間計

同四日

御帰宿 高岡地頭飯屋

御立

沓里八丁拾八間

右同浦之名村之内

御野立

上之八重

三拾四丁四拾間

去川定番

御休

二見休右衛門所

拾貳丁目

右同去川之内

御野立

後坂之上

沓里拾三丁拾八間計

諸縣之郡高城之内

御野立

國見峠

三拾壹町

高城之内

御野立

七瀬谷

沓里四丁

右同大山村之内

御野立

鳥居原

沓里拾丁六間

同五日

諸縣郡高城

御泊

地頭飯屋

沓里三丁五拾間余

都城之内

御野立

加世原

沓里五丁五拾六間

右同所之内

御立場

松原茶屋

沓里拾貳丁貳拾間余

右同所之内

御野立

元服

沓里五丁余

末吉之内

御野立

買手

沓里壹丁貳拾間

財部南俣村之内

御休

通山

壹里貳拾六丁十七間

福山村之内

御立場

花立原

壹里拾四丁五拾壹間

同六日

御泊

福山郷土厚地次兵衛所

貳拾六丁五拾間計

御立場

敷根之内

劍大明神之前

壹里三丁貳拾間

同七日

御泊

國分地頭飯屋

三拾丁

國分

御立場

弥勒院

三丁余

御立寄

八幡社

小田通り

三拾貳丁計

御野立

野久見田

二拾三四丁計

國分之内

御野立

瀧口峠

拾七町三拾六間

加治木

御休

船手

拾九丁余

帖佐之内

御野立

松原

半里拾丁余

重富

御小休

梅山別荘

同所より

御乗船

海上四里計

磯御茶屋下江

御着船

御上陸

御小休

磯御茶屋

同八日

御帰殿

一

調所笑左衛門殿

右は此節入來筋より菱刈表其外諸所就 御光越御附廻

被仰付候、左候而御先又は御跡より差越候儀時宜次第

ニ而、野装束勝手次第被仰付候条、此旨向々江可申渡

候、

三月

主計

海老原宗之丞

右は此節入來筋より菱刈表其外諸所就 御光越、調所

笑左衛門殿儀御附廻被仰付候付被召付候、左候而時宜

次第ニは御先又は御跡より被差越候条可申渡候、

但送人馬并御扶持米等都而御内用方計申付候、且野

装束勝手次第被仰付候、

三月

主計

碓山將曹

右此節 御下国之上入來筋より菱刈表其外江就

御光越御供被仰付候、此旨可承向々江可申渡候、

二月

御家老座

丸田 泰藏

菱刈七左衛門

山本孫兵衛

江田 平藏

染川喜三左衛門

植村如阿彌

御用部屋書役

伊東正兵衛

横目助

坂元彦五郎

御大工頭

阿蘇鐵矢

右は此節入來筋より菱刈表其外諸所就

御光越、調所笑左衛門殿儀御付廻被仰付候付被召付候、

左候而時宜次第ニハ御先又は御跡より被差越候条可申渡候、

但送人馬并御扶持米等都而御内用方計申付候、且野

装束勝手次第被仰付候、

三月

主計

御趣方書役助

上井甚七

右は此節入來筋より菱刈表其外諸所就

御光越、海老原宗之丞江被召付被差越候条可申渡候、

但送人馬并御扶持米等都而御内用方計申付候、且野

装束勝手次第申付候、

三月

主計

別紙之通被仰渡候間此段致通達候、以上、

巳三月十六日

伊集院織衛

右五通三月十八日郡方宿次便より遣ス、

一加久藤

伊集院織衛

外略ス、

右は此節諸所就

御光越、右之通地頭代被仰付候条可申渡候、

右之通昨十九日伊木七郎右衛門以御取次被仰渡候間、

可申渡旨御地頭御差函ニ而候、以上、

三月廿日

長野源助

加久藤

郷士年寄中

一此節入來筋より菱刈表諸所就

御光越、明廿一日六時玉里御茶屋江

御供揃

御休泊之通可被遊

御光越旨被

仰出候条、可承向江可申渡候、

三月廿日

主計

一 (島津寄興)
太守様明八日被遊

御帰殿答候間、此旨御役人限并詰衆江可致通達候、

四月七日

央

一 六月廿日、今晚今和泉屋敷御隠居方既少々出火ニ而候事、

一同廿一日、未之刻草牟田嶋津清太夫殿宅出火ニ而都而

焼失、火元ハ青山門人ニ而火術之仕合煙硝より火出候

由承候、于時

公玉里江御滞在中ニ而候事、

一 弘化二年乙巳七月廿二日酉上刻女子誕生、母は久敬女、

于今久仰三拾九歳、母久三十老歳なり、

同廿八日七夜相立候付、先規之通名を悦と付与いたし

候事、

一 御自分事、産穢ニ而候得共、御用差支候ニ付穢被成御

免候条、明日より可被致出勤旨、壹岐殿依御差図申達

候、以上、

七月廿六日

小笠原 轍

新納内藏殿

私事、産穢ニ而候得共御用差支候ニ付、穢被成御免候
条明日より出勤可仕旨、壹岐殿依御差図被仰渡候趣奉

畏候、以上、

七月廿六日

新納内藏

小笠原轍様

一 八月朔日、御規式ニ付家ニ付而は御礼罷出候事、

一於江戸七月廿八日若君様御誕生之御左右、八月十七日御到来、貴賤万歳を唱へ千秋とおとり候事、

一十月廿日、同席川上東馬殿奥方死去、同廿七日晝又同席鳴津藏人殿奥方死去の事、両所ながら甚不幸之事共なり、

〔朱書〕
「次郎九郎江遣候手紙」

一夜前は譜帳都而御持參被成、其内諸所御張紙も相付御咄も有之候得共、御存之通雑話ニ而何之御咄合も出来不申時宜ニ而、今朝致披見候処、一々至極之御考と別而幸存申候、右ニ付荒増ながら左之通申上候、

一中尾梅之儀は平之中馬場志和屋甚内居屋敷へ以前より有之候を、先年種子嶋次郎右衛門取次ニ而拙宅江もらひ受、当分迄も庭前江至而之古木有之、少々ツ、花も咲申候間、近年外ニ次木も仕置申候、志和屋屋敷は当分大迫源七前ニ而種子嶋氏内々取込被相成居、鈴木合壁ニ而御座候、

一はとふくかなの歌ニ付而は此内嫡家文書致拜見候処、

せむそ時代之記と題目有之一巻、珍敷古書附と存候間、
(伊地知季安)
書写小十郎江見せ申候処、至而賞翫いたし則細々考書

朱注いたし候由、然共いまた拙宅江は届不申候間、近日中取寄御覽ニ入可申候間、右巻中ニ相見得居候得は余程古歌ニ而忠元君より遙以前之事と存申候、其内嫡家本書入御覽置申候、

一忠增朝鮮渡海代初之御考、(細川忠興)羽柴忠興之書面御引合至極

御尤之儀と存申候、御書面之通御朱印も者翁君之儀は訳而太閤も被入念候事故、是は御勘考ニ相違有之間敷御同意ニ御座候、然共此一条は小十郎江も致吟味追而尚又可申候、

一偃月刀之儀も至極之御考付ニ而幸ニ御座候、就而は今和泉の方も熊五郎等江聞合頼込置候得共、いまた相分り不申候間、相知次第可申上候、其内先ツ御下草は致返納置候、左候而今和泉御取立ニ而磯御道具等すら〳〵と御譲渡相成候儀は、無御遠慮御認置被成度、差而秘事共見得不申候、又為存人も当分は相少之候間却而宜

敷は有之間敷哉、又少々差合候とも貴宅并拙宅江致秘藏置候ハ、安々と世上江取はやしも致し申間敷、当分は御考通被調置候儀念願之事ニ御座候、

一 当分貴方家譜御しらへ之由、是は一段之御事と大慶存申候、出来之上ハ拜見可致候、左候ハ、拙家ニも決して証拠相成儀も可有之と楽罷在候、

一 右御調ニ付而は、忠増渡海之御日記も御引合可被成候間、夜前御直ニ致返納候ハ、可然候処、取込ニ而気寄不申候間今日返納仕候、長々引留得と致拜見候、

一 御返納之譜帳諸所御張紙之儀得と考合、且は承合成行も有之候ハ、追々可申上候、

右は先ニ当用迄申上候、今朝も山一件世話事ニ而取込乍去難有勢付肝入申候、御同慶可給候、以上、

十一月十八日

新納内藏

新納次郎九郎殿

弘化三年丙午正月三日、御対面所江御出座御規式被遊御請候ニ付、家ニ付而之持参太刀相勤、御土器例之通頂戴

仕候事、

一 兵庫より年首之書状相届候、

新春之御吉慶不可有際限御座、重疊日出度申納候、

且那樣益御機嫌能為遊御超歳恐悦至極奉存候、乍恐右年始之御祝詞奉申上度捧愚札候、乍憚御序之刻可然様御執成被成下度奉頼上候、恐惶謹言、

正月二日

畠山助右衛門

義貫(花押)

新 内藏様

御侍衆中様

御披露

二 白奉申上候、今以余寒難退御座候処、其御地御家内御一統様御揃益々御機嫌能為遊御座、大悦之御儀ニ奉存上候、次ニ当方無異加寿仕候、乍恐此段御休意被遊

可被下候、誠ニ其後は打過別段寒中御窺之御状ニ而も差上可申筈ニ奉存候得共、彼是取紛乍存失礼仕、且は遠路相隔居候事故不思任御疎遠ニ相成背本意候儀、真平御高免被遊可被下候、尚乍恐御家内何れ茂様江宜敷

御祝詞被仰上被下度此段御願奉申上候、且又今暫は余寒強御座候間折角御自愛專一ニ奉存候、先は右奉申上度以愚札如斯御座候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

正月二日

畠山助右衛門

新内藏様

改年之御吉慶猶更不可及休期御座申納候、弥以御堅固被成御超歳珍重奉存候、拙者茂無異儀致加年候、乍慮外御安意可給候、先年始之御祝詞為可申上如是御座候、恐惶謹言、

正月廿八日

新納内藏

久仰(花押)

畠山助右衛門

参人々御中

追啓仕候、今以余寒去兼候得共、弥以御老父様無御障御家内様御安全被成御超歳珍重奉存候、誠ニ旧冬は御無音背本意候、猶更今暫之余寒折角御厭被成、御勤務度專一奉存候、将亦拙家内共江茂御伝筆被成下忝奉存候、右御礼深々申上候、御老父様江も右旁可然御取伝

可被下儀奉頼候、猶万旨重而可申上承候、以上、

(朱書)
一願之通被成御免候、

二月

豊後

口上覚

私嫡子新納次郎四郎事、当年拾五歳罷成申候間、前髪取御免被仰付被下度奉願候、尤初而之

御目見相濟申候、此等之趣被仰上可被下儀奉頼候、以上、

但御对客相濟申候、

午二月三日

新納内藏

本文大身分触役所へ差出候処、則日御張紙之通月番御用人宮之原主計取次を以御免被仰付候間、御首尾之兩人江礼廻為致候事、

一二月四日、御発駕被遊候事、

口上覚

私事、去月八日

(島津齊宣室)
芳蓮院様、

同廿三日

(島津家久)
慈眼院様

(島津)
慈

重要意
昭院様 御代參御代合之儀去月七日被仰渡候ニ付、其

段可申渡旨書役共江申付置候処、 芳蓮院様御代參御代合之儀申渡方取扱之書役失念いたし候を氣相付不申今更大形之至奉存候、依之奉伺差扣候間此旨被仰上可被下儀奉頼候、以上、

午三月

新納内藏

右之通月番御用人伊集院喜左衛門江差出勤方之儀相伺候処、不及遠慮旨則日被仰渡候事、

右ニ付同十九日左之通被仰渡候、

新納内藏

右は先月廿三日福昌寺江之

御代參安房殿病氣付、代申渡之書付致取扱候処、福昌寺江申渡相成候儀致失念候を氣不相付、大形之旨差扣被相伺候得共、不及御咎目候、向後可被入念候、

右可申渡候、

三月

伊織

右之通月番御用人入來院平馬取次を以被仰渡、書役田原十太郎事も同断被仰渡候事、

一四月五日、夜海老原宗之丞所出火ニ而内証之方板藏少々燃候得共、早々取消し候事、

一嫡家四郎久世君、先年当番頭御役被仰出候一件ニ付而は、段々拙者も致心配候事ニ而、其節御親父達眞老より御懇書被下置、拙者美目且は嫡家之御親書ニ而家宝可致事ニ付、此節小軸被任立現在見聞之彌太右衛門江跋文相望候処、左之通記し被遣候付致家宝置候事、

〔朱書〕
〔上封〕

新納次郎四郎様

新納浪江

無事

鹿兒島ニ而

湯之村より

尚々、乱筆御免可被下候、

弥無御故障可被成御毎勤候、珍重之御事ニ奉存候、私事も無異ニ罷居申候、然は先日は被入御念御細書被下、其上何よりの風りん御見次被下御志不浅忝奉存候、直ニ不差置一首仕うたせ申候歌に

武士の道こそ勤む身を持て

此浦嶋のおき菜とそなる

と仕浦人ともへ見せ申候、御物笑可被下候、且宿元難
波之義ニ付毎度御入来之上何篇御世話被成下候段承知
仕候、誠ニ御心配ながら、さき／＼家立延候処一片ニ
相考申候間、何角ニ付御頼申上候、左候而持切在之儀
ニ付而も手抜有之候而は難成事ニ御座候間、是又諸篇
行届候様御見聞御頼申上候、扱先達而之大風ハ鹿兒島
中諸所破損為有之筈と推察仕候、爰元之儀も同様之事
ニて皆大世話ニて御座候、先ハ旁之御礼申上度愚書を
以荒々如是御座候、以上、

南呂十八日

二白、此二品誠ニさせらざる物ながら手作の品ニ御座
候間御覽ニ入申候、御一笑可被下候、以上、

次郎四郎様



〔朱印〕

尚々、自由なから矢太右衛門ニも宜敷様御申置被下
度御頼申上候、此節ハ取紛書状もさし遣不申候、

御細書被下忝拜見仕候、寒氣相催候得共弥無御故障御

每勤之由、珍重御儀奉存候、私ニも相替申儀無御座候、

然ハ悴事も此節御役被仰付難有奉存候、右ニ付而は貴

君是迄之御世話不浅忝奉存候、誠ニ筆紙ニ尽しかたく

奉存候、則其御地江罷越御厚礼旁申上等御座候得共、

多病之私故其儀延引仕間御推免可被下候、左候而娘な

と儀ニ付而も旁御世話被成下、是亦重疊之ぎと朝暮難

忘忝奉存候、兎角私身ハ有而なき身と御推察可被下候、

何共さき／＼子共御宜様御取計被下度偏ニ御頼申上候

先ハ此段御礼申上度愚札を以如是御座候、以上、

〔朱書〕
「天保七年申」

十月廿四日

達眞

次郎四郎様

貴墨忝拜見仕候、寒冷御座候処益御安康被成御座珍重
御義奉存候、然ハ今般新納家結構被蒙 仰候ニ付、段
々被為入御念候御紙上之趣恐入承知仕候、御開運御時

節御到来にて、貴公様年来之御丹精相届恐悦奉存候、右ニ付御肴料百疋四郎殿より被下置、誠ニ以被為入御念候御義も厚難有拜受仕候、御礼宜敷御願申上候、扱又大夫碇山江は何茂此涯御挨拶ニ不及候、私より宜申置候、太夫江は往々上下之折兩種ニ御氣を被寄被遣候は、御忘却無之場ニ而御心切当り可申候、往々余計之事ニ候得共、実ニ此老人ニ候、時之奉行私江御相談は御受如此申上候、猶御勘考可被為成、此涯御挨拶ニは及不申候、私より宜申置候事御座候、其時のミよりは往々之事を尊ミ候風ニ候間、此段憚をかへりミず申上候、扱私小瘡後風邪氣杯ニ而押々出立之処、御道中筋吉悪不同にて江戸御着、大風邪兩日出勤ニ而引入候処、癩氣杯ニ而今以出勤不相調候、甚不埒之次第ニ候、しかし最早快候、無程罷出候心得ニ御座候、折角時候御厭被為成度、宿元之儀万々宜御願申上候、恐惶謹言、

〔朱書〕
「天保七年申」

十一月廿九日

岩下 亘

次郎四郎様

右一軸は宗家達眞君及ひ岩下亘道惠の書也、達眞君諱ハ久成浪江と称す、十九世の正統にて父は織部久寶、母ハ島津氏圖書久寶の女、天明二寅十二月十九日をして生る、次子なれ共兄菊千代夭亡により立て嗣けり、文化十三年七月詰衆ニ擢られ、文政四巳正月当番頭と為り職祿百四拾石を給ひ、明年正月穆佐地頭を拝す、天保六未二月病に依てカよて職を致す、七月家事を男久世ニ伝へ老て達眞と更められ、病を櫻島湯村に養ひ、同し八年酉四月廿一日卒す、年五拾六、俊良院殿達眞玄道大居士と法諡せり、庶族五郎右衛門久記女を娶て文化八未十一月廿二日男を生む、即久世君にて小字勇之介、冠して四郎と賜ひ、天保七申十月廿五日当番頭ニ擢せられ亦百四拾石を給ひ、明年三月二日坊泊地頭を授られ、同し十二年八月承襲の恩を拜し波門と更められ、其当番頭に調撰せらるゝや、余私かに姉婿亘等か時之要路に居れるを便りしば、周旋して陳情せしを、達眞翁深く感謝せられいと慰懃なる書を寄せ給へり、意趣は溢れて其詞に見ゆ、且道惠の書もその事に関涉す

るのミならず、翌月廿六日身まかりぬれハ臨終に近き筆にて、実に最末の訣牘にも当れバ併せて斯く棧軸し置なり、

弘化三年午五月

久仰（花押）

此巻也雖一時往復之小帖也、宗家系統之所係、是以久仰君蔵之為一卷、書其由縁於卷尾、而其所書亦是一個小伝、可謂補宗家之系譜者也、乃是久仰君厚於宗家以此足視其志矣、余也支屬之末裔、於宗家雖派別、遠本宗之敬不可忽焉、況昔日居清水街也、与宗家隣接、略与其家政之事已而、宗家輪奐余亦卜居、今宅雖居少隔亦非遠境視事如初、而達眞君告老、久世君承嗣之際、家祚稍向薄微、吾曹末族不得不為之憂也、特久仰君願復周旋保護宗家、遂令久世君得昇官受祿襲其統、可謂於宗家有力焉、達眞君亦深德之、小帖中其意瞭然、余適与其事能知其舉、則於此巻不可默而不記也、有子曰君子務本余亦言之、支屬於宗家祖考血肉之所出厚之者所謂務本之根源可忽諸因、不辭吾陋書其後

弘化三年丙午夏五月

宗末時升謹識

一 閏五月十七日、寶鏡院様御逝去ニ付則より御手当有之、同日夜五ツ過より寺社方江出勤夜分致退出候、翌十八日よりは一同早朝より出勤、夜入迄相詰候、尤表向は十九日辰刻御逝去之筋御弘め有之、同廿日福昌寺江御入即晚御内葬、廿三日御本葬有之我々三人共始終相勤候事、

一 七月廿五日、九ツ過

少将様御機嫌能御着城被遊候事、

一 八月朔日、御慎中ニ付御祝儀無之候事、

但太守様御忌服八月三日迄之御届ニ被為在候間、本行之通候事、

一 八月廿二日、祇園祭礼有之候事、

一 九月九日、少将様御対面所江

御出座被遊、月次御礼罷出候面々より諸士迄御目見被仰付候間、拙者も罷出候事、

一 弘化三年十月十五日より

少将様御事山川表其外海岸防禦之場所御巡見として御出立、御帰り掛指宿二月田江暫被遊御逗留御湯治之処、十一月二日朝御茶屋御焼失ニ付、同所湊御本亭江被遊御迎、同五日同所御立、谷山御一宿ニ而翌六日御機嫌能被遊御帰殿候事、

一 一昨二日四時分指宿二月田御茶屋御焼失ニ付

少将様同所湊御本亭江被遊 御迎、於御機嫌は御差障不被遊御座候段申来候、依之御一門方以下月次御礼罷出候面々等忽出仕ニ而伺

御機嫌申上候様、十一月四日壹岐殿より被仰渡候事、

一 同月廿五日、犬追物御視有之候事、

一 十二月十一日、於外御庭梅田家鎗術御視有之、次郎四

郎ニも罷出候事、

一 同十二日、於磯御茶屋草志し御視有之候由也、
(鹿)

弘化四年丁未正月より

口上覚

一 願之通御暇被下候、

二月

將曹

私事、此内より腰脚之痛有之段々薬用等仕候得共、今以寸切と全快不仕、此涯湯治相応可仕と療医より承申候間、何卒三廻御暇被成下度奉願候、左様御座候ハ、御蔭を以日當山温泉江差越得と入湯仕度奉存候、此等之趣被仰上可被下儀奉頼候、以上、

但療医証文相添差上申候、

未二月十四日

新納内藏

証文

新納内藏事、此内より腰脚之痛私療治仕候得共、今以

寸切と全快不仕此涯湯治相応可仕及見申候間、如斯御座候、以上、

未二月

岩山玄伯

右二月十四日月番御用人嶋津權五郎江差出置候処、同十八日願之通被仰付候旨同人取次ニ而被仰渡候事、右ニ付同月廿日より差越候届申出、三月十三日今晝罷帰候得共病氣ニ付名代を以御礼御届申上候段、月番御用人新納主税江用頼代道嶋源五郎を以申出置、内実ハ二月十五日より差越、三月十四日夕方罷帰候、右御暇中は地頭所嶋津藏人殿江相頼候、尤湯治江召列候人数はお久どの・次郎四郎・龜之介・お悦、下女宍人・乳母兩人・家来兩人・下男兩人、且新納瑞策誘いたし候而都合十三人ニ而候、左候而二月十五日八ツ前鹿府打立吉野筋差越、夜入五ツ時分加治木町中宿家来淵脇甚右衛門所江致一宿、惣荷物は船便より濱之市江家来神田橋清次郎へ才領為致差廻候、夜具等少々手廻之分馬宍尾兩掛宍荷差通し、翌十六日細雨ふり候得共押々同所打立日當山之様差越候処、昼時分より雨止ミ七時

分日當山江参着、郷士有川七左衛門所江致旅宿候、惣荷物ハ翌十七日相届候、左候而三月十三日迄滞在、同日昼時分打立又々差越候通惣荷物は残し置、清次郎江才領申付船便より持帰候手当いたし置、其外之人数は都而初発之通陸地罷帰り、加治木中宿淵脇所江暮前参着、一宿いたし翌十四日雨ふり候得共押而打立候処、無程晴上り晴天相成り、重富脇元より乗船ニ而大鐘時分鹿府下町津畑江着船、直ニ帰宅上下無差障致安心候事、

一 今和泉御隠居山松殿御事、三月九日御逝去之由候得共、来ル十五日

少将様御発駕之御事ニ付其後ニ相成御弘め有之手筈ニ而、同十六日御届相成候、御年七拾歳、御法名誠徳院殿山松壽榮大居士、拙者烏帽子親様ニ而候事、

一 三月十五日、少将様御発駕有之、次郎四郎等茂通路江罷出候、然処次郎四郎事少々風邪氣之様有之候処、追々根深く相成時疫症ニ而三月中は相応之煩ニ而、

岩山玄伯療治ニ而我々茂及心配候得共、四月ニ相成追々快方相向五月ニ及平快いたし候事、

一次郎四郎事四月朔日、犬追物稽古被仰付候事、

一龜之介四月朔日より時疫ニ感し、即よりバヒフの症ニ成り追々煩大切罷成候得共、四日之夜は少し平和ニ付折角手を尽し候得共、五日朝より相変し胸痛・背痛出合中々看病も難忍次第第二而、巳刻終ニ天亡僅五歳なり、是も至而性質よく誰人も慈愛いたさぬはなき生れ付ニ而、我等家内中は猶更愛情深かりし処、如斯仕合十方を失ひ迷惑の次第歎涙余りあり筆も尽し難し、剩此日は祖父

は祖父

(新納久敬)

唱岩君二十五年忌にならせ給ひ、御仏事の手当いたし

置候処、右之仕合何様成因縁なるや更にしらす、法名清心恵祥禅童子、葬興国寺光瑩、尔時久仰四拾壹歳、母三拾三歳にて厄難なれ、我等夫婦ニ代りて斯くも一朝の露と消しや、おもへは只々胸をさくのみ也、

石塔後背に

余第三子新納龜之介、生于天保十四年癸卯九月廿三日、夭于弘化四年丁未四月初五日、年僅五歳、葬興国寺先瑩之側、幼冲未教聡慧自然好玩簡冊、余奇之羨其苗秀、一朝忽哭幾喪明哀哉命哉、

新納久仰誌

位牌之後背ニ

余第三子新納龜之介、母久敬女、天保十四年癸卯九月廿三日生、弘化四年丁未四月五日夭、年五歳、葬興国寺先瑩之側

久仰誌

蒸暑難凌候得共、弥以御堅固可被成御每勤恐悦奉存候、先日御見舞被下難有、私ニは乍例御無沙汰仕候間何共申訳無御座候、平ニ御用捨被下度、扱は近々中御発足之御内命被為蒙候哉ニ今日風評承候、弥其通之御事ニ候哉、左候得は此内より御頼申上置候極内願之一条、いまた聞合之趣茂不申上工夫最中御座候処、尚更当惑仕申候、先ニ乍荒増家内困究之成行并川上家御心付之

向別紙之通申上置候、定而御繁雜ニも可有之奉察候得共、其内御都合有之欵、又は誰ぞ江御咄し残し置可被下哉、何分其段は芳慮を以不惡様御取計置被下候儀は相叶申間敷哉、尤以參御願可申上候得共先此段以手紙奉伺置候、書外以參可申上候、以上、

七月十二日

尚々、乍不都合万々一川上家之引次ニ願達仕事共候ハ、当月迄過分之借財都而利分等も相掛申事候間、三ヶ年分共相達事候得は別而難有奉存候、乍去此段は貴意次第可奉畏候間、御口述ハ程能可被成下候様偏に奉願候、

新納内藏

二階堂志津馬様

覚

御役料高等相込惣合

高頭四百石余

所務米百五拾九石位

右之通取納米有之、家内人数上下式拾人計致扶持飯料

差引雜用年々及不足、近年追屯候借財式拾貫目相成、利払等を初首尾合難相調、至極心痛仕居候次第ニ御座候、為御心得此旨荒増申上置候、

七月十二日

内藏

一川上家江御心付被仰付置候琉球砂糖一件

去年より五ヶ年

但壹ヶ年ニ付金貳百兩ツ、都合千兩之附屬ニ相成居候由、

右之通御座候由承申候間為御見合此段申上候、

右之通書付差越志津馬殿江打掛り置候、追々可然様取計給度頼込置候事、

一七月末方相成何様之御用候哉、御徒目付之内より拙者家内人数并持高等之儀細々聞合有之由極内々及承候付近比右之通志津馬殿江申入置候趣意と相違いたし候而は如何ニ付、左之通手扣書を以御徒目付山田四郎兵衛迄為見置、何となく咄しいたし置具候様極内頼置候、

覚

一持高百四拾石余

内三拾石神社并寺高ニ先年より召付置候、

三拾石脇方江取納米相渡置候、六石位損高

脇方名前

一高百五拾三石 先年より買地

一同百八拾石 御役料

合四百七拾石余

内書差引

現取納高四百四石余

式斗七升六合代

所務百拾石余

一家内人数上下式拾人計

内

上六人 但当春迄ハ七人

下女三四人 但乳母相込

役人夫婦

兩所三四人

下男三四人

右之飯料一日五合賦

但納米三拾六石位

一当内藏代御訴訟事并拜借等無之、

一先内藏病氣差起退役之願申出候節、為御心附一手売買

筋年数先キ被仰付置、当内藏代ニ相掛り金子百兩余被

成下候事、

吉凶物入

一忠元靈社御建立ニ付現高拾石寄付、

一右同断ニ付宅中江小堂造立勸請并右ニ相付候品々取繕

候入目、

一嫡子御直元服、

一先内藏病中死後并当内藏子共三人死去、

一大口持切在五六ヶ年以前より水損ニ而高頭拾石余今以

無納之事、

一畠山家合力并家来共取救之米錢過分之損數、

勤方

一当番頭五ヶ年、

一御小姓与番頭一篇之勤六ヶ年、

一御用人兼務八ヶ年、

一 当寺社奉行七ヶ年、

一 加久藤地頭職当年迄貳拾壹ヶ年、

但去末年より当末年迄拾三ヶ年狩夫銀差免置候、

一 他国勤無之、

一 近年追屯候借財貳拾貫目余、

未七月

一 八月十一日、嶋津登殿琉球江異国船防禦として大島迄

渡海、今日大雨降り候得共、貝太鼓ならし行列之真先

に大砲式挺押し行自宅出立、下町津畑より乗船勇々敷

次第なり、

一 御用之儀候間明廿五日四時可被罷出旨、笑左衛門殿依

御差函申達候、以上、

八月廿四日

伊集院喜左衛門

新納内藏殿

ノ

御用之儀候間明廿五日四時罷出旨、笑左衛門殿依御差

函被仰渡候趣奉畏候、以上、

八月廿四日

新納内藏

伊集院喜左衛門殿

ノ

右之通料紙杉原半切ニ相認切封ニ而差出候事、

一 廿五日、罷出喜左衛門江御届申出候処、於敷舞台同人

引進ニ而笑左衛門殿より左之通被仰付候、

大始良

新納内藏

右之通地頭所繰替被 仰付候、

八月

笑左衛門

右之通被仰付候、且今日大番頭嶋津求馬殿鹿屋江、同

役嶋津右門殿高山江繰替、御小姓与番頭菱刈李之介蒲

生地頭職、初而当番頭嶋津清太夫殿栗野、同断御側御

用人御側役兼務伊木七郎右衛門殿田布施江繰替被仰付

候事、

一 拙者儀繰替被仰付候間、笑左衛門殿・喜左衛門江御礼

廻迄ニ而候、左候而異国船御手当等之儀左之通相伺候、

口上覚

私事、今日大始良江地頭所繰替被仰付難有仕合奉存候、依之異国船御手当之儀承知仕度奉存候、此旨被仰上可被下儀奉頼候、以上、

八月廿五日

新納内藏

右之通異国船掛御用人伊勢雅楽江差遣置候処、同廿八日左之通被仰渡候、

一 通路并加勢人数御預御手当帳巻冊、

一 浦拘之諸所御手当帳一冊、

一 書付二通

新納内藏

右は地頭所繰替被仰付候ニ付、異国船御手当之儀承知仕度旨被申出右通相渡候間、入用之分写取猥不取散様可被相心得候、

右可申渡候、

八月

石見

右之通伊勢雅楽取次を以被仰渡候間、拜見いたし同廿

九日同人江返納致置候事、

一大始良郷士年寄・組頭等、此節繰替被仰付候為祝儀差越候間、九月四日目通江召出し一通挨拶之上盃共差遣候、左候而取締向左之通申達置候事、

大始良

郷士年寄江

今般我等江地頭職被仰付候ニ付、所中之儀従前々被仰渡置候御条目堅固ニ相守之、且又前々地頭申渡之趣無忘却役々申談、所中静謐之儀専心掛、年若面々学文武芸無油断、百姓共農業出精第一之事候条、万端聊無大形様可致沙汰候、

九月

内藏

今日差越候年寄助吉松早太、組頭池田小吉、地頭横目は先地頭之内代合有之、明合ニ而人柄伺等迄茂相济居候名前永田新右衛門、先地頭嶋津求馬殿より次渡有之候付今日申付候、則誓詞迄も見届候付右同断召出候、盃共遣候、左候而取締向之儀申渡、於役所取次道嶋源

五郎取持ニ而酒・飯共差出緩々為致候、且所中籠絵図
其外規定事書付を以申出候事、

一大始良郷惣廻拾三里十五町貳拾卷間、

惣高七千三百八拾九石壹斗九升七夕七才

内

郷士高四百八拾六石八斗三升七合四夕三才

内

貳百拾壹石八斗四升余 現高

貳百七拾四石九斗八升余 拘地高

貳石 寺高

七拾貳石三斗余

四拾七石貳斗余

三拾四石七斗余

貳拾八石四斗余

貳拾壹石四斗余

拾八石余

拾五石八斗余

拾四石九斗余

拾四石三斗余

拾三石貳斗余

拾壹石九斗余

拾壹石八斗余

拾壹石貳斗余

貳石

大始良村獅子目村

横山村庄屋役分地

壹石

濱田村右同

野里村庄屋并

西俣村庄屋役分地不見

南村者鎌田刑部家来より相勤

貳石行司役分地 但壹人

貳石触役分地 但壹人

未正月改

用夫六百八拾人

御軍役ニ付人数しらへ

川上佐左衛門

池田小吉

園田良之助

永嶋與兵衛

大山新之助跡

百四拾人

内 式人幼少・九人片輪者等

差引

百貳拾壹人

内

四拾九人

鉄砲与

七拾貳人

太刀与

合具足五領

川上休右衛門

池田仁右衛門

小山李右衛門

池田林之丞

川上佐左衛門

合南蛮鑄二領

池田仁右衛門

吉松早之進

合着込二領

池田仁右衛門

池田小吉

合鑓拾貳本

合長刀貳振

合征矢四腰

合弓貳拾張

合鉄砲五拾式挺

合陣笠十ヲ

合半首貳ツ

合馬具拾壹通

合馬壹疋

一大旗壹本

一小旗四本

一太鼓壹ツ

右三行地頭飯屋格護

所役

年寄四人

相談役貳人

与頭三人

横目貳人

地頭横目貳人

一 九月廿一日、於妙谷寺朝鮮戰死大施餓鬼被仰付候事、

一 十月八日より十日迄於福昌寺

(島津齊宣)

大慈院様御七回忌御法事有之候事、同日より指宿江御

湯治御光越被遊候事、

一 十一月十一日より十三日迄於花尾山頼朝公御法会有之

拙者事九日より差越相勤十四日帰着、同十八日於大乘

院御寄合、十二月二日於敷舞台御法楽有之始終相勤候

事、

一 筆啓上仕候、甚寒之節御座候処尊家様御揃益々御安

康可被遊御座欣悦奉存候、次ニ当方無異罷在候、乍憚

御安慮可被下候、然は親助次郎事去ル八月比より病氣

取合、一旦は全快之姿ニ罷成候得共、又々十月下旬比

より喘息病ニ相成、其上腫物出盛大キニ困入甚痛仕、

夫故余程身体疲労候事故家内一統大心配仕、当地之医

師は勿論大坂表之医術迄茂相伺服薬相用、家内一統打

寄介抱仕候得共、一向其詮無之右喘息段々差重養生不

相叶、終ニ先月廿七日未之刻死去仕候、誠に残念之至

候得共無是非次第ニ御座候、猶今暫寒氣難退御座候間

随分御保養專一ニ奉存候、先は右為御知奉申上度如斯

御座候、恐惶謹言、

十二月五日

島山助右衛門

義貫(花押)

新納内藏様